

モンゴル帝国のユーラシア興隆史

2017 年度 インターゼミ アジアダイナミズム班

学部生	一杉	波音
	玉木	真悟
	馬	玉鑫

大学院生	指宿	ひとみ
	光永	和弘

卒業生	山口	夏実
	越田	辰宏

指導教員	金	美徳
	水盛	涼一

モンゴル帝国のユーラシア興隆史

目次

はじめに.....	10
第1章 13世紀前半 初代チンギス・カーンの時代.....	13
～モンゴル帝国の樹立と拡張～	
第1節 モンゴル帝国の成立	
第2節 戦略と戦術	
第3節 残したもの	
第4節 現代との繋がり	
第2章 13世紀後半 5代クビライ・カーンの時代.....	18
～モンゴル帝国の変容と安定～	
第1節 モンゴル帝国と朝鮮「婚姻関係・政治体制による統治」	
第1項 モンゴル帝国と高麗国の抗戦から講和	
第2項 高麗国の属国化と姻戚関係による統治	
第3項 モンゴル帝国・トルガクの派遣とケシク参入の仕組みによる統治	
第4項 一国であり一省の高麗国	
第2節 モンゴル帝国と日本の関係性	
第1項 モンゴル帝国と日本の接点	
第2項 元寇におけるモンゴル・高麗国の視点	
第3項 モンゴル帝国の貿易と日本	
第4項 日本とベトナムへの元寇の関連性	

第3章 モンゴル帝国の国家運営・・・・・・・・・・・・・・・・・・34

第1節 元と4カン国の成立

第2節 拡大を支えた組織運営構造

- 第1項 モンゴル帝国を結びつける「チンギス統原理」
- 第2項 モンゴル帝国民の行動を司る「ヤサ」
- 第3項 共同体としての意思決定機関「クリルタイ」
- 第4項 安全保障策としての「族外婚制度」
- 第5項 効率的組織運営「千戸制」
- 第6項 縦横の連帯を育む「ケシク」

第3節 多様な民族のモンゴル帝国への貢献

- 第1項 ウイグルもルーツは遊牧民
- 第2項 互恵関係で結ばれ、広がる共同体
- 第3項 多言語と外地情報に通じ、交渉力にも優れたグローバル人材

第4節 モンゴル帝国の拡大を促進したオゴデイの政治

第5節 クビライ・カーンのチベット仏教受容政策：問題解決力と情報力

第4章 現代中国におけるモンゴル・・・・・・・・・・・・・・・・・・47

第1節 中国の歴史教科書から見るチンギス・カーンとモンゴル帝国

- 第1項 中国の歴史教科書について
- 第2項 大学生むけ教科書
- 第3項 高校生むけ教科書

第2節 中国の歴史書にみる琉球

第3節 中国人におけるモンゴル観

第5章 中華統治の正統性と共通善・・・・・・・・・・・・・・60

～漢民族ではなく中華民族であることの意味と意義～

第1節 「西洋」に比した「東洋」の行動様式に関する問題意識

第2節 東西世界の論理・価値観とグローバル課題

第3節 歴代中国王朝の正統性要件の意味と東アジア世界構成員の処し方

第4節 夷狄モンゴル帝国の統治原理～契丹社会文化の影響

第5節 日本の歴史と東アジア世界の地域概念

第6節 まとめとして

第6章 おわりに ～モンゴル帝国が現代にもたらすもの・・・・・・・・・・・・72

第1節 地球規模の天災と大元ウルスの解体

第2節 ポストモンゴル期の帝国

第3節 経済重視による「ゆるやかな統治」

第4節 「イル（仲間）になる」思想と「文化不干涉」に学ぶ

年表	76
参考文献	77
2017 年アジアダイナミズム班 年間スケジュール.....	80
2017 年アジアダイナミズム班 フィールドワークスケジュール.....	81
2017 年アジアダイナミズム班 フィールドワーク報告要旨.....	83
発表資料パワーポイント.....	87
謝辞.....	111

執筆担当

はじめに	指宿 ひとみ
第1章	一杉 波音
第2章	光永 和弘
第3章	指宿 ひとみ・山口 夏実
第4章	馬 玉鑫
第5章	越田 辰宏
第6章	光永 和弘・玉木 真悟

はじめに

今、我々の社会は構造転換を迫られながら、大きな矛盾の中にある。2015年、国連サミットで採択された「持続可能な開発のための2030アジェンダ」では、すべての国々の豊かさを追求しながら、地球を守っていくための17の目標が掲げられている。これを実現するには、世界が手を携えて取り組むことが不可欠であり、17番目の目標には、まさにそのことが掲げられている。

しかし、実社会での様相は全く異なっている。内向的なナショナリズムが吹き荒れている。アメリカン・ファーストをうたうトランプの想定外の大統領就任とパリ協定やTPP（環太平洋パートナーシップ協定）からの離脱、イギリスのブレグジットとこれに端を発したカタルーニャをはじめとする各地の独立問題、イスラム国台頭と頻発するテロによる宗教差別問題、シリア難民のヨーロッパ受け入れ問題、各国でくすぶる領土問題や民族・宗教対立等々、グローバリズムとは逆行している。身近に拡大していく格差と不平等、脅かされる安全の前では、地球市民として連帯して進むべきという目標も建前でしかなく、我々は、他者に対立し、負かしたり、犠牲にしたりすることでしか、自己の豊かさや発展を手中に収めることができないのだろうか。

図1 持続可能な開発目標（SDGs）17の分野別目標



出典：

http://www.unic.or.jp/activities/economic_social_development/sustainable_development/2030agenda/

戦いの繰り返しで紡がれてきた我々の歴史の中で、「パクス・モンゴリカ」（ラテン語: Pax Mongolica, 「モンゴルの平和」の意）と呼ばれ、ひととき異彩を放つ、平和で安定した時代がある。13 世紀から 14 世紀にわたり、モンゴル帝国が覇権を拡大し、広大なユーラシア大陸を支配していた時代である。

その領域は 3,300 万km²に至り、地球上の陸地の約 25%を占める程であった。現代に照らし合わせると、西は東ヨーロッパ・トルコ・シリア、南はアフガニスタン・チベット・ミャンマー、東は中国・朝鮮半島などに及んだ。この時代、ユーラシア大陸が統一されたことで、交易ネットワークが形成され、人と物が行き交い、経済や文化が大きく発展している。

民族、宗教、言語や生活習慣の異なる多様な者たちが、一つの帝国の下で、なぜ平和で安定した暮らしをえることができたのか。そこには、我々が現在の混迷から抜け出し、よりよい方向へ進むためのヒントがあるはずである。

図2 モンゴル帝国の最大領域



出典：<https://www.sekainorekisi.com>

14 世紀後半のモンゴル帝国消滅以降も、ポストモンゴル期 16 世紀初めころまで、モンゴル帝国時代の名残は続いていく。ポストモンゴル期は、モンゴル帝国には及ばないが、モンゴル帝国以前にはあり得なかった大きな帝国が多数出現している。明帝国、大清帝国、オスマン帝国、ムガル帝国、ロシア帝国などがそれにあたる。

これら帝国は、モンゴル帝国消滅以降も、チンギス・カーンの血が脈々と受け継がれ、その末裔が統治していた。これら帝国は、それぞれの革命で消滅する 20 世紀まで続くこととなる。帝国が減った後も、表に裏に影響したカーンの系譜とは何だったのだろうか。

そして、明、清の流れをくむ中国は、つい先日まで「世界の工場」と呼ばれ、低コストの生産拠点という位置づけに過ぎなかったが、いまやその消費・経済力、政治力から、世界が無視できない最も強大な存在の一つとなっている。

その中国が掲げる経済圏構想「一带一路」の領域と流通ルートは、まさにモンゴル帝国のそれと重なる。「一帯」とは「シルクロード経済ベルト」を指し、中国から中央アジアを抜けて、ドイツ、ロシアへとつながる。「一路」すなわち「21世紀海上シルクロード」は、中国沿岸部から、南シナ海、インド洋、紅海、地中海を抜けて、ヨーロッパへつながる。中国は、東南アジア、南アジア、中央アジア、西アジア、そしてロシア、アフリカ、ヨーロッパを物流と交易で結び、その覇権を盤石なものにしようとしている。ナショナリズムの風が吹きさぶ中、我々は再び平和で安定した時代を創出することができるのだろうか。

モンゴル帝国の発展と国家運営を支えた組織やシステムに学び、我々が持続的に発展するためにとるべき戦略や行動について考えたい。

図3 中国「一带一路」構想



出典：<https://headlines.yahoo.co.jp/hl?a=20150511-00000006-wordleaf-cn.view-001>

<注記>

※カーン／ハーンは皇帝、カン／ハンは王の意。モンゴル語、ペルシア語などの言語により異なる表記・音が混在して伝わっている。本論文では、カーン、カンを使用する。

※4 カン国のうち、3 カン国の国名は、引用した図表によって表記に揺らぎがあるが、下記の通り対応している。オゴデイ・カン（ハン）国は 4 カン国に分裂後すぐに消滅したため、同様の呼称は見られない。ウルスとは、遊牧民における国家の意。

ーキプチャク・カン（ハン）国＝ジョチ・ウルス

ーチャガタイ・カン（ハン）国＝チャガタイ・ウルス

ーイル・カン（ハン）国＝フレグ・ウルス

第1章 13世紀前半 初代チンギス・カーンの時代～モンゴル帝国の樹立と拡張～

第1節 モンゴル帝国の樹立

モンゴル帝国は1206年にクリルタイ（部族長会議）でテムジン改めチンギス・カーンを初代皇帝とし成立した。正式名称は「イェケ・モンゴル・ウルス」であり直訳で「大モンゴル国」である。とはいえ「ウルス」というこの言葉は「国」と言う意味より「人の集まり」という意味の方が強い。カーンあるいはハーンの意味は皇帝を意味し、カンあるいはハンは王を意味する言葉である。

チンギス・カーンが高原内の様々の部族をまとめ大国を成立することができたのは「イルとなる」という言葉が重要である。「イルとなる」とはモンゴル語で「仲間になる」という意味がある。

チンギス・カーンの生年には複数の説があり、『蒙韃備録』1154年、『集史』1155年、『元史』1162年、『聖武親征録』1167年のように史料によって異なるが、没年は1227年で統一されている。だが死因と死んだ場所についても不明な状態である。史料によっての生年の違いがあるのは当時のモンゴル帝国はユーラシア大陸を東から西にかけ大きく支配していたため東西で異なる暦を使用していたからである。東西で共通した暦を使用し始めたのは元の時代である。

アウラガ遺跡にあるチンギス・カーンの宮殿は豪華絢爛なイメージの宮殿ではなく、質実剛健でレンガや土で造られた飾り付けのない天幕の宮殿に住んでいたことが分かっている。このような生活の仕方は古くからの遊牧民の知恵の影響である。

第2節 戦略と戦術

テムジンがチンギス・カーンと称し、モンゴル帝国を樹立した後も、数多くの侵略を成功させることができたのは、「騎馬軍団の機動力向上」、「鉄資源の安定確保」、「高原内生産の活性化」の3つの戦略、遊牧リテラシーに基づく「シフト」「コストダウン」「モバイル」「リスク回避」「ネットワーク」の5つの戦術を上手に駆使したからである。

そして5つの戦術に共通して遊牧民の知恵がある。チンギス・カーンが日頃に培った遊牧生活の生きる知恵として、この5つの戦術などをまとめた『ト・ワンの教え』（1851年）という書がある。この知恵は数千年前からの遊牧生活のエッセンスとして遊牧社会のリーダーが修めるべき事柄ばかりである。数千年前からあるにも関わらずチンギス・カーンがこれほどの大国を築くことができたのは高い遊牧リテラシーがあったからである。“遊牧リテラシーとは草原力の変化に応じて的確な行動をとれる能力と、遊牧知を理解し適切に運用できる能力をいう。”（白石，2011，p.205）

モンゴル高原で育った馬は、千戸制でモンゴル帝国の軍事力の大部分を担った騎馬軍団であり、また駅伝制でも活躍を見せた。モンゴル帝国時代には「ウラチ」と呼ばれる、馬を育て、その能力の限界まで鍛えることを専門にしている調教師がいた。現代のモンゴルではこの調教師のことを「オヤーチ」と言う。鍛えられた馬からなる「騎馬軍団の機動力向上」の

さらなる知恵として、遠征時には馬の食事制限をすることで余分な脂肪を落とす。長距離を走っても汗が出ず、馬が遠征に耐えることができる。また、チンギス・カーンは従来の防具から無駄などを除き、3分の1に軽量化した。軽装騎兵となることで「騎馬軍団の機動力向上」を図った。

チンギス・カーンは「コストダウン」戦術に「鉄資源の安定確保」を結び合わせた。不純物が多く、製錬する技術と設備が不十分であった鉄鉱石を、製錬を経た加工しやすい鉄インゴットにして運ぶことで、僅かな無駄を減らしたのである。鉄鉱石と鉄インゴットの違いは、石などの不純物が混じっている鉄が鉄鉱石で、鉄鉱石をかまどなどで焼き加工した鉄だけの物が鉄インゴットである。同じ重量を運ぶ際に鉄鉱石より鉄インゴットで運ぶ方が、無駄が少なくなり、コストダウン戦術に繋がるのである。

しかしながら、鉄資源の供給の多くを隣国の金に頼っていた。そのためチンギス・カーンは西夏などの複数の鉄資源の産地を占領した。金に頼っていた一極集中型の危険性を回避したことは「リスク回避」戦術であり、これが「鉄資源の安定確保」にも繋がったのである。また、穀物も金に頼っていたため、これも同様に主に西方に「リスク回避」を行ったのである。

チンギス・カーンは、モンゴル高原内に道路を整備した。その道路に沿って、軍事拠点や小規模の生産拠点を規則的に配置し、生産拠点どうしを道で繋ぐことで、物資運搬と情報伝達の「ネットワーク」をモンゴル高原内に構築していった。この道をつたい、モンゴル高原内での国外からの技術者の行き来が活発化し、「高原内生産の活性化」に繋がり、モンゴル高原内が豊かになったのである。

また、対外侵略の際にも、高原内にある道は活躍を見せた。高原内には規則的に軍事拠点が置かれ、軍事拠点間の距離は500～600キロメートルであった。当時の軍隊の行軍速度は一日に20キロメートルであり、次の軍事拠点への移動に一月かかる。軍事拠点が規則的に置かれていることにより、軍隊を計画的に進軍させることができるのである。

情報伝達の「ネットワーク」も並行して使うことにより、敵国の情報を得た。相手が軍事的に弱っている時、または内情が混乱している時を狙って攻め込む。これにより、敗北する「リスク回避」を図り、容易に戦争に勝利することができたのである。チンギス・カーンは情報を駆使して戦争を有利に運ぶやり方を、ホラズム帝国(現代のイラン周辺に存在した国)や金との戦争で使用している。さらに、道の存在は、軍隊の後方支援や物資供給にも大きく貢献した。

モンゴル帝国の戦い方は残虐なイメージがある。しかし、それは正しいとは言えず、人命尊重の戦い方を見せている。遊牧民の財産は家畜であり、1人で100～200頭の家畜を育てることができる人の存在は重要であった。人が多いほど、家畜すなわち財産を維持し、豊かになれたのである。また、チンギス・カーンは戦争などで敵国の都市や生産拠点の破壊をなるべく避け、属国化し、その後も都市の機能を低下させないようにしている。戦争を避け、平和的な解決へ向かわせることで、商人達がすぐに商売ができる環境、すなわち都市機能や幹

線道路が途絶えないようにした。

現代の戦争においても情報量や情報の共有は非常に重要性が高い。チンギス・カーンは情報の重要性を理解し、戦いにおいて情報を巧みに活用していたことが、その軍事行動を通じてわかるのである。

モンゴル高原内に張り巡らされた道は、駅伝制にも使用されていた。駅と駅の間隔は30キロメートルで、旅人が一日に移動できる距離である。駅には替え馬や宿などの施設があり、駅伝制の役割だけでなく、商人や旅人の宿泊地としても機能していたのである。

モンゴル帝国の誕生は、商人達にとって安全に商売ができ、モンゴル帝国の広大な領土には国境がないことから関税を取られることがないため、多くの利益を得ることができる環境であった。

結果として、モンゴル高原内にあったこの道は商業路でもあり軍事路でもあるため、多目的にモンゴル高原内の活性化を促進していたのである。

第3節 残した物

チンギス・カーンの死後、彼の残したものは、千戸制を使用した世界最強の軍隊やモンゴル高原内に張り巡らされた幹線道路、幹線道路沿いにある生産拠点や軍事施設や駅伝制の基になる設備、モンゴル高原を中心とする領土などがあった。

また後世に残したものは、物理的なものだけでなく、遊牧民としての誇りや考え方などの精神的なものもある。その中にモンゴル帝国が滅んでから600年の時がたっても遊牧知として残っている「草原を掘り返すな」、「川の水を汚すな」と言った環境理念のような“チンギスの戒め”と言われているものがある。

現在のモンゴルでは銅像が建てられるほど英雄的な存在のチンギス・カーンも、歴史的にモンゴルから侵略を受けた国では、残虐なイメージをもたれている。確かにホラズム帝国との戦いでは「女性と犬を除いてすべて殺してしまう」と語られているほど残忍な行為をしたのである。その後の西夏に対しての侵略でも残虐な行為は行われた。しかし、すべての侵略戦争が残虐であった訳ではない。

チンギス・カーン率いるモンゴル帝国の本来の戦い方は、敵国の国内の状況など徹底的に調査している。敵国の内政が不安定な時に一気に攻め込み犠牲を最小限に抑え、深追いはせず一旦引いて敵国側の追い打ちを待ち伏せするなどの戦術をとる。高度な情報収集能力により、そこで得た情報を戦術に組み込み、戦いを有利に運び、勝利するのである。

チンギス・カーンは遊牧民であり、遊牧民の戦い方は人命尊重のため、戦での戦死者を少なく抑える慎重な戦い方をしていた。残虐な行為をしていた理由は、周辺諸国への威嚇的行動である。

第4節 現代との繋がり

チンギス・カーンは戦術と戦略を駆使し、歴史上最大の土地を統治したモンゴル帝国を樹

立させたが、その統治の仕方はとても規制の緩いものであった。前述の「イルになる」という言葉は「仲間になる」と言う意味があり、支配下になった国の文化に自国の文化を強制させるようなことはせず、支配下に置いた国の文化を尊重し、時には支配下に置いた国の良い文化を吸収していたのである。

モンゴル帝国は広大な土地が故に様々な民族が住んでおり、人口は最盛期で1億人以上に上る多民族多文化国家であった。多くの民族をまとめることができたのは、モンゴル帝国内の民族はあくまでも対等な仲間であるということ、モンゴル民族の文化を強制せず、それぞれの文化を最大限に尊重していたことなどが要因である。

経済面では、モンゴル高原内の幹線道路を中心とした国際商業を管理し、そこから利益を得る重商主義的な政策を行っていた。この政策は遊牧国家の一般的なものである。しかし、モンゴル帝国には、他の遊牧国家と異なる点がある。

それは、域内貿易のシステムに似たものである。モンゴル帝国の税制には関税がなく、売却時、商品価格に30分の1の売却税をかけるだけのものであった。そのため、物流が活発化し、モンゴル帝国内の経済が成長したのである。

また、物だけでなく、人もモンゴル帝国内を自由かつ安全に移動できるようになったのである。モンゴル帝国の樹立前、物や人はモンゴル高原を中心に動いていたが、幹線道路や商業活動の活性化により、モンゴル帝国の樹立後は、その周りの地域にまで、物や人が自由に行き来していった。

国と国との国境が意味をなくし、自由に人が行き来することを現代に照らし合わせると、ノマド化と言う。ノマド化したモンゴル帝国の支配下内であれば、関税を気にすることなく商業活動ができ、モンゴル帝国内の活性化になるのである。つまり、当時のモンゴル帝国は現代のEUと同じような仕組みであったといえる。モンゴル帝国の支配下内では関税がなく、人が自由に行き来することができたのである。EUでは、EU加盟国同士なら関税がなく貿易ができる域内貿易の制度が機能し、シェンゲン協定によるノマド化で、加盟国内の移動なら自由に行き来できるのである。EUの域内貿易の制度とノマド化は、当時のモンゴル帝国の商業活動の税制とモンゴル帝国の支配下内の自由に行き来することができる点で、よく似ているのである。モンゴル帝国は多くの国をまとめるリーダー的存在にであったのである。しかし決して支配下に置いた国を見下すことなく接していたことが、安定した緩やかな統治に繋がっていると考ええる。

モンゴル帝国が歴史上最大の領土と多民族多文化国家を統治できたのは、モンゴル帝国の支配下に置いた国々を、自分たちと対等の仲間と見ることが出来る懐の深さ、ノマド化と緩い税制による商業活動の活性化、モンゴル帝国が樹立してから情報を対外侵略の際に徹底して有効活用した戦い方、「騎馬軍団の機動力向上」「鉄資源の安定確保」「高原内生産の活性化」の3つの戦略と遊牧リテラシーに基づく「シフト」「コストダウン」「モバイル」「リスク回避」「ネットワーク」5つの戦術を駆使したチンギス・カーンのリスクマネジメント能力高さが重要な要因である。「モバイル」とは最低限必要な家具や道具を持ち移動、生活すること

である。「シフト」とは環境変化に応じて行動することである。「ネットワーク」とはモンゴル高原内に整備された道のことや駅伝制の基になったシステムのことである。

ノマド化、EU の域内貿易に類似した制度、高度な情報収集能力、この3つは特に現代社会と800年前のモンゴル帝国が使用していた共通のツールで、いかにモンゴル帝国が優秀な国家だったかということが分かる。「イルになる」という表現通りに、チンギス・カーンは属国化した国を対等な仲間として受け入れ、次々と仲間を増やしていき、モンゴル高原とモンゴル民の平和と安定した繁栄を目指したのである。

第2章 13世紀後半5代クビライ・カーンの時代～モンゴル帝国の変容と安定～

第1節 モンゴル帝国と朝鮮「婚姻関係・政治体制による統治」

第1項 モンゴル帝国と高麗国の抗戦から講和

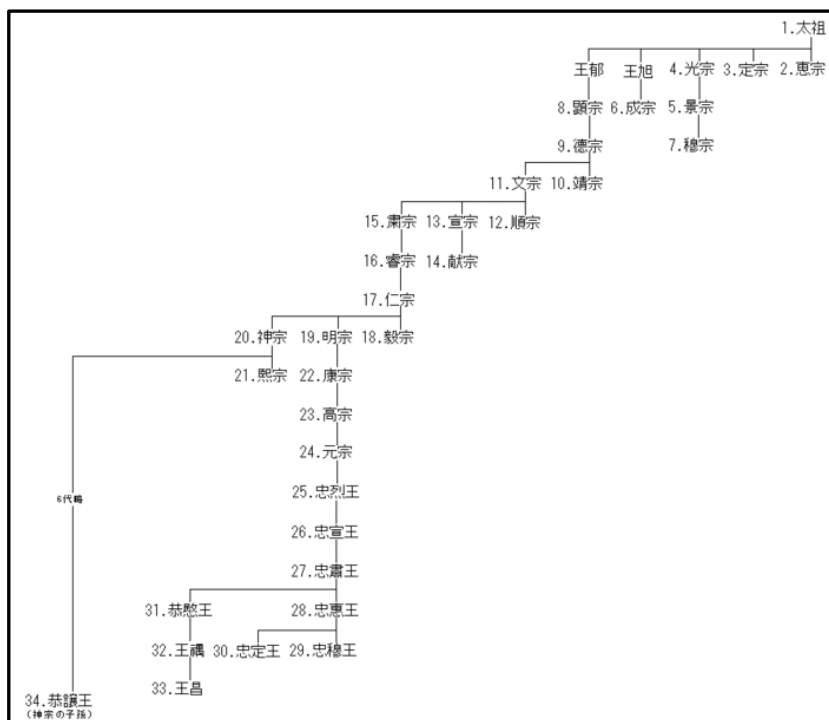
モンゴル帝国と朝鮮（高麗国）との直接の関係は、1218年モンゴル帝国・チンギス・カーンの時代に、モンゴル軍が契丹人集団の一部を追い掛けて、初めて朝鮮半島に姿を表した時からスタートする。契丹人集団の一部とは、モンゴル帝国による金攻略の過程で、内モンゴル地方の契丹人集団がモンゴルに吸収されたが、後に離反した一部の勢力である。契丹人集団の一部の勢力は、モンゴルの追撃を逃れながら高麗国へと入っていき、それをモンゴル軍が追い掛けて行ったのである。そして、モンゴル軍・高麗国が共同して契丹人集団を制圧した。以降毎年、モンゴルの使者が高麗国を訪れ高圧的な態度で貢物を要求し、次第に高麗国も不満を強めていったのである。

この時期の対高麗国交渉は、チンギス・カーンの末弟であるオッチギンが主導していた。1224年末、オッチギンの使者が高麗国北境で殺害される事件が起こった。この事件の背景には、高麗国がモンゴル帝国の度重なる貢物の要求への不満が募ったことがあり、高麗国は、チンギス・カーンが中央アジアに出征し、数年後に一時消息不明になったことを好機とみて、オッチギンの使者を殺害したと言われている。

1225年チンギス・カーンは遠征から帰ってくるが、西征を優先していたことから東方には手が回らず、1231年までの間の7年間、高麗国とは国交断絶状態となっていた。1229年即位したモンゴル帝国・2代オゴティ・カーンは、1231年に過去のオッチギンの使者殺害の罪を高麗国へ問う、という大義名分のもとサルタク・コルチを将とし高麗国へ出兵を開始した（第一次侵攻）のである。モンゴル帝国にとっては、金攻略戦と並行していた時期であった。当時の高麗国の官僚機構は、文臣と武臣の両班に組織され、文臣が政治を主導する方針がとられていたが、1170年・1173年の武臣によるクーデター事件をきっかけに、一部の武臣が権力中枢に浮上するようになっていた。1196年には武臣・崔氏が武臣トップとなり、武臣政権となった。その武臣・崔氏政権下の高麗国は、モンゴル帝国による上述の侵攻に対して、金品を献上し、モンゴル帝国側の72名のダルガチ（モンゴル帝国から派遣される監視官、事実上の地方官）を置くことを認めることにより、降伏したのである。

高麗国は、一旦降伏することで、モンゴル帝国による当面の危機を回避したが、その後、再び抵抗を開始した。1232年には、モンゴル軍の次なる侵攻に備え、王廷・政府あげて開京から江華島へと遷都し徹底抗戦の構えを見せた。以来1273年済州島における抗戦が終息するまでの40年を超える、異常なほどの長期戦となったのである。その間、1259年モンケ・カーン時代に両国が和平交渉に入り、クビライ・カーン政権下では本格的に和平に向かったが、抗戦が終息するには時間は掛かった。

図 4 高麗王系図



出典：Wikipedia

1259 年、高麗国の元宗は父・高宗（23 代高麗国王）の代理として 4 代・モンケ・カーンのもとへ入朝すべく向かった。しかし当時、南宋攻略のために四川に遠征していたモンケ・カーンは、突然病死をしたのである。その報に、元宗は高麗国へと引き返そうとしたが、その途中、北上するクビライ（のちのカーン）騎馬隊と「汴梁の郊（現在の河南省開封付近）」で対面した。この偶然ともいえる、入朝してきた元宗との出会いをクビライは政争に利用したのである。モンゴル帝国ではクビライと留守を預かっていた弟のアリク・ブケとの間で、モンケ・カーン亡き後の帝位をめぐる緊張が生まれていた時であった。

さらに、1260 年元宗の父・高麗国王の高宗が死去するとクビライは、元宗に対しそのまま高麗国へ帰しては、高麗国がまた離反するのではと考え、俣を高麗国王として承認し、護衛をつけて帰国させることにした。元宗は、モンゴル帝国の武力とクビライの権威を背景に、高麗国内での反対勢力もある中、高麗国の王位に就くこととなった。

1260 年 4 月クビライはカーンに即位した。1264 年クビライ・カーンが弟のアリク・ブケに勝利して政権が安定すると高麗国への姿勢は硬化し、再び江華島から開京への還都の実行ほか、属国としての定例義務として、①国王の出頭②トルガク（支配層子弟の人質）③戸籍の提出④軍事協力⑤糧食その他物資の供出⑥駅伝の設置⑦ダルガチ（監視官）の設置といった、多数の要求をするようになったのである。

1264 年元宗は高麗国王として初めてモンゴル帝国に出頭し、モンゴルとの関係に積極的であった一方、高麗国内政では、元宗の対モンゴル帝国外交に拒否姿勢を示す武臣政権勢力と

の対立が先鋭化していった。崔氏政権崩壊後も金俊が率いる武臣政権が存続し、金俊と元宗の対立の中、モンゴル帝国に対しては上述の定例義務のうち、出頭以外の要求が履行されずにモンゴル帝国は、高麗国への不信感を強め各種の要求不履行による問責が相次いでいった。1268年金俊は部下の林衍（リン・エン）に殺害され、1269年林衍は軍事クーデターをおこしたのである。金俊の後釜についた林衍は元宗と対立することとなり、林衍は国王を廃して元宗の弟の安慶公を国王へ擁立した。

公認した国王を無断で廃するという行為をクビライ・カーンは高麗国の反乱とみなした。一方で、クビライ・カーンはここで強硬策に出ることにより、当時攻略を本格化させていた南宋と高麗国が手を結ぶ危険性も憂慮し、一旦高麗国を懐柔し、南宋や日本の攻略へ協力させるという柔軟な対応方針をとったのである。そして、元宗・安慶公・林衍に出頭を命じ、応じない場合は高麗国内政への全面介入も辞さない構えを見せた。

これに元宗は応じたが林衍は拒否した。そうした最中、林衍が急死し林衍の子・林惟茂（リン・イモ）が高麗令公（武臣政権のトップ）を継いだ。林惟茂政権では高麗国消滅を恐れる侍郎（次官クラス）らが宮廷クーデターを決行し、林惟茂らを殺害した。こうして1270年、約1世紀間に及んだ武臣執権期は終わりを告げた。復位した元宗は、モンゴル帝国の勧告に従い江華島を出て、開京に還都したのである。

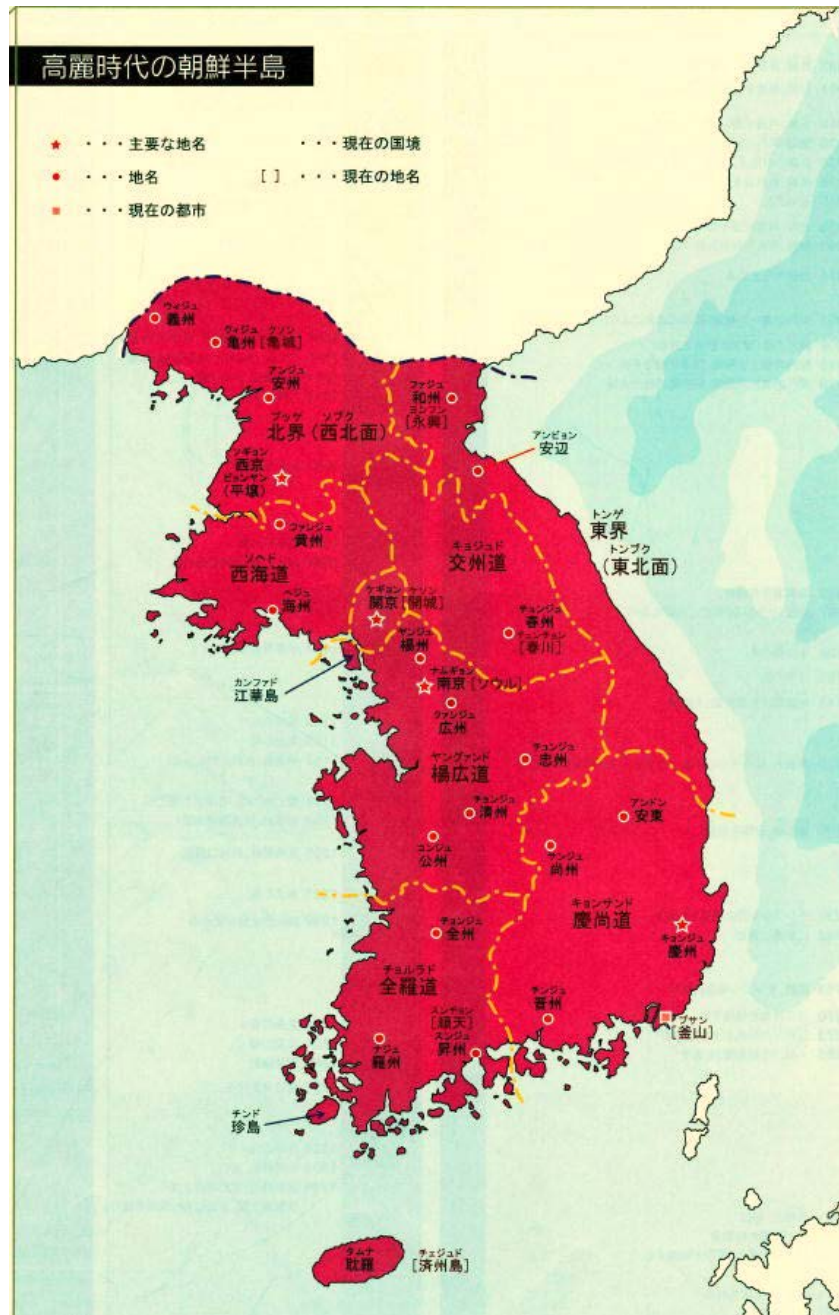
しかし江華島からの全面引き上げに反対する勢力もあり彼らは三別抄（首都圏を護衛する常備軍団）を主力として反乱を起こした。武臣政権の武力基盤であった三別抄には、解散命令が下された。しかしこの命令に三別抄は反発し、一斉蜂起して林衍の党派である裴仲孫（ハイ・チュウソン）らは、高麗王室傍流の温（オン）を擁立し、朝鮮半島南西端の珍島を拠点とし、「高麗国政府」と称した。三別抄は、一時は朝鮮半島南岸地域に勢力を広げ、開京政府と珍島政府の対立となり2つの政府が出現した形となった。

1271年、モンゴル軍武将・アカイ率いる第一次珍島攻撃は多大な損害で失敗した。その後、ヒンドゥ率いるモンゴル軍・高麗軍の連合軍は、珍島を攻略し、捕獲された温は斬刑に処せられたのであった。三別抄のリーダー格・金通精らは済州島へと移った。1273年モンゴル軍・ヒンドゥは海上進攻を敢行し三別抄を鎮圧した。これにより、モンゴル帝国と高麗国の長い抗戦の歴史に終止符を打ったのである。それと同時に、モンゴル帝国が朝鮮半島周辺の海域を制圧したことも意味した。済州島は、モンゴル帝国にとって絶好の海上軍事基地となったのである。一方で、この三別抄の抵抗を日本からの視野で見ると、モンゴル帝国の朝鮮半島南域までの進出を三別抄が遅らせた、即ち日本への侵攻を遅らせたとも、言えるであろう。鎌倉幕府にとっては、当時起こっていた内政の不安定さを立て直し、防衛体制を固める時間的な猶予ができた時期でもあった。

現代に視点を移すと、韓国・北朝鮮において、三別抄は護国の英雄として称賛されているこの称賛は、外圧に対する抵抗への称賛であるが、モンゴル帝国・高麗国王廷・三別抄の関係性は極めて複雑な関係であること、属国でありながら国としての独立を維持した高麗国の歴史などを考えると、歴史の評価に絶対はないものと思うものである。武人政権の崩壊によ

り、高麗国では約1世紀ぶりに王政復古が実現し、モンゴル帝国の傘の下での復活となった。これ以降、高麗国はモンゴル帝国・クビライ王朝に最も忠実な附庸国となったのである。

図5 高麗時代の朝鮮半島



出典：<https://ja.wikipedia.org/wiki/>

第2項 高麗国の属国化と姻戚関係による統治

モンゴル帝国の帝室には特定の姻族（クダ）と代々通婚する習慣があった。そのパターンは、大きく2つに分かれる。モンゴル系のウンギラト族やオイラト族といった姻族の場合、相互に女性をやり取りする形で婚姻が繰り返される。これに対しトルコ系のオングド族やウイグル族などの場合、帝室の皇女や王女を降嫁する、いわば一方通行の婚姻となる。

1273年、三別抄の鎮圧によりモンゴル帝国は高麗国との長い抗戦に終止符を打った後、1274年に当時の高麗国王・忠烈王がクビライ・カーンの娘、クトウルクケミルシュを娶って以来、幼い王であった忠穆（チュウボク）王・忠定王の二人の王を除いてすべての高麗国王にモンゴル公主（皇女・王女の漢語の意）が降嫁されたのである。

モンゴル帝国では、公主降嫁という行為は、極めて重要な報奨とされていた。とくに降嫁先が新参者である場合、降嫁先が率先してモンゴル帝国に帰服し、モンゴル帝国の勢力拡張に貢献したからこそその報奨と、『モンゴル秘史』（チンギス・カーンによるモンゴル帝国建設過程をモンゴル語で書いた史書）や『集史』（フレグ・ウルスの第7代ガザン・カンの命により編纂された史書）に記載されている。

高麗王家側に関しても、13世紀末以降の記録『拙藁千百』には、「天子（モンゴル帝国皇帝）は東国（高麗国）が率先して帰順したので、代々公主をめとることを許した」とある様に、モンゴルの史書と同様の内容が残されているのである。具体的には、前述のチンギス・カーンの時代に高麗国が対契丹戦に共闘したこと、及びクビライ・カーンの即位前夜に、当時の高麗国王・元宗が来帰したことを指すものである。

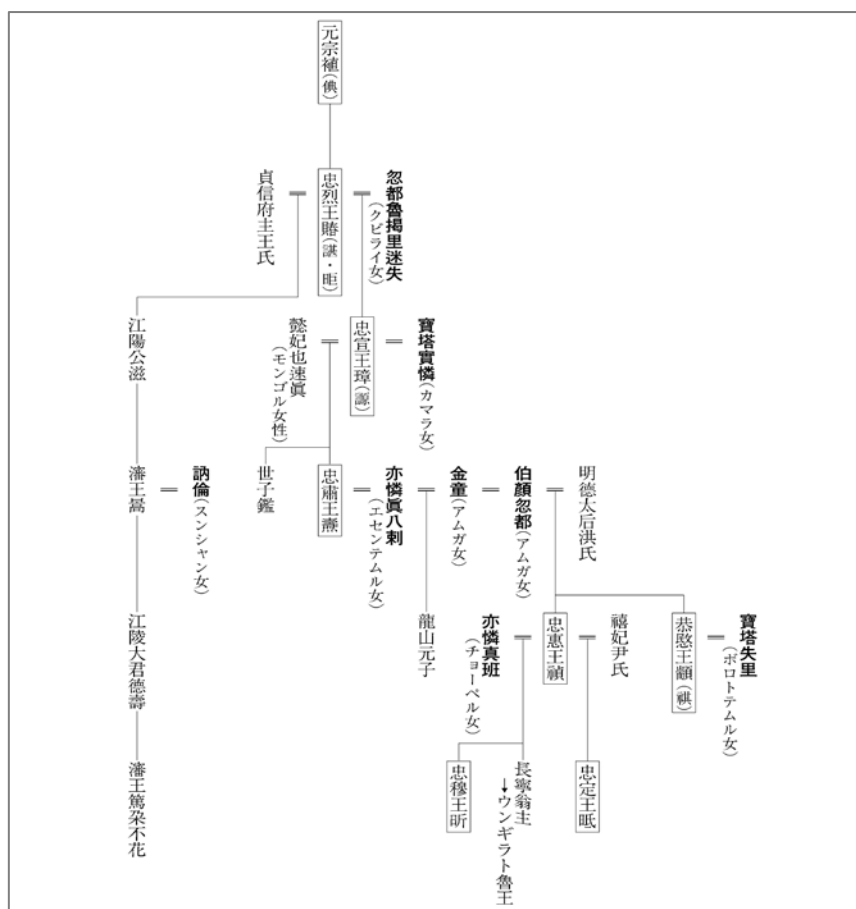
しかし現実には、高麗国は長期間にわたってモンゴル帝国に抵抗し続けていた事実も存在するのである。そのため当初モンゴル帝国は、最初の公主降嫁（1274年・忠烈王時代）の頃ですら、長期間の抗戦の事実から、高麗国を帰順が遅れた存在とみなしていたのである。そのような状況下、元が高麗国との通婚に踏み切った、高麗国を貢献した相手国とみなした理由は何であったのだろうか。最初の降嫁の5年前、1269年に権臣・林衍による高麗国王・元宗を廃するクーデター国王廃立事件が起き、元側からすると元が認めた国王を勝手に廃するとは言語道断の事件であった。その際に使者としてモンゴル帝国内にいた元宗の子、忠烈王は、モンゴル帝国に恭順姿勢を示し林衍の討伐を要請するとともに、自らに対する公主の降嫁を要請したのである。

モンゴル帝国は、この要請を受け入れ、モンゴル帝国への抵抗も鎮圧されて1274年に降嫁を実施するに至った。こうして忠烈王はモンゴル帝室の「駙馬」となったのである。帝室の女婿を漢語で「駙馬」と呼ぶ。モンゴル語ではキュレゲンという。駙馬はモンゴル帝国の最高支配層を構成する王侯貴族の一員であり、男性皇族とともに諸王・駙馬と並び称され、高貴な地位であった。

1281年に忠烈王は「駙馬高麗国王」という称号を獲得したことにより、高麗国王の格式はモンゴル駙馬と一体化し、高麗国王はモンゴル帝国の官人に対しても優位な地位となったのである。モンゴル帝国において諸王・駙馬などの王侯貴族は、高度な自立性を保持して所

それを表す事実として、1294年モンゴル帝国・第6代テムル・カーンの即位を祝う饗宴（トイ）において、忠烈王は諸王・駙馬の中で第7位に座したのである。さらに、その2年後の宮中饗宴においては、第4位に座したのである。また、帝室の姻戚となることで、それまで課されてきた定例の歳貢が廃止され、逆に皇帝から歳賜を受けるようになった。こうした血縁関係者には、皇帝から投下領を与えられた。高麗国王も遼東地方を与えられ忠烈王の次の国王である忠宣王は、現在の瀋陽に投下領を与えられたのである。

図6 高麗国王系図



出典：『モンゴル帝国の覇権と朝鮮半島（森平雅彦）5 ページ』

第3項 モンゴル帝国・トルガクへの派遣とケシク参入の仕組みによる統治

モンゴル帝国が属国に要求する事項として、支配層子弟の人質「トルガク」として宮廷に遣わせる仕組みがある。高麗国は1241年に「トルガク」を送ったが、元との講和後もさらなる「トルガク」の提出を求められた。1271年には当時の高麗国王・元宗の子、後の忠烈王を派遣して以来、歴代高麗国王は自らの王子かその代理となる王族を「トルガク」として元朝宮廷に遣わすようになる。

「トルガク」とは、もともとモンゴルにおいて遊牧君長のもとに来投した族長等が托身の代償として主君に差し出し奉仕させたものである。彼らは君長の身辺警護にあたる親衛隊に組織された。チンギス・カーンは「トルガク」として千戸長以下の支配層の子弟や、平民子弟の有能者を徴収し、1万名に達する親衛隊である「ケシク（宿衛）」を編成した。その後、モンゴル帝国の拡大に伴い、新たな属国からの「トルガク」もここに加えていった。高麗国から徴収された「トルガク」もこの皇帝直属の親衛隊となったのである。

「ケシク」（宿衛）は4班に分かれて皇帝の警護にあたる他、皇帝の日常生活に関する職を受け持つ家政機関、さらには官僚や軍事指揮官の「人材バンク」としての役割も果たしていた。まさしくモンゴル帝国の権力中枢の基盤となる組織であったといえる。「ケシク」となった者は、ほかのモンゴル貴族の子弟と共に皇帝との主従的關係のもと、帝国支配層の一員として薫陶される。「ケシク」は皇帝の身辺に奉仕し、その恩寵を受ける栄誉ある特権的地位であった。モンゴル皇帝に仕える者にとって、「ケシク」は立身出世の近道でもあった。このように、「ケシク」は来投者をすみやかに体制内の要員に転換する「装置」でもあり、モンゴル帝国の爆発的な勢力拡張を可能にした要素のひとつであったことは間違いない。

1271年忠烈王が「トルガク」として派遣され「ケシク」に入り、同年に元が高麗国との通婚を正式承認したことからも、当時の高麗国にとって「ケシク」は元に対して何らかの貢献を果たし、忠誠を示す機会であった。このように、高麗国王の子弟が「トルガク」として「ケシク」に入り、やがてモンゴル帝国の公主（皇帝の娘）と婚姻することで「駙馬」の地位となり、高麗国王を継承するという、モンゴル帝国皇帝家との姻戚関係、即ち血のつながりでの拡大・統治という、ひとつのシステムとして成り立っていたものと見る。

こうしたシステムは、チンギス・カーンが策定した仕組みを土台に、クビライ・カーンが高麗国をはじめとした属国との関係性において定着させたと言える。ここにモンゴル帝国の、ゆるやかな統治を実現し、版図を拡大してきた、重要な要素であり戦略ともいえる一面を併せもつものと評価する。

第4項 一国であり一省の高麗国

モンゴル帝国の中央最高機関である中書省と同格の地方派出機関に中書省＝行省（コウシヨウ）がある。モンゴル帝国が統治する元朝の初期には臨時の対外遠征司令部として行省が設けられ、日本遠征（元寇）の際に高麗国に設置された「征東行省」もそのひとつである。1280年代半ばにはモンゴル帝国の行省制度は大きく変わり、常設の最高地方統治機関となっ

ていった。高麗国にも 1287 年、一旦撤去された「征東行省」が再び設置され、高麗の地を管轄する地方統治機関として定着し、最終的には遼陽（リョウヨウ）行省、河南江北（カナンコウホク）行省、陝西（センセイ）行省、甘肅（カンシュク）行省、嶺北（レイホク）行省、江浙（コウセツ）行省、江西（コウセイ）行省、湖広（ココウ）行省、四川（シセン）行省、雲南（ウンナン）行省と共に、モンゴル帝国の十一行省のひとつになったのである。つまり、高麗国はモンゴル帝国の一地方行政単位として位置づけられたのである。

「征東行省」の長官職は歴代高麗国王が世襲していった。モンゴル帝国の傘下において高麗国王は国王と「征東行省」の長官を兼務する二つの属性をもったのである。一国の政令と一省の権限を束ねてこれを独占する存在と位置付けられた。「征東行省」の機能は第一にモンゴル帝国との交渉窓口という点にあり、協議すべき事案が生じた場合、高麗国は「征東行省」を通じてモンゴル帝国と連絡を取り合った。一方で高麗国としてモンゴル帝国と直接交渉する場合もあり、こうした立場の使い分けについては、詳細は明らかになっていない。

高麗国の内政面においては、在来の王朝政府が機能しており、「征東行省」が直接その任にあたった訳ではなかった。この一国として認めながら一省であるというモンゴル帝国と高麗国の関係性は、他の属国には見られない特徴のある関係であった。それを象徴する例として、属国に対するモンゴル帝国の定例要求は、君長の出頭、「トルガク」の提出、ダルガチ（監視官）の設置、戸籍の提出、軍事協力、物資の供出、駅伝の敷設と最低 7 項目に渡るが、高麗国に対してはこのような征服地支配策は適用されなかったことに表れている。

しかし、対高麗国においても、君長の出頭、「トルガク」の提出、軍事協力、物資の供出、駅伝の敷設などは実現しており、ダルガチは一時的な設置に留まり、戸籍の提出はなされず、恒常的な徴税は行われなかった点は重要である。こうして高麗国が独自の王朝体制を維持してゆく上で大きな意味をもったのが、クビライ・カーンが高麗国の在来体制の維持を承認した「不改土風」（どふうをあらためず）の原則であった。

モンゴル帝国にとって、高麗国「征東行省」は軍事的役割も非常に大きい地域であった。当時のモンゴル帝国が、南宋そして日本を攻略・属国化し北東アジアも全域を統治する構想にあって、東方辺境において、とりわけ日本に対して軍事的に睨みを効かせる存在が高麗国「征東行省」の基本的属性であった。高麗国もまた、モンゴル帝国に対して帝国東辺防衛の担い手を自任し、自己主張していた。そのことは、1302 年、忠烈王が元の中書省に送った文書にも、東方の極辺において未だ服属しない日本との境界を威圧・鎮守する役割、という言葉が『高麗史 32 巻』に残されている。

モンゴル帝国の対日政策との関りは、王室間の通婚にも伺われる。忠烈王がモンゴル公主（皇帝の娘あるいは養女）の降嫁を許された背景には、当時の懸案である対南宋戦のほか、対日攻略を抑えた状況も関係していた。1274 年の第 1 回日本遠征の準備が整った段階で降嫁が実行されたこと、さらには忠烈王が 1281 年に駙馬高麗国王の称号が認められたことも第 2 回日本遠征にあたって忠烈王が「征東行省」長官に就任するのとはほぼ同時期であった。

高麗国の地政学的な軍事的役割は、高麗王家へ降嫁されるモンゴル公主の選定にも影響を

与えていた。高麗国へ降嫁した姫は、クビライ家の親王が軍隊を率いて辺境に駐屯し、軍事的な睨みを利かせる体制「出鎮」を担う王家からであった。高麗国の忠宣王の舅カマラはモンゴリアに出鎮、忠肅王の舅エセンテムルは雲南に主鎮、忠恵王の舅は、チベットに出鎮している。即ち、「辺境防衛」を担う王家同士を結び付けたという形である。この背景には「辺境防衛」を担う王家同士を結びつけ、相互連携を強めることで、モンゴル帝国の外殻をしっかりと固めようというモンゴル帝国の意図・戦略であったことも伺える。モンゴル帝国と高麗国の、一国であり、一省であるという独特な関係性の背景には、高麗王朝を存続させることで軍事協力を得て、労せずして東方辺境の平穩を図るべき、という記載が『元史 125 卷』にも残されている。また、高麗国をモンゴル帝国の完全直轄としないことは、モンゴル帝国が日本に朝貢を勧告した際に高麗国と同様にその政権を安堵すると約束しており、高麗王朝を保全することは元にとって東方防衛策であると同時に、日本を将来的に属国化してゆくという東方政策の方向性をも示唆していたものといえる。

これまでの調査から、クビライ・カーン時代における元の戦略は、チンギス・カーン以来のモンゴル帝国の統治の仕組みを土台に、血縁・政治統治体制・軍事戦略を駆使して、高麗王朝を維持した形での属国化であったものと考えられる。さらには、南宋の攻略と日本の属国化をも見据えた、大きな北東アジア統治の戦略であったと捉えてよいのではないだろうか。

第2節 モンゴル帝国と日本の関係性

第1項 モンゴル帝国と日本の接点

1266 年（文永 3 年）高麗国の都、開城へクビライ・カーンの使者として、黒的（コクテキ）、殷弘（イン・コウ）の 2 人がやってきて高麗国王へ日本への道案内を告げた。高麗国では 2 人の道案内をつけ日本へ向かわせたが、対馬の北、高麗国南端にある巨済島に渡り、相対する日本の対馬を眺め、そこに立ちはだかる山のような波濤を見て、おじけづいて帰って来たのである。しかしこれに、クビライ・カーンは激怒し、再度黒的・殷弘を高麗に遣わし、高麗国王を叱責した。

今度は、高麗国に対して案内役ではなく、直接交渉せよ、と命じた。高麗国王はその命に従い潘阜（ハンブ）を使者とし、クビライの詔書に、自国の国書も添えて遣わせた。

1268 年（文永 5 年）潘阜は博多に着いた。クビライ・カーンの名で日本国王宛ての書状は、40 日経過後、鎌倉幕府へと送られ、幕府はさらに 1 か月後に京都の朝廷へと奏上し、朝廷はそれから連日会議をした上で返書はしないと議決し、黙殺したのである。潘阜は高麗国へと戻り、日本の対応・待遇を報告した。クビライ・カーンはこの報告により、高麗国に対して疑心暗鬼となった。高麗国が間に立って虚偽の報告などを行い事態の悪化を招いているとの疑念である。

そして再び黒的・殷弘を日本へ案内せよと命ずる。使者は、この時は対馬まで着いたのだが、結局は対馬島民の塔二郎と弥三郎という 2 人を捉えて、戻ったのである。その後、使者は 2 人の対馬島民をモンゴルへと連れてゆき、そこでクビライ・カーンは 2 人を歓待した。

じかに日本人にモンゴルの隆盛ぶりを見せて利用しようと考えたのであろう。更に、この 2 人の対馬島民を伴わせて、使者を大宰府へと遣わした。実に 4 度目の使者であった。

この時は、朝廷では返書を送ろうということになり、菅原長成が返書の草案を記した。内容は、日本は神国であることから、異国には屈しないという主旨であった。しかし鎌倉幕府は、返書は必要なしとして使者には何も与えずに帰したのである。この時、幕府は外敵への一層の緊張感をもち、九州方面の御家人に対してすでに海岸防備を嚴重に通告していた。

1271 年（文永 8 年）クビライ・カーンは趙良弼（チョウ・リョウヒツ）を使者として日本へ遣わした。趙良弼は、クビライ・カーンが即位する以前に、元宗を高麗国王にして高麗へと返すことを進言した、クビライ・カーンのブレーンのような人材であった。しかしこの時も、日本からは返答はもらえず帰国した。そして 1274 年（文永 11 年）第 1 回日本遠征（文永の役）へと至った。モンゴル帝国にとっては、日本遠征の目的は、対南宋大進攻作戦の一環である側面が強かった。モンゴル軍・高麗軍の連合軍 2 万 7 千人に対し、日本は 1 万人もおらず、日本側が押され気味となり、博多箱崎を捨て大宰府へ引いた。モンゴル軍は夜間、博多湾上の戦艦に、日本の奇襲回避の目的で戻るが、そこに暴風・突風が起こったのである。そして、戦闘を諦め高麗国へと帰投したのである。

クビライ・カーンは、日本遠征が思わぬ事態により上手くいかなかったことは認めても、これを敗戦とは考えなかった。また、損害は高麗国の士卒・水手に集中していた。モンゴル帝国からすると、本来の目的は南宋大進攻の側面作戦として、従来から南宋を海上通交していた日本を威嚇することであった為、軍事力の一端を示したことで十分であった。

一方日本においては、この文永の役により、初めて外敵に相対しての国家意識、国家としての自覚、日本国、即ち日本人としてのアイデンティティを意識したといえるのではなかろうか。それと同時に情勢は次なるモンゴル帝国の再来襲が必至であった。第 1 回遠征後、モンゴル帝国は直ちに再攻撃を高麗国に命じたが、1275 年に撤回した。その理由は、対南宋戦が優先されたためとみられる。

北条時宗は、1275 年（建治元年）にやって来たモンゴル帝国からの使者 3 人を、5 年後 1280 年に斬刑に処した。親書拒否だけでなく、正式な使者を殺す措置は蛮行であり、まさに開戦の意思表示であるとモンゴル帝国側は受け取った。さらには、高麗国も再戦は近いと、積極的になったのである。積極的になった高麗国の狙いとは、第 1 回目の日本遠征においては、作戦遂行の主導権を元に握られていたが、次は自国の利益を守るためにも主導権を獲ろうとしたことであった。

そして、1281 年（弘安 4 年）第 2 回日本遠征（弘安の役）に至った。第 1 回目から 7 年の歳月が経っていた。この時すでに南宋はモンゴル帝国によって攻略されており、モンゴル帝国は南宋国とその海上戦力を手にしていた。第 2 回目の弘安の役では、モンゴル帝国側は、「江南軍」と「東路軍」の二方向からの進軍であった。「江南軍」は総勢 10 万人、3500 隻の巨大艦隊であったが、その構成要員は、募集に応じた士卒・職業軍人の弱兵（老人・若年・病兵）が主で、実質農具しか持たない「移民船団」ともいえる様相であった。「東路軍」は、

高麗国を發進したモンゴル軍、高麗軍の4万人の連合軍であった。

日本側の水際での戦いによって上陸させない作戦により、「東路軍」は博多湾上で立ち往生した。「江南軍」が到着しても戦闘力がないことから、なす術はなく、モンゴル軍は迷える巨像となった。そこをまたしても、暴風が襲ったのである。モンゴル軍は壊滅的な打撃を受け、日本は再び難を逃れたのである。モンゴル軍の被害は「江南軍」に集中し、新造の大艦は無事であったが、中小艦船と旧来の艦船が覆没した。この第2回遠征後も緊張は続いた。

北条執政府は常に迎撃態勢を解かず、モンゴル帝国・クビライ・カーンも、より本腰を入れて日本遠征に踏み出そうと計画していた。結果的にはモンゴルの内政問題・混乱により、日本は三度目の蒙古襲来を受けることはなかった。しかし、北条執政府は政権倒壊まで次なる蒙古襲来に備え続けたのであった。

蒙古襲来時代は、襲来以前も襲来中も日本の貿易船は中国大陆を往来し、襲来後は大変な経済・文化交流がおこり、明治期までこれほどの日中交流はなかった位、貿易面での交流はあったのである。

また、日本の神国思想という副産物をつくり出した時代でもあった。二度の襲来の際の単なる自然現象としての暴風雨が、すさまじい祈祷によって吹き起った神風であるという信仰がおこり、以前からあった神国思想がこれで決定的となったといえる。

日本側からみると、海ひとつ隔てた島国であったという地政学的要因によって、朝鮮半島・高麗国と違って、属国となることを免れたともいえるだろう。

第2項 元寇におけるモンゴル・高麗国の視点

モンゴル帝国が南宋攻略の一環として、そして日本へ朝貢を求め属国化する目的での2度に渡る日本遠征、文永の役・弘安の役、いわゆる元寇をモンゴル・高麗側からの視点でみてもみる。前述の通り日本遠征への始まりは、1266年（文永3年）高麗国の都、開城へクビライ・カーンの使者として、黒的、殷弘の2人がやってきて高麗国王へ日本への道案内を告げたところに遡る。高麗国では2人の道案内をつけ日本へ向かわせたが、高麗国南端にある巨済島に渡ったものの引き帰して来たことに激怒したクビライ・カーンが再び黒的・殷弘を派遣し、高麗国王の不誠実を責めるとともに今度は高麗国が日本と単独で交渉することを求めた。これは、モンゴル帝国からすると直接日本と折衝するよりも、従来日本と多少なりとも関係をもつ高麗国を介して交渉にあたらせる方が、より便宜的であろうという考えであった。そして高麗国王は、クビライ・カーンの詔書に、自らの書を添えて、潘阜を使者として日本へと送ったのである。高麗国には、日本遠征に備えて、屯田する5,000人のモンゴル帝国軍が待機していた。

1274年（文永11年）にはクビライ・カーンが高麗国に対し日本遠征のための造船を命じた。高麗国が造船すべき船の数は、大船300艘、軽疾船（はやふね）300艘、給水用の小船300艘で合計900艘であった。そのために船大工や、人夫ら30,500人以上が徴集された。同年（文永11年）7月を目標に日本遠征の命が発せられ、5月には漢地から元軍15,000人が高麗国へ

やってきた。6月までに造船も完了し、征東軍総数は高麗国駐屯中の屯田軍5,000人、本国からの元軍15,000人の他に、高麗国の軍6,000人、水夫、雑役夫、漕手には本国の者に高麗国から700人が加わった。高麗国は元軍のもと、相当数の軍への人員と、準備のための人力も相当数要した。征東軍が元・高麗の連合で約27,000人であったのに対し、迎える日本軍は10,000人にも至らない軍勢であった。しかしモンゴル軍は第1回日本遠征においては、海上にて一夜にして元軍・高麗軍合わせて13,000人以上を失うことになったのである。

第2回日本遠征・弘安の役は第1回目の7年後、1281年（弘安4年）であった。1276年（建治2年）、クビライ・カーンは南宋を攻略すると、直ちに日本再遠征のための戦艦の建造を江南の4省に命じ、高麗国へも900艘の造船を下命した。1280年には日本攻略のための機関として、高麗国に「征東行省」を設置した。第2回遠征時は高麗から発進する東路軍と、江南からの江南軍とをもって征東軍を構成した。東路軍は、モンゴル人・漢人の本国軍と高麗軍の総勢4万人と、江南軍の10万人の第1回目比べて遥かな規模であった。この時も暴風雨にさらされ、征東軍は甚大な被害を受け撤退したが、高麗軍は、軍人・水夫含め27,000人のうち7,592人が生還したことから、本国元軍に比べると損害は少なかったといわれる。この後、元では「征東行省」は廃止されたのだが、クビライ・カーンは造船計画だけは止めず、高麗国にも造船を命じている。

1283年（弘安6年）、再び「征東行省」を設置し、同年8月には第3回目の日本遠征の準備にかかった。その後、造船に携わる人民の反乱も勃発し、日本遠征準備は中止となり、「征東行省」も再び廃止となった。しかしクビライ・カーンの日本に対する執念の強さは、さらに再びの「征東行省」の設置に至ったのである。鎌倉幕府は元寇により、権限を増大させ、異国征伐を九州の御家人に命じ高麗国へと遠征をさせようと意気込んだ。この噂が元にも入り、元朝は高麗国の金州に鎮辺万個戸府を設置し、耽羅島（済州島）の警備を増強し、高麗国に日本警戒態勢を敷いたのであった。しかしながら元の内政の混乱もあり第3回目の遠征は実現し得なかったが、もし実現していたのならば、恐らく日本はモンゴル帝国の属国となり、さらにモンゴル帝国の次の版図拡大へと日本人が戦力として加わっていた歴史となったことも十分考えられるものである。

第3項 モンゴル帝国の貿易と日本

13世紀のモンゴル帝国の時代にはすでに銀を通じたユーラシアの交易システムが確立されていた。当時のモンゴル帝国の基本通貨は銀となっていた。中国においては、モンゴル帝国統治の元朝となると、それまでの銅銭から銀建て経済が民衆にまで浸透した。結果、中国には宋の時代からの宋銭（銅銭）がダブついたのである。そして、それを欲しがったのが日本の貿易商人であった。日本は当時海外の貨幣を使用しており、日宋貿易が盛んであった宋銭（銅銭）を使っていたことから、ダブついた銅銭を大量に元から輸入したのである。

モンゴル帝国は日本を属国にすべく、元寇によって緊張感のある状態の中であったが、クビライ・カーンは日本の貿易船を自国に入港させ、国交はないが貿易がある状態をつくった。

結果的に、日本はモンゴル帝国から銅銭を大量に輸入し、輸出としてはモンゴル帝国が欲しい硫黄や金・銀までを輸出していた。クビライ・カーンは日本の属国化は果たせなかったが、日元貿易を通じて、モンゴル帝国にとっての貿易面においては、何らかの利益をもたらすことに繋がったといえるのではないであろうか。また、モンゴル帝国の版図拡大に伴い、通貨である銀の需要に供給が追いつかず、中国で専売となっていた塩を買う権利となる「塩引」を売り、銀で払わせる仕組みを構築し、銀を通じた経済を活性化させた。この様に、16世紀以降西側からの世界的な交易システムによる繁栄の遥か以前に、東側・ユーラシアにおける交易システムがあったことから、モンゴル帝国の偉大さが分かる。

また日本から見ても、16世紀以降の銀の輸出による活況の前段が、モンゴル帝国時代に既に経験していたという見方もできる。つまり、13世紀モンゴル帝国時代のユーラシア大交易圏が16・17世紀の世界的な交易システムへと脈々とつながっているともいえるのである。同様に元以降の明代にもモンゴル帝国時代の交易システムの影響が及んでおり、日本は明との朝貢貿易である日明貿易により、莫大な利益をもたらしたのである。従属国から宗主国への朝貢であるから関税はなく、一切の費用は明の負担であり、朝貢品については価格以上の代価が支払われ、携えてきた物資の交易も認められており、1回の渡航で、元手の5～6倍の利益をあげることができた。そして明から、当時の通貨であった永楽通宝が持ち帰られ基準通貨として流通するようになった。日本が中国（明）の朝貢国となったのは、古代を除けば、この室町時代だけであるが、それは経済的利益を優先させた時代でもあった。

第4項 日本とベトナムへの元寇の関連性

ベトナムは、日本を超える3度の元寇を経験し、それを退けてきた歴史がある。第1回目のモンゴル帝国によるベトナム遠征は1258年。目的は日本への第1回遠征同様に南宋攻略であった。地域的に大越国（ベトナム）を攻略することが南宋の背後の領土を統治することとなり、南宋を挟み撃ちにしようという戦略であった。降伏を勧告に来たモンゴル帝国の使者をベトナムが次々に投獄し、帰ってこない使者に業を煮やしてモンゴル軍の攻撃が始まった。ベトナム北部の首都ハノイは一旦陥落したが、翌年にはモンゴル軍が撤退し終結した。

第2回遠征は、1285年に1回目の南宋攻略の目的と違い、今度はベトナムを属国化する目的で攻撃がなされた。モンゴル軍は強敵で、ベトナム軍も奮闘するも第1回目同様にハノイが占拠された。しかしベトナム軍は、徹底抗戦を挑み、山岳地帯やジャングルを利用したゲリラ戦に打って出る方策を採った。少しずつ打撃を与え、更に追い打ちをかけるように焦土作戦を敢行した。モンゴル軍は食料の補給がままならず、また慣れない気候と疫病、そしてゲリラ戦によってモンゴル軍は劣勢となり、ハノイを奪還したベトナム軍に追撃され、モンゴル軍は撤退を余儀なくされたのである。2度の敗北となったモンゴル軍であったが、これにクビライ・カーンは立腹し、3度目の遠征を計画したのである。

第3回目遠征は、1288年に過去2回の陸路に海路からの攻撃も加えて開戦となった。ベトナム軍を侮ることはできず、3回目のモンゴル軍は9万人の大部隊を用意し、ベトナム軍は

前回の焦土作戦による敗戦を教訓に、食料運搬用の船団をも用意した。遠征している都合上モンゴル軍の補給さえ断ってしまえば、前回同様にモンゴル軍が撤退を余儀なくされるのは明らかであった。ベトナム軍は兵を潜伏させ、モンゴル軍の戦船の後に続くであろう補給船をひたすら待ち伏せし、数日して食料を満載した補給艦隊が川を下ってくると、これを逃さず叩いたことで食料の確保が難しくなったモンゴル軍は一気に劣勢となった。このままでは敗戦となると悟ったモンゴル軍は、陸路・水路の2方面で撤退を開始した。しかしモンゴル軍には、水路において、ベトナム軍の罠であった干潮を利用した巧みな作戦が待ち受けていたのである。干潮の時刻に、潮が引いてベトナム軍によって川底に仕込まれた杭により、モンゴル軍の船は身動きがとれなくなり、そこにベトナム軍の小舟が杭をよけて攻撃したのである。さらに、火をつけたイカダを上流から流し、追い打ちを加えてモンゴル軍の船団は大炎上となった。この3回目の戦いが「白藤（バックダン）江の戦い」と言われるものである。3回の戦いを指揮した将軍「陳興道（チャン・フンダオ）」は英雄としてその銅像が、現在もホーチミン市中心部に飾られている。

ベトナムは、この3度の元寇、そして近現代においては中越戦争、ベトナム戦争と、13世紀から20世紀まで、大国との戦火に相当の被害・苦戦を強いられながらも、抗ってきた歴史が存在するのである。1281年（弘安4年）第2回日本遠征（弘安の役）の後、クビライ・カーンは3度目の日本遠征を計画していたことはすでに述べたが、1285年・1288年のベトナムへの遠征が優先されたことも、日本への3度目の遠征が実施されなかった理由として、全く無視はできないものである。また、日本においては2度の元寇により、外敵に対峙する危機感から、日本国民としてのアイデンティティが強まったと前述したが、ベトナムにおいても、3度の元寇を撃退したことによって、アイデンティティが確立されていったといえる点において、日本とベトナムにはモンゴル帝国を通じた共通項が見い出される。



出典：ホーチミン歴史博物館 2017年11月24日筆者撮影 「ベトナムへの元寇の絵図」

第3章 モンゴル帝国の国家運営

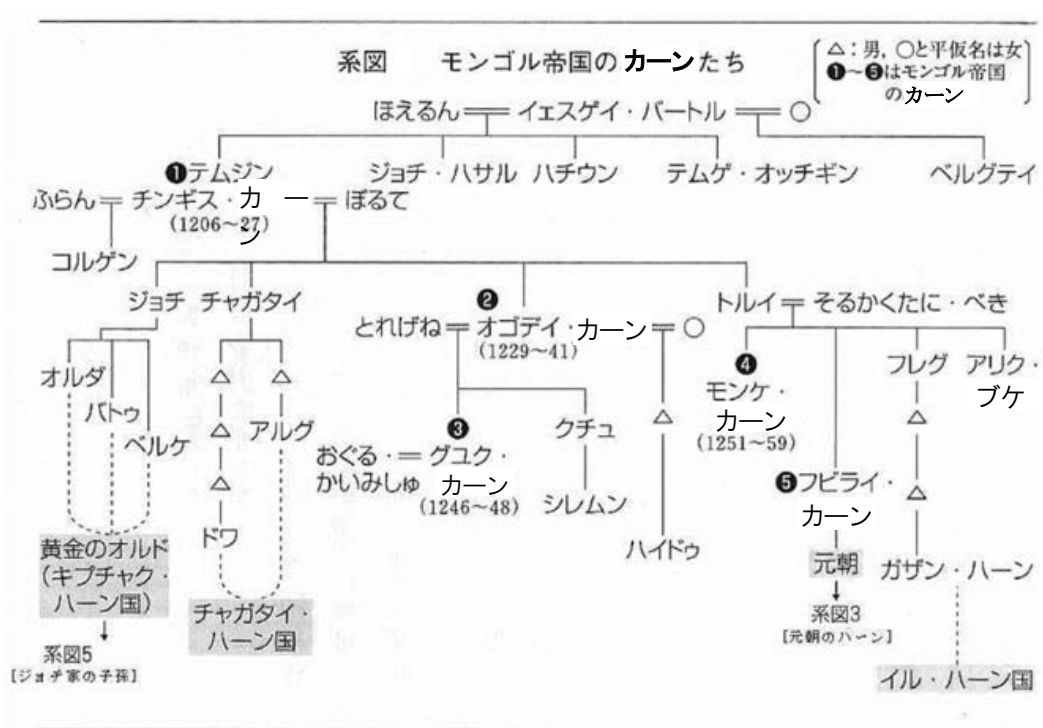
第1節 元と4カン国の成立

1227年にチンギス・カーン（在位 1206～1227 年）が没してから、1271年に元が成立するまでの43年間、その血を受け継ぐ2代にわたる兄弟のバランスと対立とにより、歴史は紡がれている。モンゴルには特に決まった相続制はなく、遺産の相続は末子が有利であり、家督の継承は実力主義という傾向にあった。しかし、カーンは、その者の実力のみで手に行うことができる権限ではなく、モンゴルの国会「クリルタイ」での総意を必要とした。よって、その者の才覚に加え、姻族、家門同士の因縁、モンゴル帝国に併合された各部族の思惑などが渦巻き、大きく影響している。

モンゴル帝国カーンの2代目としてチンギスの跡を継いだのは、三男オゴデイ（在位 1229～1241 年）である。彼は凡庸でおとなしかったようだが、次男チャガタイ（生年諸説あり〔1178 年/1185 年/1186 年〕～1242 年没）の野心の結果、即位したと考えられている。チャガタイは、長兄ジョチ（生年諸説あり〔1177 年/1184 年など〕～1225 年没）と後継者争いするも、ジョチはチンギスより先に1225年に没した。そこで後継者として有力となったのは実力のあった末弟トルイ（1192 年生～1232 年没）であった。その後継指名を阻むため、チャガタイはあえて自分に害のない性格のオゴデイを擁立したとされている。

3代目カーンは、オゴデイの息子グユク（在位 1246～1248 年）である。グユクは、オゴデイの他の子どもたちと比べると第6夫人の息子と格下であり、本人の特徴も、病弱、繊細か

図7 モンゴル帝国の系図



出典：<http://ethnos.takoffc.info/ThemeFrm.html>

つ神経質で人当たりが悪く、皇帝にふさわしい要素はもちあわせていない。しかし、先帝のオゴデイの正皇后ボラクチン・カトンには既に他界、次の序列にあった后ブクイ・カトンも間もなく他界し、グユクの母ドレゲネが好機を得ることとなる。ドレゲネは宮廷で国事を取り仕切り、強硬な多数派工作により、一族の最高長老であるジョチ家門バトゥ（1207年生～1256年没）の合意を得ないまま、息子のグユクを即位させることに成功した。

4代目カーンとしてモンケ（在位 1251～1259年）を擁立したのは、そのバトゥである。モンケはチンギスの末息子トルイの息子の1人であり、バトゥとはいとこにあたる。この2人は境遇に共通点が多い。両者ともチンギスの直系ではあるが、その父親がチャガタイとの権力争いに敗れた敗者一門の当主であった。そして母親同士は姉妹であり、しかも母親たちの血筋はモンゴル最高とされる旧ケレイト王国の王女であった。チンギス以降、モンケは初めて、本人の実力と確かな血筋を兼ね備えた正しき皇帝であったといえる。しかし、モンケは即位後、バトゥのやり方に反発したチャガタイ、オゴデイ両家門に徹底的な弾圧を加えるという、共同体にありえない行動をとったことが後への禍根となった。

1259年、モンケの急死により、帝国は分裂の危機に陥る。先帝の息子たちが若輩であれば、先帝の兄弟いずれかがカーンとなるのが、帝国の慣例であった。モンケ兄弟もこれに倣ったものの、クビライ（1215年生～1294年没）とアリク・ブケ（1219年生～1266年没）の2人が並び立ってしまう。クビライは自派を集めて北京近郊の開平府で、アリク・ブケは首都カラコルムで、それぞれクリルタイを開催し、カーンとなった。状況からみて、クビライがクーデター政権であり、アリク・ブケが正統であったとされている。しかし、同じモンゴルに弾圧を加えるなどをしてきたモンケ以来の体制には、不満や疑問を持っている者が多く、アリク・ブケ政権確立に動機をもつ者はほとんどいなかった。一方、クビライ政権は、中国の圧倒的な物資を掌握し、知略と戦績で漢人部隊とモンゴル諸勢力を与させることに成功し、唯一のカーンの地位を手中に収めた。

こうして、カーンは継承されたものの、この一連の争いが発端となり、クビライの中央政府と4カン国（キプチャク・カン国、チャガタイ・カン国、オゴデイ・カン国、イル・カン国）は独立政権として別々の道を歩むこととなる。クビライ新体制のもと、1266年に30年ぶりの正式な「クリルタイ」が開催されるはずであったが、カン国諸氏の相次ぐ死により、実現することはなかった。中央アジアはまたもや後継者選びの動乱へと転じ、帝国として再び一枚岩となることはなかった。

「クリルタイ」という合議制が独裁を許さず、共同体としての意思と行動を統制していたと言え、その不成立は、モンゴル帝国という共同体の組織力の弱体化を意味している。

第2節 拡大を支えた組織運営構造

第1項 モンゴル帝国を結びつける「チンギス統原理」

モンゴルとは、現在のシベリアと内モンゴル東部の境を流れるアルグン河のほとりにいた遊牧民の小さな部族集団名であり、民族名でも人種名でもない。遊牧社会は氏族ないし、それがいくつか集まった部族を基礎単位として構成され、人々の忠誠は英雄個人に注がれる。その英雄、すなわち統合する中心がいなくなると遊牧民はちりぢりとなり、個々の乱立にもどることが常であった。

図8 モンゴル部族の出自、アルグン川

チンギスが雑多な遊牧民たちを統合し、新国家の名を大モンゴル国とした結果、その遊牧民たちがモンゴルとなった。すなわち、中央ユーラシアの遊牧民は、ほとんどすべてが大モンゴル国という社会組織に組み込まれることで、モンゴル人となった。

モンゴル帝国の拡大につれて、モンゴルと呼ばれる人は支配層という趣を成し、特別な存在となった。

アルタイ山脈以西のモンゴル人は、14世紀に入ってイスラムに改宗し、トルコ語を話すようになったが、それでも意識はあくまでもモンゴル人であった。

このような時代や地域を超え、チンギス亡き後もモンゴルが消失しなかったのは「チンギス統原理」により、チンギスという神聖な存在への畏敬が継承されたことにある。モンゴル帝国の統合の源である「偉大なるチンギス・カーンに対する尊敬」と「チンギスが天から受けた世界征服の神聖な使命に対する信仰」は、チンギス・カーンの血を父方から引く男子だけがカーンを継承していくことで存続されていった。

「チンギス統原理」は、モンゴル帝国以前・以後の歴史展開を大きく変容させた。モンゴル帝国分裂後も18世紀に及ぶまで、チンギス末裔という神聖性が正統性の証となり、あらゆる国家運営に影響している。



出典：
https://upload.wikimedia.org/wikipedia/commons/thumb/e/ec/Amur_watershed.png/300px-Amur_watershed.png

第2項 モンゴル帝国民の行動を司る「ヤサ」

「チンギス統原理」とともに、広大なモンゴル帝国という共同体運営の規律と統制を維持したのは法令「ヤサ」の存在がある。一般的には、チンギスが即位した際に「大ヤサ」が

制定されたとされているが、諸説あり、原文も残っておらず、存在・内容ともに定かではない。いずれにせよ、「ヤサ」とは法令、法典、軍律などの意で使われ、チンギス・カーン以前のモンゴルの慣習やチンギスの言行などを口伝したものとされている。

異なる宗教、民族、言語を擁する広大なモンゴルが、同じベクトルで機動力をもって行動するためには、誰もが依拠できるヤサの存在が不可欠であり、皆がこれに基づいて行動することでモンゴルという帝国文化が形づくられていったと考えられる。

第3項 共同体としての意思決定機関「クリルタイ」

「クリルタイ」とは、皇帝一族や王侯貴族による最高決定機関である。次代皇帝の選出、遠征、法制定など重要事項は「クリルタイ」で決定された。これにより、帝国の最大権力者であるカーンであっても独裁はゆるされず、共同体としての合意が必要とされた。よって、カーンを継承するには、本人の血筋や能力だけではなく、「クリルタイ」を召集できるかどうか、政治力も問われる。第3代グユクの即位、クビライとアリル・ブケの第5代目争い、そして帝国の栄枯盛衰に、「クリルタイ」での結束が大きく影響している。

第4項 安全保障策としての「族外婚制度」

モンゴル帝国期とそれ以前は、「族外婚の制」が厳守されていた。遊牧集団が争いを避けるためには、縁戚関係を結び、同盟関係を築くことが最も効率的な手段であった。よって、モンゴル帝国においては、すべての有力部族や被支配一族がチンギス・カーンと縁組みしたり、チンギス・カーンには500人の妻がいたという説もある。

逆に、チンギス・カーン一族の婚姻も例外ではなく、娘を有力部族に嫁がせることで同盟関係を結び、領土を広げる機能を果たしていた。

第5項 効率的組織運営「千戸制」

1206年、チンギス・カーンは即位するとすぐに、十進法に基づくシステムチックな軍事・行政単位「千戸制」を編成している。自分の支配下の遊牧民を95の千戸集団に再編成し、千戸隊の下に百戸隊、百戸隊の下に十戸隊をおいた。そして、それぞれ千人隊長、百人隊長、十戸隊長を任命した。

「千戸制」自体は、匈奴以来の草原国家の伝統であり、モンゴル帝国が発明したものではない。しかし、チンギスはここで2つの改革を行っている。一つは、敵対したタタル、ケレイト、ナイマン、メルキトの部族体制を断ち切り、バラバラに編成したことである。同じ部族や氏族を同じ隊にまとめると、個々の千戸隊の統率は優れたものとなるが、帝国としての各隊の連携は望めない。国家が拡大するほどに統率が取れなくなっていくリスクとなる。チンギス・カーンはこれを避け、自身を頂点に、統率力のある組織再編をおこなったといえる。

また、この制度は軍事だけでなく、政治、行政、社会のすべての基礎となる組織として機能させた。これにより、一遊牧部族社会を脱し、帝国としての統治や経済運営を可能にした。

第6項 縦横の連帯を育む「ケシク」

これは、チンギスが、千戸長、百戸長、十戸長の子弟を集めて結成した近衛軍団で、オールドと呼ばれる天幕群の遊牧宮廷を守らせた。「ケシク」は、もともとモンゴル語で「恩寵」という意味をもつことから皇帝の恩寵を受ける者をさす。あるいはトルコ語の「当番、番直、宿直」をさす言葉から来ているという説もある。

小型の「ケシク」は、モンゴル帝国成立前より存在したが、チンギスは、帝国統一後、大幅に拡充している。宿直にあたる「宿衛（ケプチル）」、日常の護衛役の「箭筒士（コルチ）」、平時は「衛士（トルカウト）」で戦時には「勇士（バートル）」となるもの、合わせて1万にのぼった。それぞれ身分に応じて、3人から10人の従者がついたため、そこまで含めると相当の人数になる。

「ケシク」の日常の仕事は、オールドの維持管理とチンギスの生活全般にわたった。常にチンギスと行動をとともにし、その薫陶を受けた関係性は、主従であるとともに、師弟でもある。深い絆で結ばれることは必至だ。彼らの父兄が死去すると、その継承をチンギスから指名され、その後、自分の子供を再び「ケシク」としてチンギスのもとへ送り出した。

こうして、チンギスと「ケシク」の縦の連帯が築かれ、また、同じ時期に「ケシク」にいた者同士は強い仲間意識が醸成され、チンギスを中心に強固な連帯感を持つ特権集団が形成されることとなる。

征服が進むにつれ、遊牧民以外の様々な者へ人種・種族・言語・生活習慣の異なる有力者の子弟も「ケシク」に加わり、モンゴル武人へと成長していった。占領地の王侯貴族たちも臣従の証として子弟を「ケシク」に送り出した。それは人質であると同時にモンゴル国家の一員であることの保証でもあった。オールドだけでなく、一族ウルス当主も帝国内のモンゴル王侯たちも、身の回りに小型の「ケシク」を設置した。

「ケシク」は、同窓生が同じ学び舎で苦楽をとともにする中で出身校に誇りや愛情を持つものと同じく、モンゴル人としての個の形成と、同門であるという連帯感を醸成する効果的な装置だったといえる。これにより、民族や宗教などを超え、同じ志や価値観を共有することができたはずである。そこに共通の象徴や模範があることは一層効果的であり、チンギスの存在ほど適任はない。人柄、功績、説話などから素晴らしさに触れ、その野望を共有することにより、同じ体験と強固な目的意識でむすばれた集団が形成されたといえる。

第3節 多様な民族のモンゴル帝国への貢献

第1項 ウイグルもルーツは遊牧民

モンゴル帝国の異種混合の大軍団が機能したのには、モンゴルがその宗教や言語などを強要することなく、各地域の人種や民族、宗教や文化伝統にこだわらず、平等に扱い、優れた人材を積極的に登用したことにもある。

オゴデイ時代、中央政府がカラコルムに、広大な領地のうち、華北、中央アジア、イランの三大属領に総督府が設置され、中央と各地とは駅伝網でネットワークされた。純モンゴル

は武人であることを誇りとし、軍事と政治以外のこまごまとした行政・財務には、それに秀でた民族、才能ある個人、現地の者を当てている。総督府の長官クラスは、立派とは言えないレベルの出自のモンゴル人を中心に、これに準じるウイグル、キタン族の有力者数名、財務官僚は中央派遣のイラン系ムスリム、下部組織に在地有力者が配された。総督府の目的は徴税業務であったため、徴税の強制執行と各地域の反乱防止のため、地域軍の上に軍政統括本部が設置された。書記局は多人種であったが、ウイグル人のチンカイという者が政府首班であり、その職務権限は帝国東西すべてにわたっていたという。カーンの命令はここを通して文書化され、帝国各地へ駅伝網により伝達された。

モンゴル帝国史の中には、ウイグルの存在をあちこちに認めることができる。人種や民族、宗教などにこだわらず、優秀な人材を登用したモンゴルではあるが、特に、ウイグル人の活躍が目立つのはなぜだろうか。

ウイグル人は、もともとシベリアの森林の住民であったのが南下して、モンゴル草原に出てきたものと考えられている。森林の狩猟民が草原に出て来て遊牧民になるということは、中央ユーラシアでは何度も繰り返されてきたことで、モンゴル人も同様であった。すなわち、ウイグルとモンゴルは、草原を駆け巡っていた遊牧民という同じルーツを有していた人たちと言える。

遊牧民とは、非常に自由気ままなイメージでとらえられがちだが、その実、とてもシステマチックに暮らしている。季節で住まいを変えるため、それぞれの集団ごとに夏营地、冬营地があり、それらを行き来する移動経路は一定していた。夏季の家族単位での分散放牧と、冬期の氏族・部族単位での集団越冬という極端な離合集散を一年の中で繰り返し、厳しい自然条件の中で移動と設営を重ねる暮らしぶりである。同じ環境下で、同じ遊牧生活を送っていれば、自ずと価値観や思考は似通ってくることは想像に難くない。

モンゴルとは、小さな部族集団名に過ぎず、民族名でも人種名でもない。雑多な牧民たちをチンギスが統合し、新国家の名を大モンゴル国とした結果、それらがモンゴルとなったものである。モンゴルには多様性があり、異なる民族や文化も特に気にされることなく共存していたようであるが、役人は意思の疎通がしやすいほうが即戦力になるのは確かである。

ウイグルは、モンゴルの多様な人の構成の中にあっても、同じルーツである事実と、モンゴルの思考と生活様式を解する者として、まず、一定のアドバンテージをもっていたのではないだろうか。

第2項 互惠関係で結ばれ、広がる共同体

遊牧国家とは、軍事力を握る遊牧民と経済力を支えるオアシス民が柱となって構成される。完全には自給自足できない遊牧民が、自給自足できるオアシス民に生活の一部を頼り、オアシス民は生産体系も活動範囲も異なる遊牧民を通して多様な物質を入手でき、経済基盤も広がり、限定的な地域での自足以上の生産・通商活動が可能になる。互惠関係である。

この点から考えると、ウイグルは遊牧国家とオアシス社会の両方に通じていたため、武人

でありたいモンゴルにとって、こんな好都合な相手はなかったはずである。

744年に建国したウイグル帝国は、モンゴル高原の遊牧国家として、100年近く繁栄していた。しかし、840年、天災と内乱で弱っていたところを西北から侵入してきたキルギス人に倒され、モンゴル高原から四散することとなる。ある者は内モンゴルに、ある者は甘粛に、ある者は天山山脈に逃げ込んだ。それぞれ新たな国を成したが、三国とも国家基盤はオアシス経済に変化し、通商国家の一面を有していた。

また、ウイグルは、高度な政治技術も有していた。唐代755年に起こった安史の乱に介入して唐に恩を売り、その強い立場で大いに唐の政治を動かし、その技術を積み上げていった。

そんなウイグルのうち天山ウイグル王国が、モンゴルの隆盛を予想してチンギスの臣下となったのは1209年のことである。この頃、ウイグルはカラ・キタイという強国の支配下にあったが、その代官を殺し、モンゴルに投降したのである。このことはモンゴル帝国発展において大きな契機の一つに数えられる。

モンゴルは、ウイグルが遊牧帝国時代から受け継ぎ、通商国家としてのノウハウを積み上げてきた高度な政治技術と経済能力をまるごと手に入れたこととなる。武人としてこまごまとした行政や財政にあたることをよしとしないモンゴルにとっては、これ以上ない人材である。彼らの手腕が国力を高め、帝国拡大を支えたことだろう。加えて、天山はモンゴル中央より遠い西側にあり、ここを拠点にカラ・キタイなどの周辺国を直撃できるようになったことも、軍事国家にとっては非常に大きい。ウイグル側から降ったとはいえ、草創期にあったモンゴル帝国にあっては、願ってもいない展開だったといえる。ウイグル王はチンギスの娘と婚姻し、モンゴル王家の一員として高い地位を維持したことからも、その価値が推測できる。

第3項 多言語と外地情報に通じ、交渉力にも優れたグローバル人材

天山ウイグル王国は、政治、経済の力に加え、実に豊かな語学文化も有していた。その市民は、漢族の子孫、ソグド系、イラン系、チベット系など多様な人種で構成され、言葉もウイグル語という名のトルコ語、漢語、ソグド語がかなり使われ、ペルシア語、アラビア語、チベット語、さらには仏教上の学問語だったサンスクリット語なども飛び交ったという。ウイグル語自体が、こうした様々な言語から多くの単語や概念をとりこんでいる。モンゴル中央の命令を文書化して各地域へ伝えるうえで、この語学力は帝国運営に必須である。

また、ウイグルの冬の都城であった旧高昌国のカラホジョは、東西交易の一大拠点であり、多様な人々の往来はもちろん、諸国の地理、風土、人情、物産、政情についての生きた情報が集まっていた。情報を有する者が強いのは時代を越えて変わらぬセオリーである。そして、あらゆる異国からやってくる商人たちと日々繰り広げられる商談は、ウイグルの人々の商才、交渉力を磨いたことだろう。

結成したばかりのモンゴル帝国にとって、その中枢の盤石化に役立つウイグル王家や官僚はもちろん、いくつかの言語をあやつり、諸国の事情にも通じ、交渉力もあるグローバル人

材集団であるウイグル人全体が民力向上に寄与し、モンゴルの国力を下支えしたのではないだろうか。



ウイグルの遊牧民（2016年8月16日筆者撮影） キルギスの遊牧民（2017年8月30日筆者撮影）



ウイグルのバザール（2016年8月15日筆者撮影）



高昌城（カラホジョ）跡（2016年8月13日筆者撮影）

第4節 モンゴル帝国の拡大を促進したオゴデイの政治

チンギス治世（在位 1206～1227 年）と次代オゴデイ治世（在位 1229～1241 年）で、モンゴルの直接支配領域は大きく異なり、拡大している。チンギスが即位した当初の領域は、現モンゴルとあまり変わらないが、オゴデイの時代になって、東はアムール川河口、西はカフカス地域まで及んでいる。この領地の拡大と巨大な帝国運営を可能とならしめた要因の一端に、オゴデイ時代に始まった統治機構や占領地政策があるのではないだろうか。オゴデイの時代には、さまざまな国家システムが整備されている。

モンゴル帝国民の行動をつかさどる法令「ヤサ」の成文化、広大な帝国の経済基盤を支える徴税制度の導入は、この時代に実施されている。また、1229 年に制度化したモンゴル帝国の郵便制「ジャムチ」は、当時、ユーラシア大陸で最速の情報通信網であった。これにより、成文化された「ヤサ」、富や交易も、容易に広域に行きわたることとなった。

外征の仕方も、この時代に大きく変化している。チンギス時代、外征は民族移動方式だったのに対し、オゴデイ時代は、牧民たち十戸ごとに 2 人の若い戦士を供出させて編成した。その遠征軍主力の兵員は 10 代前半の若者が多く、それが多くの経験をもつ熟練の指揮官の下、長い遠征過程での体験という実地訓練を通して、故郷から離れた土地で、大人の優れた戦士に成長していった。この外征部隊の有り様が、モンゴル帝国の拡大に貢献している。

まず、兵員の若さは、迅速な軍事行動、命令に対する素直さ、妻子がいない身軽さと遠征先への馴染みやすさ、困苦欠乏への耐性という、勝利に邁進できる好条件だったといえる。そして、戦士たちの中から遠征先に落ち着く者が出ることで、家族や一族親類の住むモンゴル高原を心のふるさととする求心力をそのままに、領地と人のつながりが拡大していった。

モンゴルの強さは軍事力だけではなく、知略からも説かれている。攻め先にモンゴルは強暴残忍であるという噂を流し、戦わずして都市や集落を降伏させる「恐怖戦略」である。しかし、実際には降伏させたのではなく、望んでモンゴル帝国側についたケースが多いと言われている。当時は「征服」「降伏」という概念ではなく、「イルになる＝仲間になる」と表現していたことから、その意識が見て取れる。そうして、都市機能が損なわれないということは、人心の恨みをかいづらく、また都市を再建する人手や手間、財源を必要としないということになる。そうして、各地を吸収・編成し、統率が取れた組織として、モンゴル帝国はモンゴル人に限らない大軍団と化していった。つまり、モンゴル帝国の人材と領域のネットワークを急拡大していったといえる。

第5節 クビライ・カーンのチベット仏教受容政策：問題解決力と情報力

モンゴル帝国とその隣国中国との関係性は宗教思想の選択にまで大きく影響している。第5 皇帝クビライ・カーンがチベット仏教をモンゴル帝国で受容したことはそういった歴史的、地理的、そして政治的背景があったのである。本節では、モンゴル帝国とチベット仏教の関係性について、特にモンゴル帝国の政治的視点から論じる。

モンゴル帝国が築かれるまでの時代、そしてチンギス・カーンが各地を征服し始めた時代

では南には儒教（中国）、西にはイスラム、そして北にはキリスト教（ロシア）の文化圏が存在していた。13世紀にチンギスがモンゴル帝国を築き上げたとき、チンギスの元には「テブ・テングリ（天なる神）」と呼ばれるシャーマンがいたという記録が残っている。モンゴルの部族民の間ではそれまで特に決まった信仰があったわけではないが、土着のシャマニズムが奉じられていたとされている。各地へ遠征を繰り返す中で、モンゴル帝国には多様な文化や民族が入り混じるようになっていったが、流入した文化に対しても特に制限がなされることはなかった。更に皇族に関して言えば、チンギスの法令「ヤサ」の影響で基本的に宗教思想に対して寛容であった。実際、クビライの母はネストリウス派のクリスチャンであり、その影響からかクビライの2人の弟はキリスト教を熱心に信仰している。その一方で、宮殿内ではムスリムの官僚も多くいたという。

このような状況の中、なぜ第5代クビライの時代になって別段チベット仏教が受容されるに至ったのだろうか。その最大の要因が南方の中国との関係であった。他4人の前任の皇帝とうって変わり、クビライはモンゴルの皇族としては初めて本格的な中国（漢地）支配を目的とした戦略として、拠点を中国に移したのである。中国では、漢民族による独自の宗教思想が存在し、現地の行政と深いつながりを持っていた。これは、第2代オゴデイ・カーンの時代に、書記官養成を全真教に委任して以来続いている状況であった。事実上、全真教が文章行政全般を牛耳っている状況をクビライ自身、兄モンケが第4代カーンに即位すると同時に任された漢地の経営の時に認識している。漢地の完全な掌握のためには、行政と宗教を切り離す必要があり、且つ遠方モンゴルから統治するのではなく、その統治拠点を漢地にすることを考えたのである。

クビライは、まず全真教の排除を目的に表向きは第3回教義論争を装いつつチベット仏教を支持した。これにより、漢地行政に食い込んでいた全真教、そしてモンケが主催した第1・2回の論争の際に中心的な役割を果たし、また同じく高い文書行政能力を持った人材を多く擁する禅宗教団が政治に深く関与しないよう、手を打ったのである。そして、クビライは1260年にカーンに即位すると同時に、かねてより尊敬していたチベットの高僧パクパを国師に任命したのである。

パクパは、チベット仏教のサキャ派の創始者であるクンチョク・ゲルポの一族であったため、パクパが国師に任命されて以降はモンゴル宮廷においてサキャ派が決定的な力を持つようになった。よって、モンゴル宮廷においては、サキャ派が中心とするものであったが、先に述べたようにチベット仏教はあくまで政治的理由で起用されたにすぎなかったため、影響力は宮廷内のモンゴル貴族たち内に留まった。そのため、別段サキャ派の信仰が元朝時代の民衆に広まったこともなかった。また、現代のモンゴルの寺院や信仰においてサキャ派の影響は全く見られない。パクパの登用はあくまで政治的判断によるものであったため、クビライの時代ではモンゴル皇族によるチベット仏教の狂信的な崇拜などは起こることもなかった。クビライは漢地経営にどんな宗教であっても深く関与することを警戒していたのである。更に、クビライの時代になると、各所でモンゴル民族にある異変が起きていた。征服地にいる

モンゴル民族が被征服者の文化や宗教に染まっていったのである。この状況は、特にその土地で信仰される思想により高度な文化築いた地においてその傾向が強かった。征服地では、モンゴル民族はその地の経営を任されたモンゴル皇族しかいない。その半面、被征服者の数は圧倒的であった。大多数の被征服者と少数のモンゴル民族の構図は、時間の経過と共に彼らモンゴル民族の文化を喪失させていった。これはモンゴル民族が意識せざるをえない南方、漢民族のもつ高度な文化においても同様のことが起こっていた。中国に対置するためにも、モンゴル文化の高度化と新しい宗教の導入が急務であった。

そのような経緯の下、クビライがパクパを登用した理由には、そうした文化の高度化に対するパクパへの期待があった。具体的には、モンゴル皇族に対して特に宗教教学の教育と教化であった。更にパクパはクビライの命により、モンゴル語を表わすための新字を、チベット文字を改良して製作した。これはパクパ文字と呼ばれ使用された。パクパに対するクビライの信頼の厚さは、最終的にはチベットのウー（衛）とツァン（蔵）両地方の13万戸の統治を委任するまでに至った。あくまでパクパたちチベット民族に、チベット地方を統治する権利を与えたのである。このことから帝国の発展に確かに貢献した者に対するクビライの誠意が伺える。

クビライがチベット仏教を持ち上げ、自ら積極的に導入した背景にはモンゴル帝国と隣国の中国との関係とチベット経営のためによる政治的な判断であった。クビライは政治と信仰をはっきりと区別する手腕を持っていたため、モンゴルの歴史の中でチベット仏教の影響を強く受けた形跡を見つけることはほとんどできない。しかし、モンゴルの歴史は中国を抜きに語ることは出来ないのである。

第5代皇帝クビライ・カーンについてまとめると、物事のメリットとデメリットを判断する観察眼をもち、積極的に新しいものを取り入れる姿勢があった。また、皇帝として得た情報を活用できる応用力に長け、戦略を実行する行動力と、何十万もの国民を動かす手腕があったといえる。クビライは現代よりも遙かに情報を集めることが難しい時代に生きていたが、敵を知る努力を怠らなかった。一方で、パクパやマルコ・ポーロなど異文化や多文化の来客に始めて出会ったときには積極的に相手に質問しており、このことから相手に興味、関心を持つ人材であったことやクビライの関心の高さや広さが非常に広範囲に亘るものであったと考えられる。年齢が自分よりずっと若い人に対しても敬意を示す礼儀や度量があり、政治的な判断のためであるならば新しい宗教を導入することも厭わない姿勢からクビライは自ら積極的に様々な情報を集めており、だからこそ大胆な戦略を取り領地を拡大および維持できたと考える。

一方、高度な情報化社会を生きる私達は、望みさえすればその指先とデバイス一つでほぼ全ての情報に簡単にアクセスできるようになり、毎日膨大な情報に触れて過ごしている。常に受身で情報を得ることができる環境であるため、積極的に情報収集することをしない人が多い。逆に、興味をもって自ら情報に触れる瞬間は、ごく一部の自らの関心のある情報のみであり断片的な情報を鵜呑みにする傾向がある。

近年インスタグラムやツイッター、フェイスブックなどの SNS（ソーシャル・ネットワーク・サービス）が流行する中、情報との関わり方に関する問題が多く議論されている。内容を精査せずに情報を鵜呑みにする点や、投稿に対して「いいね！」と画面タップ 1 回で簡単に同意の意を表現できるライクと呼ばれる機能により、「ライク数が多い投稿ほど皆が認めている（同意している）もの」であるためその投稿が良いものだとする風潮（ライク主義）の蔓延、情報の価値や情報の信憑性、そして切り取られた事実の一側面で判断する傾向があることなど枚挙に暇がない。特にライク主義による弊害は多岐に亘り、実際は投稿内容の質とライクの数乖離している場合が多い。「みんながいいねをしているから自分も」と内容を精査せずにライクをタップするため、容易にライク数が増えていく。こうして質の低い作品が本当に質の高い作品よりもいいものだと認識されていき、SNS の画面上には今話題となっている投稿、つまりライク数の多い投稿がクローズアップされる。この結果、質が高い投稿であっても SNS ではその質の高さや本質を認められない、それどころか投稿自体が、質の低いのにライク数が多い投稿に埋もれてしまい、日の目を浴びることすら難しい状況になっているのである。また、ライク主義に便乗した炎上商法（フェイクニュースを拡散させることでわざと注目をさせる）なども問題となっている。

積極的な情報収集という点において、近年新聞を読まなくなったことにより、目的の情報とその周辺情報を吸収するセレンディピティ（Serendipity）の損失に警鐘を鳴らす有識者も多い。セレンディピティとは偶然貴重なことを発見する能力や遇察力の意で、その由来は「セレンディップの三人の王子」の物語で王子が意外な出来事に直面してもその洞察力で潜り抜けたという逸話からである。

実際 2017 年 10 月 29 日横浜ニュースパークで開催されたジャパンタイムズ主催の講演会「メディアのマーケティング戦略と課題について考える～新聞からデジタルまで」では、デジタル面の問題としてセレンディピティが殆どなくなってしまったことを挙げ、自分の知りたいとこだけ知るといふ情報の偏りに対しての議論がなされた。更に、教育の課題として自発的な学びがない状態だとし、問題意識や探究心を持てるように教育制度を変えていかなければならないとの意見が上がった。

クビライのチベット仏教受容という政治的な判断は、結果的にチベット仏教僧パクパにチベット経営の委任をすることでチベット仏教徒にとってもメリットがあった。自らの利害と相手の利害を認識した上での行動であったといえる。これこそ、モンゴル帝国の“ゆるやかな統治”といえよう。モンゴル帝国と共にあることで何らかのメリットを感じられれば他民族であれど、互いの目的のために共存できたのであろう。逆にすべてをモンゴル皇族が決め付けてしまうような統治であれば、あの広大な帝国を築くことは不可能であったに違いない。

クビライの生涯とその政策から日頃から努めて情報を収集していなければ、問題解決に対する道筋は拓けないことを学んだ。特に問題に対して先手となる素早い意思決定はできないと強く感じた。現代のデジタル化した世界は、確かにデジタル以前の時代と比較すると簡単に情報を得られ、インターネットの世界では国境すら概念からなくなり、大変便利になった

と言える。だがその一方で、クビライのような情報感度を持ち、自らが得た情報を駆使して問題を早期に解決することができる人は少ない。重要なのは、単なる教養としての知識やスマートフォンの画面を通じて得た一部の偏った情報ではない。膨大な情報の中で生活している私達は、クビライの生涯から改めて問題解決のために駆使できる知力の基盤の大切さ、そしてその基盤を築くために日頃から努めていく姿勢を学ばなければならないのである。

第4章 現代中国におけるモンゴル

第1節 中国の歴史教科書から見るチンギス・カーンとモンゴル帝国

第1項 中国の歴史教科書について

中国では義務教育の第7年目にあたる初級中学1年次（日本の中学1年にあたる）で歴史を学習しはじめ、以降毎年にもわたって学習を継続する。その間には人民教育出版社による『歴史』と題する教科書6冊（7年級2冊、8年級2冊、9年級2冊）により学習をすすめる。ついで高級中学（日本の高校にあたる）では、まず必修教科書3冊を学習する。なお理系の学生はこの3冊で歴史の学習を終了する。文系の学生はなお学習を続け、選修教科書6冊の一部を学習することになる。そしてすべては高校3年のときに受験する「高考」（全国普通高等学校招生入学考試、なお高等学校とは中国では大学などの教育機関を指す。日本で言うセンター試験にあたる。中国には大学ごとに実施される二次試験は基本的に存在しない）と対応するものとなっている。

なお、高校の歴史は45分の授業が1年次に週3度、2年次に週4度（ただし理系学生は年度の前半で終了）、3年次に週6度にわたって開講されていた。ここに備考のため義務教育7年級から高級中学3年次（日本でいう高校3年）までの教科書の目次を列挙しよう。

7年級（中学1年次）の『歴史』上巻の目次。第1単元「中華文明の起源」（以下括弧内では単元内の課を簡単に紹介する。第1単元では原始の社会・農耕の開始）、第2単元「国家の成立と社会の変革」（夏・殷・周・春秋・戦国）、第3単元「統一国家の建設」（秦・漢・匈奴・西域）、第4単元「政権の分裂と民族の融合」（魏晉南北朝）、附録「中国歴史大事年表・古代部分（上）」、後記。

7年級の『歴史』下巻の目次。第1単元「繁栄と開放の社会」（隋・唐・科挙・対外関係）、第2単元「経済の重心の南方移動と民族関係の発展」（宋・モンゴル）、第3単元「統一多民族国家の強化と社会の危機」（明・清・台湾収復）、附録1「中国歴史大事年表・古代部分（下）」、附録2「中国歴史紀年表」、附録3「推薦できる参考書籍」「歴史学習で推薦するサイト」、後記。

8年級（中学2年次）の『歴史』上巻の目次。第1単元「侵略と抵抗」（アヘン戦争・新疆収復・日清戦争・義和団事件）、第2単元「近代化の模索」（洋務運動・戊戌変法・辛亥革命・新文化運動）、第3単元「新民主主義革命の興起」（五四運動・中国共産党の成立・北伐・長征）、第4単元「中華民族による抗日戦争」（日中戦争と国共内戦）、第6単元「経済と社会生活」（民族工業の発展・社会生活の変化）、第7単元「科学技術と思想文化」、附録「中国歴史大事年表（近代部分）」、後記。

8年級の『歴史』下巻の目次。第1単元「中華人民共和国の成立と強化」（成立・土地改革）、第2単元「社会主義の道のりの探索」（工業化・三大改造・文化大革命）、第3単元「中国の特色ある社会主義の建設」（改革開放・中国特色社会主义）、第4単元「民族の団結と祖国の統一」（民族政策・香港と澳門の復帰・台湾との交流）、第5単元「国防建設と外交成果」（独立自主外交など）、第6単元「科学技術・教育と文化」（科学技術の成果・教育・百花斉放）、

第7単元「社会生活」(生活方式の変化)、附録「中国歴史大事年表(現代部分)」、後記。

9年級(中学3年次)の『歴史』上巻の目次。第1単元「人類文明の誕生」、第2単元「アジアとヨーロッパの封建社会」、第3単元「古代文明の伝播と発展」、第4単元「近代への歩み」、第5単元「植民地の拡張と植民地の人々の抵抗」、第6単元「プロレタリアートの闘争とブルジョワ統治の強化」、第7単元「独占資本主義時代の世界」、第8単元「燦然たる近代文化」、附録「世界歴史大事年表」「重要語彙の中英文対照表」、後記。

9年級の『歴史』下巻の目次。第1単元「ソヴィエト連邦の社会主義の道のりの探索」、第2単元「ヴェルサイユ・ワシントン体制のもとでの世界」、第3単元「第二次世界大戦」、第4単元「戦後の主要な資本主義国家の発展と変化」、第5単元「社会主義国家の改革と変容」、第6単元「アジア・アフリカ・ラテンアメリカ国家の独立と発展」、第7単元「戦後世界の構造の変容」、第8単元「現代科学技術と文化」、附録「世界歴史大事年表」「重要語彙の中英文対照表」、後記。

高校1年次の『必修』第1冊の目次。第1単元「古代中国の政治制度」、第2単元「古代ギリシアローマの政治制度」、第3単元「近代西方資本主義政治制度の確立と発展」、第4単元「近代中国の侵略への対抗・民主への希求の潮流」、第5単元「科学社会主義理論から社会主義制度の建立に到るまで」、第6単元「現代中国の政治建設と祖国統一」、第7単元「現代中国の対外関係」、第8単元「現代の世界政治構造の多極化の趨勢」、附録1「中外歴史大事年表」、附録2「重要語彙の中英文対照表」、附録3「歴史学習で推薦するサイト」、後記。

高校1年次の『必修』第2冊の目次。第1単元「古代中国経済の基本構造と特徴」、第2単元「資本主義世界の市場の形成と発展」、第3単元「近代中国経済の構造の変動と資本主義の曲折および発展」、第5単元「中国近現代社会の生活の変遷」、第6単元「世界の資本主義経済の政策調整」、第7単元「ソヴィエト連邦の社会主義建設」、第8単元「世界経済のグローバル化の趨勢」、附録1「中外歴史大事年表」、附録2「重要語彙の中英文対照表」、附録3「歴史学習で推薦するサイト」、後記。

高校2年次の『必修』第3冊の目次。第1単元「中国の伝統文化の主流思想の変容」、第2単元「西方人文精神の起源と発展」、第3単元「古代中国の科学技術と文学・芸術」、第4単元「近代以降の世界の科学発展の道のり」、第5単元「近代中国の思想解放の潮流」、第6単元「二十世紀以降の中国の重大思想理論の成果」、第7単元「現代中国の科学技術・教育と文学・芸術」、第8単元「十九世紀以降の世界の文学・芸術」、附録1「中外歴史大事年表」、附録2「重要語彙の中英文対照表」、後記。

高校2年次の『選修』第1冊の目次。第1単元「ソロンの改革」、第2単元「(秦の) 商鞅の変法」、第3単元「北魏の孝文帝の改革」、第4単元「(北宋の) 王安石の変法」、第5単元「ヨーロッパの宗教改革」、第6単元「(エジプトの) ムハンマド・アリーの改革」、第7単元「1861年のロシアの農奴制改革」、第8単元「日本の明治維新」、第9単元「(中国・清朝の) 戊戌変法」、附録「重要語彙の中英文対照表」、後記。

高校3年次の『選修』第2冊の目次。第1単元「専制主義と民主思想の衝突」、第2単元「イ

ギリス議会と国王の戦い」、第3単元「封建専制統治と戦う宣言文」(アメリカ独立宣言・フランス人権宣言・中華民国臨時約法)、第4単元「ブルジョワ代議制の政治的枠組みの成立」、第5単元「フランスの民主の力と専制勢力の戦い」、第6単元「近代中国の民主思想と専制への抵抗」、第7単元「プロレタリアートと一般大衆の民主獲得の戦い」、附録「重要語彙の中英文対照表」、後記。

高校3年次の『選修』第3冊の目次。第1単元「第一次世界大戦」、第2単元「ヴェルサイユ・ワシントン体制のもとでの世界」、第3単元「第二次世界大戦」、第4単元「ヤルタ体制の下での冷戦と平和」第5単元「戦いがやまない局地戦」(朝鮮戦争・ベトナム戦争・中東問題・南アジア・イランとイラク・湾岸戦争)、第6単元「平和と発展」(国際連合・世界の人々の反戦運動)、附録「重要語彙の中英文対照表」、後記。

高校3年次の『選修』第4冊の目次。第1単元「古代中国の政治家」(始皇帝・唐太宗・康熙帝)、第2単元「東西の先哲」(孔子・プラトン・アリストテレス)、第3単元「ヨーロッパ・アメリカのブルジョワ革命時代の傑出した人物」(クロムウェル・ワシントン・ナポレオン)、第4単元「アジアの覚醒の先駆者」(孫文・ガンディー・ケマル アタテュルク)、第5単元「プロレタリアート革命家」(マルクス・エンゲルス・レーニン・毛沢東・鄧小平)、第6単元「傑出した科学者」(李時珍・詹天佑・李四光・ニュートン・アインシュタイン)。

高校3年次の『選修』第5冊の目次。第1単元「歴史と歴史の復元」、第2単元「人類の起源の謎」、第3単元「ミノス(クノッソス)宮殿遺跡とクレタ文明」、第4単元「二里头文化の探索」、第5単元「三星堆遺跡——古代の蜀(四川)文明の謎」、第6単元「マヤ文明の消滅」、第7単元「グレート・ジンバブウェ遺跡とアフリカ文明の探求」、附録1「推薦できる参考書籍とサイト」、附録2「重要語彙の中英文対照表」、附録3「大事年表」、後記。

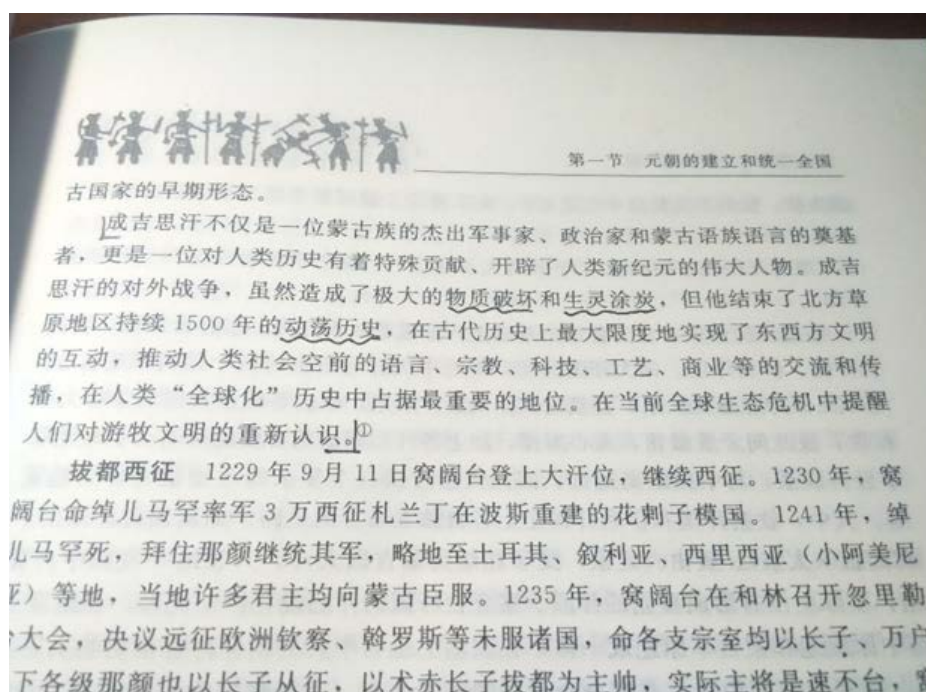
高校3年次の『選修』第6冊の目次。第1単元「全人類共同のたからもの——世界文化遺産」、第2単元「古代エジプトの歴史遺産」、第3単元「古代ギリシアローマの歴史遺跡」、第4単元「ヨーロッパのルネサンス時期の文化遺産」、第5単元「中国の著名な歴史遺跡」、第6単元「明清の宮殿、皇帝所有の庭園、そして陵墓」、第7単元「多様多彩な中国の古城と古村落」、第8単元「人類の非物質文化遺産——中国の崑曲」、第9単元「警告の意義を有する世界文化遺産」(アフリカのゴレ島・アウシュヴィッツ強制収容所)、附録「重要語彙の中英文対照表」、後記。

第2項 大学生むけ教科書

第一に紹介するのは、朱紹侯・斉濤・王育済主編『高等院校文科教材 中国古代史』第5版・下冊(福建人民出版社、2010年5月)の第13章「元朝の大一統(1271—1368年)」第1節「元朝の建設と全国の統一」である。大学教育では高校以前と異なり指定教科書は存在せず、担当教員の自由裁量となっている。たとえば2006年度の復旦大学開講の大学生むけ歴史学講義は歴史学系所属の樊樹志教授によるものであったが、指定の教科書は樊樹志『国史十六講』(中華書局、2006年4月)であった。とはいえ中国の各大学で教養科目「歴史学」を

担当する教員すべてが著作を持つわけではない。本稿の『高等院校文科教材 中国古代史』はこうした教養科目で多く指定される標準的な教科書である。なお訳出該当部分は本書脚注①によれば中国社会科学院モンゴル学研究センター「成吉思汗与蒙古国建立国際學術研討会綜述」(『民族研究』2006年第6期)に基づいたという。以下、部分的な訳出を行う。以降に本稿本文に附した〔亀甲括弧〕は訳者による補注である。

チンギス・カーンは、ただモンゴル族の傑出した軍事指導者・政治家さらにはモンゴル語族〔アルタイ諸語のモンゴル語族(言語グループ)。モンゴル語は日本語と同様の膠着語である〕の言語の基盤を作った人物であるばかりではなく、さらには人類の歴史に対して特別な貢献をし、人類の新たな歴史を開いた偉大な人物なのである。チンギス・カーンの対外戦争は、大規模な物質的破壊と生活面での多大な困難を引き起こしたが、しかし彼は北方草原地域で1500年ものあいだ続いていた激動の歴史に終止符を打ち、古代の歴史〔中華人民共和国ではおよそ1840年のアヘン戦争までを古代とする。また1840年から1949年を近代とし、半殖民地半封建社会時代とする。そのうち1840年から1919年(五四運動)までを旧民主主義革命時期と、また1919年から1949年までを新民主主義革命時期としている。〕における東西文明の相互作用を最大規模で実現し、人類社会で空前の言語・宗教・科学技術・工芸・商業といった交流と伝播を推進し、人類の「グローバル化」の歴史で最も重要な地位を占めているのである。そして現在の地球規模の生態危機(ecological crisis)のなかで、人々へ遊牧文明の再認識を促しているのでもある。

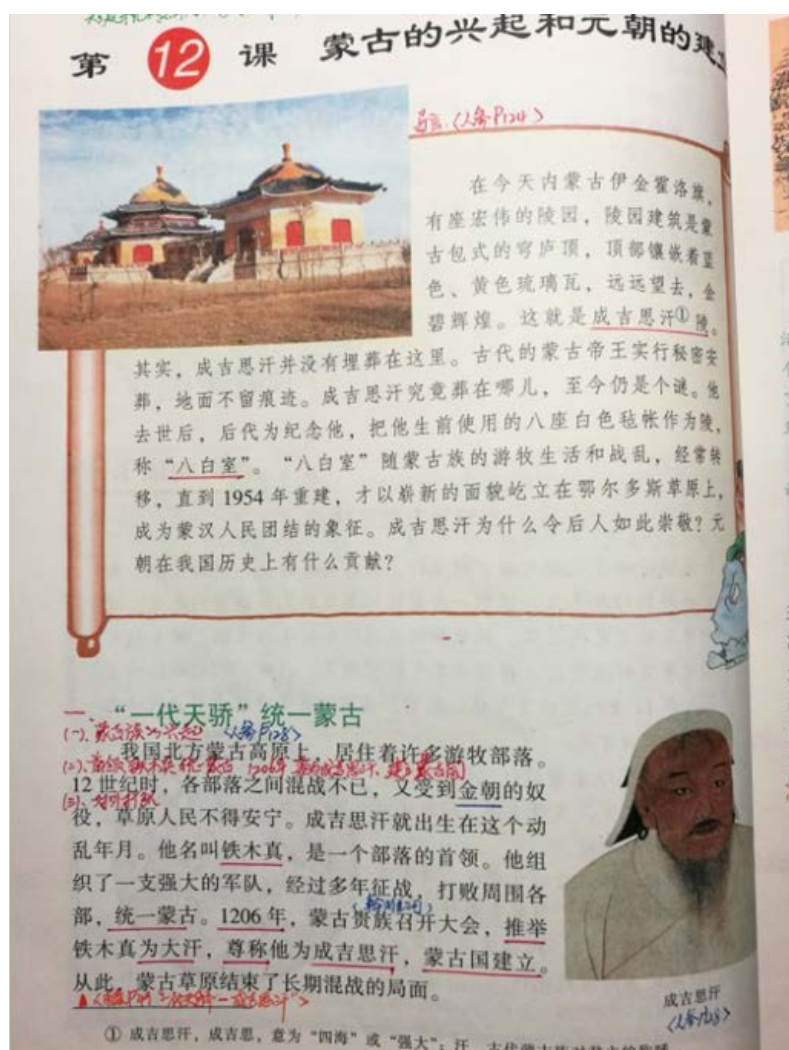


出典：朱紹侯・齊濤・王育濟主編『高等院校文科教材 中国古代史』第5版・下冊(福建人民出版社、2010年5月)の第13章「元朝の大一統(1271—1368年)」第1節「元朝の建設と全国の統一」

第3項 高校生むけ教科書

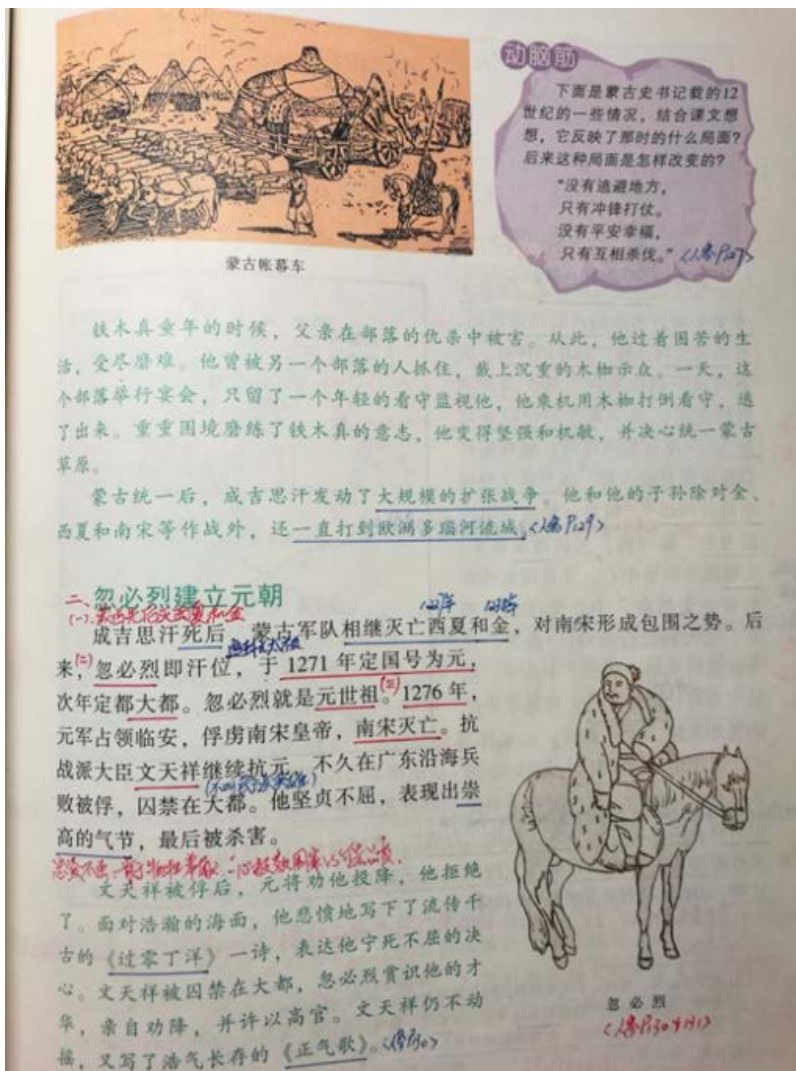
第二に紹介するのは、人民教育出版社課程教材研究所歴史課程教材研究開発中心編『義務教育課程標準実験教科書 中国歴史』7年級・下冊（人民教育出版社、2007年1月第3版）の第2単元「経済の重心の南方移動と民族関係の発展」第12課「モンゴルの興起と元朝の建立」である。これは第一項で紹介したように中学2年の歴史授業のための国定教科書となる。以下、部分的な訳出を行う。

「天に愛された不世出の遊牧君主がモンゴルを統一する」 我が国の北方のモンゴル高原は、多くの遊牧民の部族を養うことができた。12世紀には、各部族は抗争がやまず、また金朝の奴隸的な酷使を受けており、草原の人々は安寧を得られなかった。チンギス・カーンはまさに



にこのような動乱の時代に出生したのである。彼の名はテムジン、とある部族のリーダーであった。彼は強大な軍を作り上げ、長い征服戦争を経て、周囲の各部に勝利し、モンゴルを統一したのである。1206年、モンゴルの貴族は大会〔すなわちクリルタイ〕を開催し、テムジンを推戴して大ハーンとし、彼を尊称してチンギス・ハーンとし、ここにモンゴル国が成立したのである。これより、モンゴル高原は長期の混戦という局面を終えたのである。テムジンの幼い頃、父は部族間の復讐のなかで命を落とした〔すなわちイエスゲイ・バートル Yesügei Ba'atur。以前に

出典：人民教育出版社課程教材研究所歴史課程教材研究開発中心編『義務教育課程標準実験教科書 中国歴史』7年級・下冊（人民教育出版社、2007年1月第3版）の第2単元「経済の重心の南方移動と民族関係の発展」第12課「モンゴルの興起と元朝の建立」



出典：人民教育出版社課程教材研究所歷史課程教材研究開發中心編『義務教育課程標準實驗教科書 中国歴史』7年級・下冊（人民教育出版社、2007年1月第3版）の第2単元「經濟の重心の南方移動と民族關係の發展」第12課「モンゴルの興起と元朝の建立」

そして南宋などに戦争をしかけたほか、さらにはヨーロッパのドナウ河流域にまで進攻したのである。

「クビライの元朝建設」 チンギス・カーンが死去したのち、モンゴル軍は西夏と金を相次いで滅ぼし、南宋に対して包囲の形勢を構築した。その後にクビライはハーンに即位し、1271年に国号定めて元とし、翌年に都を大都に定めたのである。クビライこそが元の世祖である。1276年、元軍は臨安を占領し、南宋の皇帝を捕虜とし、南宋は滅亡した。抗战派の大臣であった文天祥はなお元朝への抵抗を続けたものの、ほどなく広東省の沿海で敗北して捕虜となり、大都に収監された。彼は堅く節を曲げず、崇高なる気概をあらわしたのち、最後には殺害された。

勝利したタタール部の宴会に参加したところ毒を盛られ逝去したという。これより、彼は厳しい生活のなかで、あらゆる苦難を受けることになる。たとえば彼はかつて別の一つの部族の人間に捕らえられ、重い木枷をかけてさらされた。ある日、この部族が宴会を行ったとき、若い看守だけを留めて彼を監視させたのだが、彼は機に乗じて木枷により看守を倒し、逃げ出したのである。こうした幾多の苦境がテムジン意思を鍛錬したため、彼は強くそして機敏に変わっていった。そしてモンゴル草原の統一を決心したのである。

モンゴルの統一ののち、チンギス・カーンは大規模な拡張戦争を発動した。彼と彼の子孫は金・西夏

文天祥が捕虜となったのち、元の将軍〔金の将軍であった汝南王張柔の子の張弘範〕は彼に降伏を勧めたものの、彼は断った。そして広大な大海原を目にして、彼は悲しみのなか長く歌い継がれる「過零丁洋」（零丁洋をよぎる）詩を書き、彼の死してなお屈しない決心を表現したのである。文天祥が大都に囚われると、クビライは彼の才能を高く評価し、みずから降伏を勧め、高官として待遇することを約束した。しかし文天祥はなお動揺せず、また浩然の気が長く現代に残る「正気の歌」を書いたのである。



文天祥

“人生自古谁无死，留取丹心照汗青。”这是谁的诗？你能解释它的意思吗？

元世祖重视发展农业，多次下令禁止蒙古贵族圈占农田做牧场，还治理黄河，推广棉花的种植。北方农业得到恢复和发展。为便利南粮北运，他令人开凿两段新运河^①，与原有运河连通，使粮船可以从杭州直通大都；还开辟了规模空前的海运^②。粮食运输逐步以海运为主。那时候，元朝商业繁荣。大都既是政治中心，又是闻名世界的商业大都市。中外交往也很频繁，意大利旅行家马可·波罗，在元世祖时来华，居住了十几年。他的《马可·波罗行纪》，描述了大都的繁荣景象。

4. 行省制度的创立

3. 元朝疆域空前辽阔。为对全国实行有效的统治，元世祖在中央设中书省，地方设行中书省，简称“行省”。我国省级行政区的设置，始于元。

5. 元政府加强对西藏的管辖^③，西藏成为元朝正式的行政区；6. 还加强对琉球管辖。



元朝的运河和海运航线

直沽 在今天津 刘家港 在今江苏太仓

出典：人民教育出版社課程教材研究所歷史課程教材研究開發中心編『義務教育課程標準實驗教科書 中国歴史』7年級・下冊（人民教育出版社、2007年1月第3版）の第2單元「經濟の重心の南方移動と民族關係の發展」第12課「モンゴルの興起と元朝の建立」

元朝の領土は空前の広さであった。全国に有効な統治を行うため、元の世祖は中央にあつ

元世祖は農業の發展を重視し、モンゴル貴族が農地を囲い込み牧場にしてしまうことに何度も禁令を出した。また黄河を治水し、綿花栽培を推進したのである。こうして北方の農業は回復し發展していったのである。また南の食糧を北に運搬することを容易にするため、彼は命令を下して二本の新たな運河〔クビライは濟州河・会通河・壩河・通惠河の各運河を開鑿している〕を開鑿し、もとの運河と連結して、食糧運搬の船舶を杭州から大都まで直通できるようにした。しかもまた空前の規模の海運を開始したため、食糧の運送は徐々に海運が主となった。この時期、元朝の商業は繁栄したのである。大都はまだ政治の中心であり、そして世界に聞こえる大きな商業都市となっていた。中国と外国との交流もとても頻繁になり、イタリアの旅行家マルコ・ポーロも元の世祖の時に中国に来て十数年のあいだ居住したのである。彼の『マルコ・ポーロ行紀』〔日本でいう『東方見聞録』〕は、大都の繁華な光景を描いている。

て「中書省」を設立し、地方では「行中書省」略称で「行省」を設立したのである。我が国の「省」レベル行政区の設立は、この元朝に始まったのである。元朝政府はまたチベットの管理を強化し、チベットは元朝の正式な行政区になった。また琉球〔この琉球については本稿第2節を参照のこと。〕の管理も強化したのである。

「民族融合の発展」 元朝の時代、多くの漢民族が辺境に到来し、その地の開発のために貢献したのである。辺境の各民族はモンゴル族を含む多くが中原や江南に入り、漢民族などと雑居した。もともと黄河流域に先に到来していた契丹族や女真族といった民族も、長期の共同生活を経て、すでに漢民族との差異はみられなくなっていた。唐朝からこのかた、中国に定住する多くのペルシア人やアラブ人はイスラム教を信仰していた。彼らもまた漢族・モン

ゴル族・ウイグル族などと長期に雑居して互いに結婚し、次第に融合し、新しい民族「回族」を形成し始めた。元朝の領域下での大規模な人口流動は、各民族の経済や文化の発展と融合を促進したのである。

元代の嶺北地区〔カラコルムを中心とする地方行政区分〕には、大量の漢族と西域の職人が移住し、手工業が発展した。フランスの一人の宣教師〔ルブルック Guillaume de Rubrouck を指すか〕がカラコルムを訪問したとき、カラコルム城内の漢人居民はほとんど全てが職人であつたという。彼らは現地で家屋を建て、絹織物を織り、金器・銀器・玉器を製造していた。また多くの回族商人はそこ



出典：人民教育出版社課程教材研究所歴史課程教材研究開発中心編『義務教育課程標準実験教科書 中国歴史』7 年級・下冊（人民教育出版社、2007 年 1 月第 3 版）の第 2 単元「経済の重心の南方移動と民族関係の発展」第 12 課「モンゴルの興起と元朝の建立」

で商売をしていた。彼らは西城や漠北と中原地区を往来し、食糧や絹織物を遊牧民の家畜や毛皮と交換していた。また雲南地域には元朝の時代にモンゴル族や回族が移住した。元朝の政府が最初に派遣した地方官は回族であった〔至元 11 年（1274 年）に雲南行省平章事となった賽典赤瞻思丁か〕。彼は内地の先進的な耕作方法と生産器具を導入し、水稻栽培を拡大し、人々に養蚕技術を教えたのである。

第 2 節 中国の歴史書にみる琉球

現在の沖縄県および台湾は中国では琉球などと呼ばれてきた。その表記には「流虬」「流求」「瑠求」「琉球」などが存在する。1650 年に琉球王国で編纂された『中山世鑑』の巻首「琉球国中山王世継総論」には、隋の煬帝（在位 604 年～618 年）が朱寛という使者を沖縄本島へ派遣し、その際に本島の形状が海上に漂う虬（みずち、龍の一種）のようであるから流虬と名付けたという伝説を紹介している。なお「流虬」命名説話は他に明朝の陳仁錫（1581～1636）による『皇明世法録』巻八十「琉球」十二葉裏（『四庫禁毀書叢刊』史部第 16 冊）にも表れる。「流虬」の言葉だけ見れば唐・劉恂『嶺表録異』（北宋・李昉ら『太平広記』巻 483「蛮夷四」「徇国」条に引く）にも登場する。ただし新井白石は『南島志』総序で『皇明世法録』の説を否定している。

中国の歴史書にあらわれる最も古い表記は「流求」である。『隋書』（636 年成立）巻 81・列伝第 46「東夷」には流求国伝がある。『隋書』によれば、「流求」は「建安郡」（すなわち現在の福建省）の東方、船で五日の位置にある陸地である。ほか『隋書』巻 6・煬帝紀上には大業 6 年（610 年）2 月にこの流求国へ侵攻したという記事がある。ただし、この「流求」がそのまま後の沖縄本島の琉球王国を指すかどうかは定かではなく、あくまで福建省の東方の島であることしか分らない。

『隋書』に続く『北史』（北魏・東魏・西魏・北齊・北周・隋をまとめる、659 年成立。巻 94・列伝第 82「流求伝」）、『通典』（分野別に歴史を紹介した書籍、801 年成立。巻 186「辺防二」「東夷下」の流求条）、『諸蕃志』（1225 年ごろに成立した外国案内書。巻上「流求国」）においては『隋書』の記述をおよそ踏襲している。また北宋の大部の地理書『太平寰宇記』（1000 年ごろに成立。巻 175「四夷四」「東夷四」の「流求国伝」）においても内容に大差は無い。表記は基本的に「流求」であるが、時には異なる表記もあらわれる。北宋の蔡襄『莆陽居士蔡公文集』巻 25「雜著」「荔枝譜第三」や、同じく北宋の徐兢『宣和奉使高麗図経』巻 3「封境」（『知不足齋叢書』第 16 集）、そして南宋の楼鑰『攻媿集』巻三「古体詩」「送万耕道帥瓊管」には、日本や大食（西アジア）と並んで「琉球」という文字があらわれている。なお、南宋の官僚で詩人として著名な陸游（1125 年～1210 年）には「感昔五首」という七言詩がある（『陸放翁全集』「劍南詩稿」巻 59）。その詩は「行年三十憶南遊、穩駕滄溟萬斛舟。常記早秋雷雨霽、柁師指點說流求」（三十のころには南方を旅したなあ。青い海原に一万石級（600 トン）の船が静かに浮かんた。いつも忘れられない雷雨が晴れたあの初秋の日、船頭が指を指してあれが流求だと言ったこと）というものである。

元代に完成した馬端臨の『文献通考』(1307年に成立、巻327「四裔考四」「琉球国」)においては、「琉球」は台湾と沖縄を指すような記述となっている。元朝では「琉球」征伐の動議が出たほか(蘇天爵『元朝名臣事略』巻4「平章魯国文貞公(不忽木)」引「神道碑」、至元28年(1291年)に楊祥と呉志斗を「瑠求」へと派遣したという。この呉志斗を「琉球」へ送るに際し、張之翰が送別の詩を詠んでいる(『西巖集』巻3「七言古」「送吳泉陽使琉球」)。

元朝から情報が引き継がれていたものか、明朝初代皇帝である太祖・洪武帝・朱元璋は、新たな聖天子の即位を伝えるため、洪武5年(1372年)に「琉球」へ朝貢を促す使者を送った(『明太祖実録』巻71・洪武5年正月甲子条)。その招致にこたえて沖縄本島の中山王であった察度が明朝へ遣使している(『明太祖実録』巻78・洪武6年正月戊申条)。なお当時の沖縄本島は統一されておらず、この中山王のほかには南山王や北山王も遣使している(『明太祖実録』巻134・洪武13年10月丁丑条に琉球国山南王承察、巻158・洪武16年12月甲申条に琉球国山北王帕尼芝)。その後、明朝へ朝貢した沖縄地方を「大琉球」、朝貢しない台湾を「小琉球」とする区分が生まれていく(たとえば1620年成立の国撰『礼部志稿』巻35「主客司職掌」「琉球国」)。その後、「琉球」は沖縄本島の琉球王国の勢力圏を指す地域名称として定着していく。

一方「おきなわ」は『唐大和上東征伝』(779年に成立、日本で淡海三船が執筆した鑑真の伝記。天宝12載(753年)11月16日条)に「阿児奈波島」と表記されたものが初出となるが、現在の沖縄本島を指すかどうかは不明である。琉球王国による欽定歌謡集『おもろさうし』には「おきなわ」が登場するほか(たとえば巻8・第428首には(原文は平仮名)「おもろ音揚(ねあがり)は造(つく)り、祝詞(せるむ)音揚(ねあがり)を成(な)して沖縄(おきなわ)鳴響(とよ)む」、琉球を検地して石高を明記した薩摩藩による琉球検地帖『一紙目録』(1611年成立)には「おきなわ」「悪鬼納島」が出現、陳侃『使琉球録』「夷語(附)」(1534年に成立)には「倭急拿」があらわれる。なお、「沖縄」の漢字は新井白石『南嶋志』(1719年に成立)巻一「地里第一」の「沖縄嶋(オキナハシマ)」が初出となる。

なお、近代に入ると、「琉球」が指す領域の学術的考察が進む。サンドニは先に紹介した馬端臨の『文献通考』の外国紹介部分を翻訳し考察を加えた。Marquis d'Hervey de Saint-Denys. *Ethnographie des peuples étrangers à la Chine ouvrage composé au XIII^e siècle de notre ère; par Ma-touan-lin. (Oeuvres de Ma-Touan-Lin Ethnographie des peuples étrangers) Première partie: Pays situés à l'orient de l'empire chinois. (Orientaux) Genève, H. George, Libraire-editeur. 1876. pp. 414-416.* (デルヴェ・ド・サンドニ『馬端臨による西暦十三世紀の異邦人に関する中国民族誌』第一部「中華帝国の東に位置する国」)である。また1895年にはグスタフ・シュレーゲルが元以前の「琉球」は台湾、明以降は沖縄を指すと考えた。Gustaaf Schlegel. "Lieou-Kieou-Kouo 琉球国", *Problèmes géographiques: Les peuples étrangers chez les historiens chinois. (In T'oung Pao, Vol. VI, pp. 165-215.) Leide, E. J. Brill, 1895.* (グスタフ・シュレーゲル『地理問題——中国史のなかの異邦人』第19章「琉球国」, もとライデン・ブリル社『通報』第6号, 1895年に掲載)である。また、

といえる。なお靈柩はもともと内モンゴル自治区オルドス市エジンホロ旗の八白室に安置されていたが、徳王デムチュクドンロブによる蒙疆聯合委員会（日本の傀儡政権であった）の勢力が迫り、中華民国国民政府が当地のモンゴル貴族の反対を押し切って内地へと移送したものである。

ここで注意すべきは、一つの巧妙な転換が行われたことである。邢莉「成吉思汗祭祀儀式的変遷」（『民族研究』2008年第6期）は言う。チンギス・カーンは（オルドスでまつられる）「モンゴル族の神」「モンゴル族の祖先」から（中国内地でまつられる）「中華民族の英雄」となった。チンギス・カーンを尊崇して形成された祭祀は、ただ彼の誕生したそのモンゴル民族だけではなく、“他者”（他民族）が承認するなかで一種の文化的記号となり、中華各民族全体を代表するものとなったのである。この祭祀は、一方面では民族国家がチンギス・カーンの祭祀の社会的効果を認識し再評価を与えたものである。そして別の一方面では、モンゴル民族が800年にわたって祭祀の伝統を続けるなかで、祭祀空間や祭祀儀式に必然的に変化が発生し、その中でもなお自己の民族の英雄という認識を伝承してきたことである。チンギス・カーンは後世の人々のため利用可能な多くの政治的遺産そして文化的遺産を残したのであった。

チンギス・カーンがモンゴル人の心に占める地位は、毛沢東をはじめとする現在の大多数の中国の漢族の心に占める地位とほぼ同様であり、孔子のような役割と言えるだろうか。実際、元朝の時代に成長した洪武帝・朱元璋もまたチンギス・カーンを中華の正統の帝王と見なしている。洪武帝は1367年（呉元年、元の至正27年）9月に元朝の順帝へ使者を遣わしたが、その信書には「さきに天は金朝・宋朝を見捨て、天命を殿下のご祖先へと降された。それだからこそタタールの部族は砂漠から決起して中国に入り主君となったのです。そして天命が受け継がれること百年、殿下に伝わったのでした。……いにしえは帝王が天下を統一したといっても、ただ中原（中国内地）に止まるもので、周囲の異民族には及びませんでした。ただ殿下のご祖先は世界の内外、遠方の他民族をみなことごとく領土となさいました。これは古来ないことです。」（『明太祖実録』巻25・呉元年9月戊戌条）と述べる。また同年12月および翌年正月に天へ即位を報告する際、「おもうに我が中国の人々のあるじとは、宋の天命が途絶えたのち、天帝が真人へ砂漠より中国に入り天下の君主となることを命じられたものである。そしてその君主は父より子孫にいたる百年あまり続いたのである」（『明太祖実録』巻28下・呉元年12月甲子条、巻29・洪武元年正月乙亥条）と述べる。その心のなかには、自身はただ漢族の皇帝であるだけではなく、異民族の皇帝でもあるということがあったろう。そして彼とその後継者は何度も北伐を行い、中国の統一を強く求めたのであった。とはいえ後世においてチンギス・カーンの評価は毀誉褒貶があり一定しない。孫文は「中国は幾千年もの歴史で政治的圧迫を受け完全なる亡国に陥ったことが2度存在する。一つは元朝、そしてもう一つは清朝である」（1924年2月3日付『三民主義』「民族主義第二講」）と評価したことがあった。また魯迅は「聞くところによれば、我々のチンギス・カーンはヨーロッパを征服したという。これは我々が最も豪勢であった時代である。25歳になってやっと

知り得た、いわゆる我々の最も豪勢な時代であったが、その実はモンゴル人が中国も制服しており、我々は（異民族の皇帝の家奴である）「奴才」となっていたわけである。そして今年の8月になり、一件の故事を調べなければならず、3冊のモンゴル史の書籍をめくったのだが、ここでモンゴル人がロシアを征服し、オーストリア＝ハンガリー帝国の領域まで侵入したこと、それが全中国の征服の前であり、その時のチンギス・カーンはまだ我々のカーンではなく、ロシア人が我々より先に「奴才」となっていたわけだから、ロシア人が『我々のチンギス・カーンが中国を征服し、我々が最も豪勢であった時代である』とも言えるだろうことをやっと了解したのであった」（もとは上海『読書生活』第1巻第2期、1934年11月に「隨便翻翻」として掲載。のち『且介亭雜文』上海三閑書屋、1937年7月に収録）と述べている。なお、現代の作家柏楊（出生名は郭定生、1920年～2008年）は『中国人史綱』（1977年8月序）の第26章「第十三世紀」の第3節「遼・ホラズム・西夏の相次ぐ滅亡」でチンギス・カーンを「テムジン」は歴史上で最も偉大な組織家・軍事家の一人である。彼は政治上そして戦場で輝くばかりの成果をあげ、20世紀にいたるまで比肩する者は稀であった。テムジンは胸襟が広く度量が大きかった。彼は深く人心を得る公平な態度で毎日のように膨張する彼の帝国を統御し、高度な智慧をもって優れた才能をうまく発揮させていたのである」と激賞している。

さて、亦鄰真は「成吉思汗与蒙古民族共同体的形成」（『内蒙古大学学报（哲学社会科学版）』1962年第1期）で言う。チンギス・カーンは残忍な一面もあり、個人的な野望と抱負を実現するにあたって多くの人々を殺戮した。殺戮は多分に伝説的なものであり、「恐怖の宣伝」による民心の安定を目指したものであったとしても、記録上では1億人を超える人々がチンギス・カーンおよびその子孫の征服の家庭で死に追いやられたのである。そしてどのような事があったとしても不変なこととして、チンギス・カーンが東西交流の促進に大きく貢献したことを忘れてはならない。もちろん殺戮された人々が“代価”となったとは決して言えない。とはいえ彼らの生命が失われたことにより、一人の英雄の古今に燦然と輝く歴史的功績を否定し去ることもできない。そして注意すべきなのは、チンギス・カーンのモンゴル帝国建設以前にはなおモンゴルにこのような共同の言語・共同の地域・共同の文化を有する民族共同体が存在しなかったことである。そして彼によれば、モンゴルとは前資本主義民族であった。モンゴルのような遊牧の民族と狩猟採集の民族とは草原や山林に散住しており、それぞれの間で発展段階に極度の格差が存在していた。さらには異なる経済文化類型の異なる語族に属していることもあった。チンギス・カーンがその彼らをまとめ上げたのである。しかもただ二世代だけで既知世界の75%を統治するまでに至った。古今東西の偉大な人物で、善悪の評価が半ばしないものがあるのか。歴史へのまなざしとは、歴史から偏見や苦痛を発見するものではなく、歴史人物の決定を自分自身が受けたのと同じように感じることはないか。毎日歴史は作られていく。歴史は我々にどのような啓示を行うのであろうか。それが最も重要であろう。

第5章 中華統治の正統性と共通善～漢民族ではなく中華民族であることの意味と意義～

第1節「西洋」に比した「東洋」の行動様式に関する問題意識

現代社会は、グローバリズムと宗教・民族・国家の意思が複雑に交錯する時代といわれる。その一方で、米国中心に世界が一元化されたグローバル資本主義の時代ともいわれる。

有史時代以降、近代史以前の時代においては、複数の世界が並存していた。世界一元化の「近現代」と複数世界並存の「近代史以前」との時代構造においては、歴史に対する、ものの捉え方、歴史認識、編集方法が異なったものでなければならない。

「歴史とは何か」について、歴史学者の西嶋定生氏は、「歴史研究は未来を志向する現在と過去との対話であり、歴史を学ぶということは、未来を志向する我々がそのこと故に過去に眼を向ける実践的行為」と述べている。歴史とは、古書記録の堆積物ではない。現在の目線で、過去の複数の異なる地域の実情や歴史観を見つめ直した上で、未来の事象・営為に投影させ、時代の変容を読み解く重要素材であることを認識できて初めて、歴史を学ぶことの意味や意義を理解することができると思われる。

世界システムの史的構図を考えるに際し、近現代に覇権を築いてきた欧米世界と、近現代以前にアジア・ユーラシア地域の覇権を構築していた東アジア世界との間において、双方の歴史を踏まえた行動様式の比較分析は、現在及び未来を考える実践的行為に繋がるとともに、未来の事象・営みを投影させて考える重要な素材提供になるものと思われる。

僅か150年（19世紀後半から現在迄の近現代）という欧米中心の世界史視座だけでは、地球規模又は東アジア世界の本質的問題の所在や課題発見・解決に導く手掛かりとしては十分とはいえない。そこには、東アジア世界の伝統的思想を踏まえた時代認識（いわゆる世界観と歴史観）が求められる。

域内の文化圏と政治圏に関する生成要因や発展要因（漢民族以外の部族が政権獲得に必要な正統性の因子など）を考察対象に時代認識を深掘りするプロセスの中で、現在社会の諸問題とどのような連関があるのか、或いは本質的課題はどのようなことかを考えることにある。

そのためには、我々の手元にある世界史テキストの図録年表において、「縦」（歴史観/時間認識）と「横」（地政学的視点/空間認識）の関係性は、これまで誰の眼を通して作意されてきたかを意識しなければならない。例えば、大航海時代、植民地時代、帝国主義時代などの世界の歴史は、西洋発の一面的な世界史観であって、必ずしも各地域住人の眼を通して作られたものではないのではないのか。固定観念に陥っている現実を認識しなければならない。

「中国4000年」といわれる東アジアの歴史においては、中核としての漢民族と周縁としての非漢民族（モンゴル族など）といった相関図式が存在していた。

寺島実郎『大中華圏』は、多民族国家を束ねる力学について、「漢民族ではなく中華民族であることの意味」を言及している。中国を支配した「モンゴル族ではなく中華民族であることの意味」という文脈でもある。

現代中国は、多民族の融合・変容の歴史の中で、民族を束ねる統合理念に苦心しながら国家を形成してきた歴史を有している。

世界史テキストの図録年表に加え、地球儀上の平面の定点(「西洋」、「中華」、「中華の周辺」)を線で繋ぎ、図形観測から世界を読み解く視座も欠かせない。

歴史という「面」と空間という「線」を、同時に前後・左右・斜めの方面から鳥瞰視することで、現代の複雑かつ重層的な世界構図の断片を読み解くことが可能になる。こうした作業の積み重ねが、西嶋定生氏のいう「未来を志向する現在と過去の対話」に繋がっていると思われる。

第2節 東西世界の論理・価値観とグローバル課題

西嶋定生・李成市『古代東アジア世界と日本』によると、西洋世界が世界を包摂するのが16世紀以降であり、地球上に並存していた複数世界が単一世界になるのは19世紀以降であると述べている。

こうした歴史認識を前提に、羽田正『新しい世界史へ——地球市民のための構想』は、世界全体のデザインの基本は、「中心」としての西洋と「周辺」としての非西洋という世界観にあると述べている。西洋は、世界を「自」と「他」に分け、西洋は他とは違う世界であると捉える、非対称で二項対立的な世界認識である。唯一歴史を作り動かすことのできる特別な主体が西洋人であった。

同様な文脈で論じる「世界システム論」の議論においても、「中核」と「周縁」という捉え方で、世界は、各地域をシステム全体の商品生産分業体制という経済構造と位置づける。17世紀においてはオランダ、18・19世紀においては英国、そして20世紀においては米国といった中核国家が、他の地域を経済的に覇権行使してきた。

羽田正氏は、こうした意識が、ナショナリズムを高揚させ、受け入れた人間集団に求心力の威力を発揮させる一方で、「自」と「他」を区別する欧州の世界観は、互いの違いを強調し、紛争の種を生み出す要因や結果に繋がっていることを指摘する。

こうした西洋の勝者の論理・価値観は、現代社会のグローバル・スタンダードとして、世界を席卷しているように見える。しかし、その一方で、勝ち負けで区別された過度の勝者中心の社会は、世界の連帯意識を脆弱にし、貧困者や少数民族などの弱者切り捨ての思考・行動を顕在化・加速させている一面も見られる。結果として、西洋の論理では発見困難で、解決困難な問題を抱えている実情を呈している。

続いて、東アジア世界の思想・価値観とグローバル社会の課題対応について考えてみたい。李成市「東アジア世界論と日本史」『岩波講座 日本の歴史第22巻』(岩波書店、2016年)によると、東アジア世界の理論的体系化を試みた3人は、以下のように東アジア世界を論じている。

上原専祿『日本国民の世界史』(1960年)によれば、世界史像の基軸として、地球上の諸世界が単一世界になるのは、大航海時代と19世紀以降の時代と述べた上で、近代化以前の世界は、ヨーロッパ文明圏と3つの東洋文明圏(東アジア、インド、西アジア)の複数の世界が併存していて、独自の歴史が並行的に展開されていた。日本の歴史は、中国を中心とした

東アジア世界の歴史のなかで形成されてきたと説明している。

また、上原氏は、戦後の日本において、世界史像の自主的な形成を国民的課題に掲げている。これまでの世界史というものは、ヨーロッパ人の構想した世界史であって、日本の世界史教科書は、基本的にヨーロッパ人の思い描く世界史であったと指摘する。そして、このアジアに生きる日本人のための世界史が追求されなければならないと強調している。

現在のヨーロッパを中心とする世界史は、16世紀以降のヨーロッパ人の世界拡大に伴うヨーロッパ固有の歴史的課題に応えるため、ヨーロッパ人の問題解決のために構想された歴史であったのではないかと述べている。日本人はここから何を学べるのか。主体的な問題解決の手立てにならないのではないかと述べている。西洋中心ではない世界史観（グローバル・ヒストリー）に基づいた歴史認識の必要性が強く求められる。

西嶋定生「東アジア世界論」の理論は、1970年代に提唱された歴史理論であり、前述の上原の世界史観を踏まえて形成されていることを理解することができる。西嶋氏は、現在の中国、台湾、韓国、北朝鮮、日本、ベトナムなどにおいて、東アジア世界の共通指標となる文化的要素が、中国王朝の政治権力・権威を媒介して文化的現象を拡張しているとし、文化圏と政治圏の異なる原理一体となった自己完結的な世界を「東アジア世界」（東アジア冊封体制）と呼んでいる。そして、東アジア世界における「文化圏」とは、文化を伝播させた政治的な構造があって初めて文化圏が形成されたと見るところに特徴があると述べている。

壇上寛『天下と天朝の歴史』（岩波新書、2016年）によれば、前述の西嶋氏の冊封論を含む多重の「華夷秩序」を包含した天下統治の根拠として「天朝体制」（天命を受けて天下統治する天子朝廷の体制）理論を展開する。ここで広義の華夷秩序とは、君臣関係の朝貢（冊封）、盟約（宗法秩序：父子・兄弟等の擬制的家族関係）、互市（国際交易）の三種類の関係として存在する。この天朝体制は、中国国内では絶対権力者たる皇帝、周辺諸国との間では有徳者たる天子として天下を正当化してきた。

こうした体制下での儒学の論理は、「家族愛」を順次拡大し、天下が一つの家族になると争いが無くなり、天下は安定するという「家族秩序」が天下秩序に拡大する家族国家を描いている。大天下と小天下による天下概念を媒介に、有機的にゆるやか（ファジー）に連結した天下システムが、東アジアの国際政治システムの特徴であるとする指摘は示唆的である。

さらに、岡本隆司『中国の論理』によれば、20世紀の中国のイデオロギー体制における思考・論理・行動は、転変の繰り返しであったものの、中国の言動や根底で生き続ける社会構造の本質は変わっていないことを指摘している。

中国の論理を辿るためには、知の源泉である儒教的なものの考え方や体系を把握することが必要になるとし、神と悪魔の二元論を説くキリスト教とは対極に、儒教は極端に走らない「中庸」を最大の徳目としている。

現在の東アジア世界における日中・日韓の相互不信の国家意識・国民感情の問題については、これまで述べてきたように、近代以降の欧米中心の世界史・歴史観、価値観等だけでは解決が困難な要因を多く含んでいるように思われる。東アジア世界に起因する諸問題の問題

解決策には、近代以前の東アジア世界の価値観・行動様式の重層的視界、特に東アジア世界の文化圏と政治圏との一体性を踏まえた行動原理の分析が必要であると思われる。

表 1：東西世界の基本的性格

	西洋	東アジア
文明観	「中心」と「未開」	「中華」と「夷狄」 （「礼」の違いで判断）
世界観	非対称で二項対立 （中心は西洋、周辺は非西洋）	漢字文化圏と政治圏（冊封体制）の異なる原理の一体化
性格	自と他との区分（違いを強調） 勝ち負けで区別	有機的にゆるやか（ファジー）に連結
宗教・規範	神と悪魔の二元論（キリスト教）	極端に走らない中庸を最大徳目（儒教）
問題解決	論理とパワー	儒教論理の家族秩序

出典：著者作成

第 3 節 歴代中国王朝の正統性要件の意味と東アジア世界構成員の処し方

東アジアの地域概念において、日本の歴史学界では、上述のとおり、「漢字文化圏」とそれを形成させた中国皇帝を中心とする「政治圏」とが一体となった自己完結的な世界として広く共有されている。

漢字文化圏とは、漢字を媒介にして儒教（儒教国教化は漢代以降）、漢訳仏教、律令といった中国に起源する文化を受容した地域に該当する。その基本型は、隋・唐よりも前の漢の時代に揃っていたといわれる。

政治圏とは、中国皇帝を中心として形成された国際秩序が及んだ地域である。漢代以降、周辺諸国や民族の首長に、中国の爵位や官職を与えて形成された秩序構造を「冊封体制」と呼んでいる。中国皇帝と周辺国首長との君臣関係・政治構造という政治秩序（冊封体制）が、文化圏形成の原動力となり、1911 年辛亥革命で中国の皇帝制度が喪失されるまで維持されていた。

古代の朝鮮と日本においては、東アジア世界の中でも、他の地域に比べて中国文明の積極的な受容が見られ、地域世界として域内の有機的な関係が見い出される。

李成市『なぜ今「東アジア史」なのか、いまアジアをどう語るか』（弦書房、2011 年）によると、辛亥革命によって二千年来の皇帝制度が消滅したものの、その皇帝制度の起源と構造が持つ意味合いの中に、日本の天皇制を見ることができると指摘している。日本の天皇制と中国の皇帝制度は、差異よりも共通のところを探すと、皇帝制度を下敷きにして天皇制が成立している。朕、元号、権力などの用語は、皇帝制度から出ている。

壇上寛『天下と天朝の中国史』（岩波新書、2016 年）においても、現代中国を理解するた

めには、伝統的な中華帝国の行動原理を追求し、明らかにすることが必要であると述べている。

表 2：中華帝国の政権正統性：漢民族と少数民族

農業地帯		遊牧地帯	島嶼
漢族政権	少数民族政権	草原	日本
漢 BC202-AD220 三国時代 184-280 西晋 265-316		匈奴 BC3C-AD2C	卑弥呼
東晋 317-420 南朝(宋、南齊、梁、陳)	五胡十六国 304-439 北朝(魏、北齊、周) 439-589	柔然 402-555	倭の五王
隋 581-618		突蕨 552-745	聖徳太子
唐 618-907		回鶻 744-840	
宋 960-1279	遼(契丹) 916-1125	金 1115-1234	平安、鎌倉、 室町
モンゴル帝国(元) 1206-1368			
明 1368-1644		北元 1368-1634	室町、江戸、 明治
清 1616-1912			
中華民国 1912- /台湾 1949-		(モンゴル)	大正、昭和、 平成
中華人民共和国 1949-			

出典：多摩大学准教授 水盛涼一氏の資料を一部編集

ここで用いる「天朝」とは、天命を受けて天下統治する天子の朝廷のことである。中華帝国は、儒教が国教化された漢代以降に、全時代を通じて自他ともに現王朝のことを「天朝」と呼んでいる。儒家思想の有徳の天子に朝廷を演じることで、中華帝国は、天下統治の根拠を獲得してきた。中華帝国存続の価値観と行動は、統一と分裂を多々繰り返す中において、天朝論理を正統化するために論理操作されてきた政治歴史であるともいえる。

皇帝とは、法の統治だけで民衆を統治したのではなく、天命を受けた有徳の天子であればこそ、人々の支持を獲得し、徳治と礼治を掲げることでその身分を保障したと述べている。このように、漢民族以外の民族が、政権を獲得するためには、有徳の天子を持つ者として、その正統性を常に世に示す必要があった。

「狭義の天下」＝「華」（中国国内）においては、絶対権力者の「皇帝」として、「広義の天下」での「夷」（い）外縁地域に対しては、有徳者たる「天子」として統治を行っていた。

古代中国に生まれた「中華」という観念は、「夷狄」（いてき）（夷）と対比されることで発展してきたといわれる。「華」と「夷」の区別（儒家の言に従い「華夷の別」）は、このように中華王朝の対外政策の一貫した枠組みとして知られている。

華夷の違いは、①民族の違い（漢族か否か）、②地域の違い（中心か外縁か）、③文化の違い

い（礼・義の有無）といわれ、この3つの観点が中華統治に際して、時代と状況に応じて使い分けられてきた。

上記①民族の違いと②地域の違いについては、民族・地域などの実体に即して形成された実体概念である。上記③文化の違いについては、礼・義の有無で華夷が定まる機能概念と位置づけられる。易姓革命とは、天子が徳を失って天命が革まり、他姓の有徳者が天子になることである。漢民族以外の民族による政権奪取は、夷から華への王朝交代となる。モンゴル帝国は、中国支配に当り、上記②地域の違いと③文化の違いを、巧みに論理操作することによって、夷（外縁地域）による中国支配の正統化を企図してきた。

華（中国国内）の漢民族が、中華統治するときは3つの基準の齟齬が起こらない。しかし、モンゴル民族など周縁の民族が、中華統治する場合は、これらの基準どおりにいかない。上記③文化の違いを強調して中国支配を正統化する他に方法がなかった。

多民族複合国家の宿命とは、束ねる中心理念に苦しみながら、新たな統合理念を構築することにある。多民族国家を束ねる新たな力学をまとめていくためには、民族や地域を超えた普遍的な価値観、徳治主義と礼治主義の方針を前面に打ち出すことしかなかった。中華帝国の行動原理とは、有徳で礼儀を知る人物であれば、民族的には漢でなくても華になれる。天子として中華王朝として君臨する「天朝論理」の正当化にあったと。これが、寺島実郎氏の「漢民族ではなく中華民族であることの意味」であると思われる。

東アジアの外交の場においては、天下と天下が凌ぎを削る一方で、成立した国際秩序においては、極めてフエジーな部分が残されていたといわれる。こうした様相が、東アジア世界の特徴であり、天下と天下の対立が、程度良く調整されていた関係であったと思われる。こうしたことから、東アジアの国際政治システムは、一極・一元的な冊封体制でとらえるには無理がある。冊封（朝貢）関係を包含する「大天下」の世界観と、中国の周縁にある複数の「小天下」世界観とが、天下概念を媒介に、有機的にゆるやかに連結した政治システム（「天下システム」）であったと考えることができると思われる。

壇上寛氏によると、現代の「中華民族の大家庭」とは、清代の「中外一家」の焼き直しであるといわれる。中国本土（中）と満州・藩部（外）を一家とするのが中外一家である。中国本土（中）の漢族と周縁（外）の満・蒙・回・蔵を合わせた五族が家族のように繋がりを持つ関係になることが、「中華民族の大家庭」であるといわれる。

表 3：天朝論理＝天下統治システム

	中国国内（華）＝狭義の天下	周辺（夷）＝広義の天下
統治者	絶対権力者としての「皇帝」	有徳者たる「天子」
民族性	漢民族	漢民族以外
地域性	中心	外縁
文化性	礼・義の有無 有徳で礼儀を知る人物であれば漢民族でなくても天子となれる＝天朝論理	

出典：著者作成

文化的にも宗教的にも言語的にも異なる諸民族を「中華民族」として大家族の中に収めるためには、中華民族の実体を証明し得る理論的根拠が必要となる。こうした背景の中で、1988年、費孝通(ヒ・コウツウ)氏による「中華民族多元一体構造」という論考が登場した。

この論考では、中華民族は、その概念が提示される 20 世紀初頭よりも古い時代に起源を持つとされる。中華民族は、近代国家形成時に意図的に作りだされた虚構ではなく、中国の歴史の中で民族が接触・融合して、自然発生的に形成された民族実体であると主張している。

こうした論理を拡大解釈すると、朝鮮半島と外モンゴルの人々は、中華民族の一部という理屈・論理へと続いていくことになる。費孝通氏の理論に基づき、現在の中国政府は、こうした多民族国家中国の正統化を図っていると解釈する見方もある。

中華民族とは、清代の中国本土と満州・藩部の民を含む総称といわれる。両者を合わせた中外一家が、今日の中華民族の大家庭（狭義の天下）を意味している。近年、中国政府が「中華」を強調している背景には、こうした天下構想と無縁ではないと思われる。ここでも、「漢民族ではなく、モンゴル民族ではなく、中華民族である」ことの意味がある。

中華民族の大家庭は、国内向けの民族融和とスローガンである。これと並んで、1997 年以来、「中華民族の偉大な復興」「中国の夢」という言葉が用いられるようになった。中華帝国の復興である。中国の行動原理については、中国の伝統的な行動原理を理解・認識しながら、政治的利用されてきた中国の歴史と対峙することの必要性を感じる。

近代時代以前の東アジア世界において機能してきた中華民族の「天下システム」は、現在存在していない。しかし、完全に東アジア諸国から天下概念が消滅したとはいえない。趙汀陽『天下体系——世界制度哲学導論』（江蘇教育出版社、2005 年）によると、「近代を特徴づける主権国家システムでは、戦争と紛争とを解決することができない。これを克服するためには、国家の上位にある天下を前提とした天下システムに頼らざるを得ない。天下システムという世界制度を通してのみ、民族・宗教等を超越した世界の公共心や公利を実現することができる」と説明する。中国伝統の天下一家の観念を、現代の国際政治に適用しようとしているように思われる。

ここで、壇上寛氏が説明する「天下システム」とは、大天下と小天下、又は小天下相互の関係調和を媒介する機能概念であり、中国を相対化したところから生まれた概念であると述

べられている。これに対して、趙氏の「天下システム」とは、大天下の理念によって新世界秩序を構築しようとする方法概念であり、中国主導の視点で示されている。こうした発想が近年登場してきた背景には、国際社会における中国の政治・経済的な台頭、それに伴う国家的自信が、中国独自の世界観として戦略的に提起されているものと思われる。

こうした趙氏の「天下体系論」と費孝通氏の「多元一体構造論」の論考について、二つの論考が相互に補完・補強し合い、中国中心の新たな天下観（世界観）が構築されていく可能性を否定できないと考える識者の見方もある。

中国帝国の天下観については、古来より中国の歴代王朝は、有徳の天子の朝廷「天朝」を演じることで、中華と夷狄とを序列・秩序づけて、領土を天下として統治してきた。中華帝国の行動原理の原点・本質を考えると、歴史の時代・空間を超えて、現代、そして未来においても、その趨勢は続いていくものと考えた上で、東アジア世界の構成員として大人の関係を築いていかなければならない。

第4節 夷狄モンゴル帝国の統治原理～契丹社会文化の影響

モンゴル高原東北部に出現したモンゴル勢力は、帝国を形成し、ユーラシア大陸の東西にまたがる広大な版図を築いた。モンゴル帝国時代は、広大な領土を有していたため、一国史的な史料感覚では扱いきれない特異な様相を示している。

モンゴル帝国（元）が、モンゴル高原を統一して、巨大な世界帝国を築きあげた背景には、どのような民族における社会文化の原型があったのか。916年遼を建国したモンゴル系の遊牧狩猟民キタイ（契丹）の耶律阿保機の歴史記録を通して考察してみたい。

葉隆礼撰『契丹国史』（1180年）「歴史学研究会編『世界史史料4 東アジア・内陸アジア・東南アジアⅡ 10～18世紀』」によると、遼の太祖・耶律阿保機は、諸部族を併合し、権力を確立する過程において、略取又は帰順してきた漢人を自らの手元に置いて傘下とし、農耕その他の生産や工芸に従事させて、経済力を蓄えながら勢力拡大を図っていた。その後、漢民族の地への進出を強めると、北面と南面とを分ける二重統治体制を編成し、契丹社会には部族制、漢人社会には州県制を設け、異民族間の社会文化融和策を講じて内からの地盤の安定・強化を図った。

マルコ・ポーロ『東方見聞録』によると、クビライは、大都（現在の北京）を冬の都、上都（現在の内モンゴル自治区シリングル盟正藍旗の南部）を夏の都として両京制をとり、これら2つの都をつなぐ長橢円形の移動エリアの中に軍事・政治・経済の諸機能を集中させ、そこを首都圏とも呼ぶべき中核地域とした。世界の東西の商人や旅行者が集まる一大商業都市として発展を遂げている。草原の帝国モンゴルから陸と海の巨大帝国へと脱皮していく推移を理解することができる。

また、『元史』巻七世祖本紀（1370年）によると、中国の国号は、唐代までは前王朝から封ぜられた爵号に基づくのが普通であったという。なお、宋の太祖が自ら治めていた宋州の地名を国号として以来、明清に至るまで、爵号を国号とすることはなくなり、様々な由来を

持つ国号が制定されるようになった。モンゴルの国号は、チンギス・カーン以来、「大モンゴル国」と称していたが、クビライは1271年、中国向けの国号「大元」を發布し、正式には「大元大モンゴル国」と称した。「元」の由来としては、『易経』の「大いなる哉乾元、万物の資始、乃ち天を統ぶ」という一節があげられている。

契丹文字については、漢人を用いて登用し、漢人から学ぶ中で文字が作成された。大字と小字から成る契丹文字は、ウイグル文字の字母を借りて漢字化した形態をとったと言われている。耶律阿保機は、こうした他部族である漢民族の得意とする技能・知恵を取り込み、活用し、時には二重統治制度を認め、民族を融合させ合いながら、体・名分よりも実利を追求している。こうした契丹の思考・行動は、後のモンゴル帝国及び清国において、同様の統治行動が見られる。例えば、中国を支配したモンゴル族は、中国国内を自らの文化に塗り替えていくのではなく、漢民族の優れた社会文化を吸収・融合しながら、必要とあればモンゴル族自らも変わっていった。こうした変容経緯・行動規範を捉えて見ると、モンゴル帝国や清王朝の統治原理の源流には、遼（契丹）の民族融合・変容の歴史に通じる流れの一部に通じることを推測できるものと思われる。

モンゴル族（満州族）による清朝統治の論理については、清朝による中国支配の正統性を編纂した書物として『大義覺迷録』（1729年）がある。ここでは、清朝は、明を直接滅ぼしたのではなく、明がいわば自壊して流賊（李自成）に奪われ、その後、混乱を清朝が鎮めたとして、天朝論理の文化性を用い、中国統治の正統を強調している。

第5節 日本の歴史と東アジア世界の地域概念

日本の歴史は、日本列島の中だけで集約・包含されるものではなく、古代から大陸の歴史との関係によって形成され展開してきた。日本社会の問題解決のために学ぶべき対象は、近代・現代中心の欧州中心史観に依存しすぎるのではなく、東アジア世界の歴史観及び世界観のなかにこそ、その本質が見つけられるように思えてくる。しかし、それが全てではない。

渡辺浩『東アジアの王権と思想』によれば、徳川体制を支えてきた正統思想は、中華の儒学であったとする見方を否定する。渡辺氏は、「暴力によって成立した徳川の支配に、理論的正統性は薄いとする。徳川時代の体制教学は儒教であったが、その対象領域は「天下」と表現されていたにも関わらず、将軍の統治が、「天命」の委託と公称されていたわけではなかった。中国皇帝と違い、将軍は祭天の儀式を行わない。侍の軍事政治組織を、そのまま有徳なる文明の担い手達の集合とはみなしにくい」と述べている。

その上で、「徳川時代は、身分格式を印象づける象徴的事物と儀礼・儀式・祭典等の種々の象徴的行為が、永い「泰平」の内に異常なまでに発達し、上位者を見えざる光背で包んでいた。理屈よりも心、知性よりも諸感覚と感性に訴える諸象徴が、不断に機能し、体制維持の一助となった。天命を受けた中華の天子なら、夷狄に力で敗れようと、その正統性は揺るがない。しかし、超越的な理屈の支えを持たない「御威光」の支配は、そうした強靱さを持ち得ない」と述べている。

山本七平『山本七平の日本資本主義の精神』によると、日本の歴史の中で、江戸時代は、300年近く継続した「日本人自前の秩序」の時代であったと述べている。民族の精神構造は、様々な要因によって徐々に醸成されるものであるが、現代の人間の社会的階層・職業・世界情勢の基本となる、近世・江戸時代は、日本の特徴である精神性の基本構造を再認識する上で欠かせない。

表4：東アジアにおける儒学関連事項対照表（江戸期）

	日本	中国（清朝）	朝鮮
統治者称号	日本国大君	皇帝	朝鮮国王
中央官制	老中・三奉行、律令制の変形	六部	六曹
使用文字	漢字、平仮名、片仮名	漢字	漢字、ハングル
清への朝貢	無	—	有
身分制度	武士、町人、百姓	士、民	両班、中人、常民、奴婢
科挙	無	有	有
支配層祭祀	仏式	儒教式	儒教式

出典：渡辺浩『東アジアの王権と思想』を一部編集

欧米主導のグローバル世界観では、アジア人が、共通の土俵でアジアを語ることの難しさがある。中華民族の実体を証明する理論的根拠（趙汀陽「天下体系論」、費孝通「多元一体構造論」）の中で、現在の中国には、「東アジア地域」という概念や世界が存在するのかといった疑問が生じてくる。

橋爪大三郎『世界は宗教で動いている』によれば、「中国は多民族国家・多民族社会であり、漢族以外にも様々な民族・多様な文化を含んでいる。中国という呼び方そのものが新しい。中国の意味するところは、「中華」、すなわち「世界の真ん中」という意味である。道徳・価値の規準国という意味である」と述べている。また、韓国で「東アジア地域」概念を積極的に語り始めたのは1990年代であった。冷戦後の国際環境激変の中、自らの位置づけを考える現実・思想課題として浮上したといわれる。日本と韓国は、「東アジア」という同じ言葉を語る一方で、背景や問題意識を異にしている。

現代社会は、物質文明と拝金主義に裏打ちされた市場経済社会ともいわれる。逆に言えば、具体的な「モノ」という形では現れにくい、宗教や倫理などに対する無関心が加速化している世界ともいえる。こうした閉塞感、諦め・厭世観を乗り越えていくためには、今日に至る、社会構造（論理）と精神構造（倫理）の視座に基づいた再認識、再検討が必要である。

第6節 まとめとして

歴史はどのような方向に進んでいるのか。ネットワーク型時代の現代社会への処方箋として、寺島実郎『大中華圏』は、「覇権型世界観では世界を捉える時代は終わったのである。全

員参加型の時代となり、(中略) 自分だけ自己主張を通して、他人の主張を無視できる時代でもない」、「アジアのダイナミズムを吸収し、それとの相関の中で活力を維持する構想を再構築すべき局面にある」と述べている。

社会構造(論理)と精神構造(倫理)を踏まえた長期的視座が求められ中、対症療法的に問題を解決する手法は、現実として必要なことではあるが、短期間しかもたない。「すぐ役に立つことは、やがて役に立たなくなる」ことを歴史は知っている。

現代社会は、グローバル化と流動化の影響で、固定した人間関係ではなく、その場限りの関係となる人が増える傾向にある。その結果、人の繋がりや対面的コミュニケーションが減少し、地域社会に根差した社会・道徳の自然な形成・発展が難しくなっているといわれる。

近年、世界の多くの主体が、目先の効率性・即効性を最重視する要因には、将来の不確実性に対する不安、リスクや損を回避しようとする生存本能(損失回避性)、苦勞を避けて楽な選択指向、本来やるべき行いを無意識に避けてしまう行動回避といった行動習性が認められる。

こうした現代社会の心の健康問題とグローバル化への対応できる時代の働き方について、久世浩司『レジリエンスの鍛え方』によれば、英語力やビジネススキルだけでは十分でなく、失敗や試練に負けない逞しさ、こころが折れそうになる逆境から立ち直るための技術「レジリエンス」Resilienceが必要な能力として求められている。

「レジリエンス」とは、環境学で生態系の環境変化に対する「復元力」を表す言葉として使われていたが、現代心理学で人の「精神的な回復力」を示す言葉として使われ始めた。こうしたしなやかに困難に対応する精神回復力・防御力を持つ「レジリエンス」のある社会が、今後一層、必要になってくるものと思われる。

今後、アジア・ユーラシアのダイナミズムといかに向き合っていくべきか。田口雅弘・金美德『キャンパス・アジア共通教科書 東アジアの経済協力と共通利益』(ふくろう出版、2016年)によると、「東アジアの『共通善』(東アジアの人々の個人の幸福と全体の幸福の同時追求)をベースに、東アジア経済の現状を相互に認識し、その上に立って、いかなる相互関係を構築していく必要があるかを考える」と述べている。その一方で、アリストテレスは、「政治とは、より高邁な理想を追求し、市民にコモングッツ(共通善)を考える機会を与え、意義ある生活を提供すること」であると論じている。

西洋文明の「民主」、アジア文明の「共生」という理念・社会的価値観を指摘する考えがある。西洋では、自由に行動ができ、経済活動も自由にできるため、社会がダイナミックに発展して豊かさを享受できる。東アジアでは、共同利用するシステムに長けている。共に村で生き抜いていく、共生していく、自然と人間が共生すると同時に、人間が村を超え、民族を超えて共生する理念を持っている。これらの概念を使い分け・融合する視座の必要性が増している。そして、これら諸概念を止揚した共通の概念として、東アジアの全員参加型の「共通善」構想の局面が求められている。

中華帝国統治の正統性と共通善～漢民族でなく中華民族であることの意味～

	東洋世界			西洋世界
～中世	東洋文明圏	東アジア世界(冊封体制)	インド	西洋文明圏 共通善 (アリストテレス)
近世 覇権型 世界秩序	中華帝国の天下観 多民族国家を束ねる力学＝「漢民族でなく中華民族」 有機的にゆるやか(ファジー)に連結			16C～大航海時代 (布教と植民地拡大)
	漢字文化圏			天朝体制＝天下統治システム
	政治圏(冊封体制) 冊封(皇帝と首長の関係)＝天朝体制 ・朝貢(君臣関係) ・盟約(父子/兄弟の擬制的家族関係) ・互市(国際貿易)			統治者の要件＝権力者「皇帝」＋有徳者「天子」 民族の違い 漢民族 漢民族以外(モンゴル族) 地域の違い 中心(華) 外縁(夷) 文化の違い 礼・義の有無 ※夷による中国支配の正統化 有徳で礼儀を知る人であれば漢民族でなくても天子となる。
近代	帝国主義と植民地化(西洋のアジア進出、西洋の価値観)			
現代	中華帝国の復興＝国家の上位にある天下を前提とした 天下システム(民族・宗教を超越した公共心)＝天朝論理			グローバル資本主義(米国中心)＝世界の一元化
全員参加型秩序	東洋の「共生」＋西洋の「民主・正義」＝全員参加型の「共通善」			

出典：越田辰宏

第6章 おわりに ～モンゴル帝国が現代にもたらすもの～

第1節 地球規模の天災と大元ウルスの解体

第5代カーン位の継承争いにはじまる中央アジアのチンギス・カーンの子孫達の内部抗争は1301年を境に鎮静化した。1304年にはモンゴル帝国の全版図に融和と一体化がおとずれた。ユーラシア世界はモンゴルのもとで、かつて無い平和共存と経済・文化の繁栄をむかえ出していた。

ところがほぼ時を同じくして300年程続いた温暖期が終わり、異様な長期の天候不順、天災の連続がユーラシア大陸を襲い続けることになった。中華地域も連年、異常気象・天災・饑餓・地震・疫病などの災害に苦しんだ。それはアジア各地やヨーロッパと同様に1310年代から80年代くらいまで、およそ70年続いた。おそらく、中国史上でも最大・最長の災害であった。この長い天候不順の中でモンゴル帝国の支配は次第にゆるぎ崩れていった。大天災に加えて、大元ウルスの中央政局の混乱も帝国解体の誘因となった。1307年にクビライ・カーンの孫で後継者になった成宗テムルがすぐに他界すると、奪権闘争により執政者が二転三転する。大元ウルス政府が国家財政を破綻させ、拡大する天災の対応に苦慮したまま、大元ウルス政府の揺らぎとともにモンゴル帝国の全体的一体性は再び失われていった。

中央政局の紛争のあいだも、天災と饑餓は収まらない。人手不足で堤防の整備を怠っていたことから、大雨が続き1342年からほぼ連年に黄河が大犯濫し、河南、山東、淮北は壊滅状態となった。農民達は水害と飢饉に加え、無償の治水工事に摘発され、武装宗教集団のもとに農民達が大规模に組織され暴動をおこした。農民反乱軍は一時期大勢力に膨れあがったが、互いの統制はなかったため、いったん鎮圧された。だが1355年、大元ウルスの実権者トクトが江北の製塩地と陸・海・川・運河の南北ルートをおさえる張士誠の討伐に自ら軍を率いて南下したとき、元朝宮廷の警戒によりトクトが肅正され南伐軍は崩壊した。その後、大元ウルスの中央政局は再び内紛が続き江北、江南の反乱勢力に余裕を与える事になった。

農民の反乱軍の流れをくむ朱元璋が、ささやかな勢力ながらついに明朝を樹立できたのは、異常な長期の天災・疫病による政治・社会の混乱に加え、モンゴル側の内部抗争の賜物であった。1368年、明朝が成立し、大陸の覇者として君臨し栄光手にしていた大元ウルスが滅亡した。

第2節 ポストモンゴル期の帝国

モンゴル帝国は13世紀クビライ・カーンの治世において最大の領域をつくりあげた。その領域は3,300万km²と、歴史上最大領域の18世紀イギリス帝国の3,370万km²につぐ歴史上2番目の面積であり、地球上の陸地の約25%を占める程であった。現代に照らし合わせると、西は東ヨーロッパ・トルコ・シリア、南はアフガニスタン・チベット・ミャンマー、東は中国・朝鮮半島といった領域である。

図 10 モンゴル帝国の最大領域



出典：<https://www.sekainorekisi.com>

14 世紀後半のモンゴル帝国消滅以降のポストモンゴル期 16 世紀初めころまで、モンゴル帝国時代の名残は続いていた。ポストモンゴル期における特徴として、モンゴル帝国ほどではないが、モンゴル帝国以前にはあり得なかった大きな帝国が出現した。アジアの東側では明帝国から大清帝国、西側ではオスマン帝国、南側では中央アジアを本拠にティムール帝国そして 16 世紀にはティムール帝国がさらにインドまで南下してムガル帝国となり、北側ではモンゴル支配の中から 1 世紀半ばにロシア帝国が浮上した。

それらの大帝国には、初代チンギス・カーンの血が流れている。ロシア帝国はチンギス・カーンの子、ジョチのジョチ家からの系譜。ティムール帝国・ムガル帝国の流れはチンギス・カーンの子、チャガタイのチャガタイ家の系譜、オスマン帝国はチンギス・カーンの末子トルイの子、フレグの系譜となっており、チンギス・カーンの血がモンゴル帝国消滅以降も脈々と各帝国へとつながっていったのである。大帝国以外の周辺小国も、それぞれチンギス・カーンの血を引く末裔が統治していた。

ポストモンゴル期の帝国は、大型、血縁に加えて、長い命をもつ帝国であった。最も早く解体したムガル帝国でさえ、18 世紀後半まで続き、ティムール帝国から数えれば 400 年である。大清帝国は 1911 年、オスマン帝国は 1922 年、ロシア帝国は 1917 年にそれぞれの革命で消滅する 20 世紀まで続いたのである。

19 世紀以降の西欧列強による帝国主義以前の時代は、アジア大帝国の時代が長かった。20 世紀アジア大帝国が消滅する時代を広義にポストモンゴル期と位置付けるならば、モンゴル帝国と 20 世紀近現代とを結ぶ懸け橋の長い時代といえる。

第3節 経済重視による「ゆるやかな統治」

クビライ・カーンが経済重視の国家運営による統治を目指したのはなぜであろうか。モンゴル帝国はチンギス・カーンの草創期から権力の多重構造のある連合体であった。クビライ・カーンの時代も、大カーンのウルスであるクビライの帝国を中心に、その他のウルスがとりまく二重構造、連邦ともいえる構造であった。クビライ・カーンにとってはそれを統治するには、ベースに軍事力というものがあるが武力にて巨大帝国の隅から隅までを統治することは現実的ではない。反対勢力も含め、全モンゴル帝国を確実にかつ永続的に掌握するものが必要であり、それが「富」であった。国家主導による経済システム、即ち物流・通商をつくり出し、利益を循環させて統治する構想を講じた。

その担い手となるのが、「イラン系・ムスリム商人勢力」と「ウイグル商業勢力」＝「オルトク」と呼ばれる会社組織を構成、その出身の有力な人物を「財務官僚」に配置し、政経一致での経済政策を推進した。この「オルトク」を国家の許認可組織とすることで、「オルトク」はモンゴル帝国の交通網を優先的に使うことができ、その後ろ盾の下、ユーラシア大陸の各地へと商業を拡大していった。「オルトク」の活動の源泉となる資金は、モンゴル王家・王侯・貴族らから出資の形で借入、出資をする側の王家たちの資金の源は、クビライ・カーンからの賜与というものであった。つまり、納入させた税を賜与として与え、それが「オルトク」の活動資金となり、利益がまた税として入ってくる循環である。各地の王家たちも潤い、クビライ・カーンが経済を通じて統治を続けられる仕組みをつくり出したのである。

クビライ・カーンのとった経済政策の特徴の一つとして、通過税の撤廃があった。それまでは、商人が要所要所を通るたびに通過税が徴収されたが、これでは長距離の大型商業・商人は育たないと、撤廃し、商品は最終の売却地で売上税を払えばよいこととした。一方で、要所要所である地方には、その土地からの税収を中央に収めることなく地方税としてすべて与えることで不満のないように講じた。商人たちは、交易をスムーズに行うことができ、関税も少ないことを望んでいたことから、モンゴル帝国という広域の帝国の誕生が願ってもないことであった。こうした英断により、13世紀におけるモンゴル帝国は、経済が活性化し富が循環するシステムとなっていたのである。当時の物流網は、シルクロードの陸路はウイグル商人のネットワークに沿っており、海路は中国・東南アジアからインド洋、アラビア海に至る、南海航路が開かれていた。

すでに13世紀には、現在、中国が主導している、「一带一路」のルートが物流網として活性化していたことのみならず、現代の各国の経済連携の起源をそこにみることができる。私たちがモンゴル帝国の経済重視による「ゆるやかな統治」に学ぶべきことは、アメリカ・中国という2つの大国の利益ではなく、世界の国々が、様々な経済連携により、世界という視点で、各国のとおてのお互いの利益が生じる、「ゆるやかな経済連携」となっていくことが必要である、ということではないだろうか。また、北東アジアにおける日中韓の関係をみてみると、現在の経済と政治の不均衡という状況下、これからのアジア主導の時代においては経済連携・協力が先行することによって、国家間の関係性が改善されることを望む。

さらに、現代との比較において、モンゴル帝国が銀貨の流通から、紙幣の導入を図ったことに注目したい。13世紀にすでに銀の流通により交易の発展につながっていたが、そこへ紙幣の導入がなされたことにより、交易がさらに活性化し、ヒト・モノが動いていった事実は、当時は想定もしていない画期的なことではなかったであろうか。その時代以降、紙幣は現物貨幣として現代に至るまで世界で流通している。

そして現代においては、ビットコインに代表される「仮想通貨」が台頭してきている。仮想通貨の出現による法整備や大企業・大手金融会社の参入などの現象が今まさに起きているという事実は、モンゴル帝国による紙幣導入以来の通貨における「インパクト」であると言っても、決して言い過ぎではないであろう。

第4節 「イル（仲間）になる」思想と「文化不干涉」に学ぶ

モンゴル帝国の拡大の要因に、「イル（仲間）になる」という思想が源になる。征服・統治をしていく国に対し、「イルになる」スタンスであることから、統治された国側もモンゴル帝国の一員として、モンゴル帝国拡大のエネルギーを発揮するという連鎖は、私たちがフィールドワークにて訪ねた、龍谷大学・村岡倫教授も指摘している。前述の経済重視のゆるやかな統治においてのカギとなる商人の会社組織「オルトク」の語源は、トルコ語の仲間という意味である。「イルになる」という思想が根底にあった上で、統治する国の文化に干渉しない、「文化不干涉」のスタンスがまた、帝国の拡大につながっていったのである。特に、統治国の宗教を保証するということは、モンゴル帝国の傘の下に入ることを躊躇させない大きな要素であった。クビライ・カーンは、自らのブレーン達を様々な人種、ウイグル人・女真族・漢族・イラン系ムスリム商人など多彩且つ有能な人材で固めていたということからも、「文化不干涉」の思想が伺える。

この思想に、特に日本企業は学ぶべき点が多いと考える。グローバルの土俵で日本企業が発展していくためにも、アジアの中の日本企業として、アジア・ユーラシアは勿論、世界の視点で、各国の文化・宗教・人種といったものを理解し、多様性を受け入れる度量と土壌が必要となってくる。海外戦略を成功させるためには勿論のこと、日本国内においても外国人の採用、雇用が必要となってくる時代に不可欠なことである。また、海外戦略が成功していない企業の課題のひとつは「現地化」とであると考ええる。進出する国・地域・ローカル・人をよく理解する、入り込む、といった現地化は「イルになる」「文化不干涉」の思想に通ずるものではなかろうか。日本企業のリーダー、企業そのものが持つべき思想であるといえる。

私たちは、文献研究・フィールドワークを通じて、モンゴル帝国を率いたチンギス・カーン、クビライ・カーンに代表されるリーダー達の思想・構想力・人間力は、現代を率いる国家・企業を率いるリーダーが持つべき視野であることを発見した。さらには、この現代において、国家間が、軍事による緊張ではなく、「各国が互いを理解・尊重する上での対話」と「経済連携による発展」が、モンゴル帝国が時代を経て現代世界へ示唆を与え、平和と安定をもたらす道であると考ええる。

モンゴル帝国、朝鮮半島、日本、中国、世界の年表

モンゴル(帝国)、高麗(朝鮮半島)、日本、宋(中国)、世界の年表									
	モンゴル(帝国)	高麗(朝鮮半島)	日本	宋(中国)	世界				
1126年		金に服属							
1127年				金が北宋を滅ぼす					
1185年			壇ノ浦の戦い						
1192年			鎌倉幕府成立						
1206年	チンギス・カーンがモンゴル帝国を樹立				デリー＝スルタン朝成立				
1209年	西夏に侵攻(1227年滅亡)				フランチェスコ修道会創設				
1211年	金に侵攻(1234年滅亡)								
1214年				開封に遷都					
1215年					ゴール朝、ホラズム帝国に滅ぼされる				
1218年	高麗と共同で黒契船を制圧	モンゴル帝国と共同で黒契船を制圧							
1219年	ホラズム帝国に侵攻		源実朝が暗殺される						
1221年			六波羅掾設置						
1227年	チンギス・カーン死亡		遼元、書洞宗を開く						
1229年	オゴデイ即位								
1231年	高麗に侵攻	モンゴル帝国の侵攻を受ける							
1232年		都を開京から江華島に移す	御成敗式目制定						
1234年				オゴデイに滅ぼされる					
1240年	キエフ・ルーシ諸侯国を征服				マリ王国建国				
1241年					ワールシュタットの戦い				
1242年	オゴデイ死亡								
1251年	モンケ即位								
1253年			日蓮、日蓮宗を開く						
1256年					ドイツ、大空位時代				
1259年	モンケ死亡	モンゴル帝国(元)に属国化		クビライが覇州を包囲					
1260年	クビライ、アリクブケ共に即位								
1270年		三別抄の乱(～73年)							
1271年	国号を元とする			クビライが国号を元とし北京に遷都					
1273年				元が襄陽を陥落させる					
1274年	第1回日本侵攻(文永の役)	日本侵攻に協力	文永の役						
1276年				元が臨安を陥落させる	クビライが中国全土統一				
1279年				南宋滅亡					
1281年	第2回日本侵攻(弘安の役)	日本侵攻に協力	弘安の役						
1294年	クビライ死亡								
1350年			頼応の乱		ペストの大流行				
1351年				紅巾の乱(白蓮教徒の乱)					
1368年	北元成立								
1370年					ティムール朝成立				
1392年		高麗滅亡	南北朝の合一						
1404年			明と勘合貿易始まる	日本と勘合貿易始まる					
1410年	明の侵攻を受ける(～1414年)								
1446年		訓民正音(ハングル)制定							
1453年					ビザンツ帝国滅亡				
1533年					インカ帝国滅亡				
1549年			フランシスコ・ザビエル来航						
1550年				庚戌の乱					
1592年		壬申・丁酉の倭乱(～1598年)	文禄・慶長の乱(～1598年)						
1602年					東インド会社設立				
1603年			江戸幕府成立						
1616年				清建国					
1634年	清により北元が滅亡								
1637年		清に服属	島原の乱						
1640年									
1683年				中国統一	イギリス革命開始				

参考論文一覧表

論文

1. 寺島実郎(〈脳力レッスン〉その6 ポルトガルが先行した大航海時代と天正遣欧使節『世界』岩波書店 2012 年 1 月号
2. 寺島実郎(〈脳力レッスン〉その7 日本の大航海時代—朱印船貿易から鎖国へ)『世界』岩波書店 2012 年 3 月号
3. 寺島実郎(〈脳力レッスン〉その8 日本の大航海時代—鎖国とは中国からの自立でもあった)『世界』岩波書店 2012 年 4 月号
4. 寺島実郎(〈脳力レッスン〉その16 石見銀山と銀の地政学)『世界』岩波書店 2013 年 6 月号
5. 寺島実郎(〈脳力レッスン〉その21 「朝鮮通信使」にみる江戸期の日朝 関係)『世界』岩波書店 2014 年 4 月号
6. 寺島実郎(〈脳力レッスン〉その22 「国交なき交易」としての江戸期の日中関係)『世界』岩波書店 2014 年 6 月号
7. 寺島実郎(〈脳力レッスン〉その28 江戸期の琉球国と東アジア、そして今の沖縄)『世界』岩波書店 2015 年 4 月号
8. 寺島実郎(〈脳力レッスン〉その43 鄭和の大航海と東アジアの近世)『世界』岩波書店 2017 年 4 月号
9. 寺島実郎(〈脳力レッスン〉その44 インド史の深層)『世界』岩波書店 2017 年 6 月号
10. 寺島実郎(〈脳力レッスン〉その45 東南アジアの基層と西欧の進出—バタヴィア経由のオランダを見つめた江戸期日本—)『世界』岩波書店 2017 年 7 月号
11. 寺島実郎(〈脳力レッスン〉その46 モンゴルという衝撃 —十字軍と蒙古襲来—)『世界』岩波書店 2018 年 1 月号
12. 松岡倫「元代モンゴル皇族とチベット仏教——成宗テムルの信仰を中心にして」1996 年
13. セミナー: ジャパンタイムズ「メディアマーケティング戦略と課題について考える」2017 年 10 月 29 日
14. 自念陽子(「モンゴル帝国におけるウイグル人官僚」『史窓』50 号)京都女子大学史学会 1993 年
15. パク ウォンギル(「モンゴル帝国の宗教政策」『世界平和研究』181 号)世界平和アカデミー2009 年
16. 森平雅彦「事元期高麗における在来王朝体制の安全問題」北東アジア研究別冊第 1 号 2008 年
17. 四日市康博「モンゴル帝国期の国際貿易における商人と国家」早稲田大学提出博士論文 2007 年
18. 宇野伸浩「モンゴル帝国の国家と社会」早稲田大学提出博士論文 2011 年

19. 川本正知 「モンゴル帝国における戦争―遊牧民の部族・軍隊・国家とその定住民支配」
奈良産業大学提出博士論文
20. Suuhan Gerelt 「モンゴル帝国時代におけるハーンたちの世界観について」 和光大学総合文化研究所年報『東西南北』2003 年

著書

1. 寺島実郎『時代との対話』株式会社ぎょうせい 2010 年
2. 寺島実郎『大中華圏』NHK 出版 2012 年
3. 杉山正明『モンゴル帝国の興亡〈上〉軍事拡大の時代』講談社現代新書 1996 年
4. 杉山正明『モンゴル帝国の興亡〈下〉世界経営の時代』講談社現代新書 1996 年
5. 杉山正明『大モンゴルの世界～陸と海の巨大帝国』角川ソフィア文庫 2014 年
6. 杉山正明『興亡の世界史』第 9 巻『モンゴル帝国と長いその後』講談社 2008 年
7. 杉山正明他『NHK スペシャル文明の道』第 5 巻『モンゴル帝国』NHK 出版 2004 年 8.
- W.H. マクニエール『世界史（上）』中公文庫 2008 年
9. 岡田英弘『世界史の誕生～モンゴルの発展と伝統』ちくま書房 1999 年
10. 岡田英弘『モンゴル帝国から大清帝国へ』藤原書店 2010 年
11. 本田実信『モンゴル時代史研究』東京大学出版会 1991 年
12. 村上正二『モンゴル帝国史研究』風間書房 1993 年
13. 早稲田大学モンゴル研究所編吉田順一監修『モンゴル史研究：現状と展望』明石書店 2011 年
14. 川本正知『モンゴル帝国の軍隊と戦争』山川出版社 2013 年
15. 森平雅彦『モンゴル帝国の覇権と朝鮮半島』山川出版社 2011 年
16. 海音寺潮五郎『蒙古の襲来』河出書房新社 2008 年
17. 田口雅弘・金美德『キャンパス・アジア共通教科書東アジアの経済協力と共通利益』ふくろう出版 2016 年
18. 黒田俊雄『日本の歴史蒙古襲来』中公文庫 1974 年
19. 服部英雄『蒙古襲来』山川出版社 2014 年
20. 白石典之『モンゴル帝国誕生 チンギス・カンのを掘る』講談社 2017 年
21. 愛宕松男・寺田隆信『モンゴルと大明帝国』講談社学術文庫 1998 年
22. 杉山正明『モンゴル帝国と長いその後』講談社学術文庫 2016 年
23. 壇上寛『永楽帝 華夷秩序の完成』講談社学術文庫 2012 年
24. 杉山正明『クビライの挑戦』講談社学術文庫 2010 年
25. 西嶋定生・李成市『古代東アジア世界と日本』岩波書店 2000 年
26. 羽田正『新しい世界史へー地球市民のための構想』岩波新書 2011 年
27. 李成市「東アジア世界論と日本史」『岩波講座日本の歴史第 22 巻』岩波書店 2016 年
28. 李成市「なぜ今『東アジア史』なのか」『いまアジアをどう語るか』弦書房 2011 年

29. 壇上寛『天下と天朝の中国史』岩波新書 2016 年
30. 岡本隆司『中国の理論』中公新書 2016 年
31. 趙汀陽『天下体制——世界制度哲学導論』江蘇教育出版社 2005 年
32. 歴史学研究会編『世界史史料』第 4 巻『東アジア・内陸アジア・東南アジアⅡ10～18 世紀』岩波書店 2010 年
33. 橋爪大三郎『世界は宗教で動いている』光文社新書 2013 年
34. 渡辺治『東アジアの王権と思想』東京大学出版会 1997 年
35. 山本七平『山本七平の日本資本主義の精神』ビジネス社 2015 年
36. 久世浩司『レジリエンスの鍛え方』実業之日本社 2014 年
37. 学研（歴史群像シリーズ特別編集チンギス・ハーン『大モンゴル”蒼き狼”の覇業』）2007 年
38. 岡田英弘（歴史群像シリーズ特別編集チンギス・ハーン『モンゴル帝国の興亡』）2001 年

2017年インターゼミ・アジアダイナミズム班 年間スケジュール(最終)

【メンバー】14名 ①学部2名(玉木、一杉)②院生3名(指宿、光永、田村)③卒業生・修了生7名(山口、塚原、越田、成田、和泉、王、馬)
③教員2名(金先生、水盛先生)

【担当】リーダー(玉木・光永)、議事録:全員、スケジュール管理(玉木、光永)、会計(田村)

	月	日	議 題	文献調査	フィールドワークFW	備 考
1	4月	8				
2		15	自己紹介 テーマ「モンゴル」			
3		22	ベース文献より事実調査分担	ベース文献+モンゴル帝国の興亡(上・下)		グループ決定
4	5月	6	タイトル「モンゴルのユーラシア興隆史」 分担調査の発表	ベース文献+モンゴル帝国の興亡(上・下) 各自文献5冊		次回まで各自文献・論文5つ
5		13	分担発表			年間スケジュール
6		20	分担発表	文献集計・目次	アポイント(水盛先生)	FWスケジュール
7		27	分担発表 計画発表PPT	文献集計・目次		
8	6月	3	研究計画発表PPT確認			
		10	研究計画発表リハーサルPPT			品川・大学院にて
9		17	◎研究計画中間発表	研究テーマ、目的、問題意識目次、文献、フィールドワーク		
10		24	研究計画発表反省 中間発表へ向けた計画		訪問先確定	
11	7月	1	箱根合宿発表、目次立て	点検、発表に向けた討議	訪問先調査内容	
12		8	分担発表	問題意識レポート、PPT作成	各自担当FW訪問先の調査	
13		15	分担発表	問題意識レポート、PPT作成	各自担当FW訪問先の調査	
14		22	箱根合宿発表PPT確認		各自担当FW訪問先の調査	7月29日 品川・大学院
			夏期休暇期間			
	8月	3-4	8/3(木)-4(金) 夏合宿(箱根)中間発表 合宿先: 箱根水明荘(箱根町湯本702) TEL0460-85-5381 (代) http://www.suimeisou.com/access/index.htm	●発表者(役割分担): 1 研究概要、2 目次、3 内容、4 参考文献・研究計画・FW ●日程案: (1日目) 12:30会場集合、13:00集合(B1F)合宿日程説明、13:05中間発表(15分)+質疑応答(20分)、15:40 16:40教員発表、16:40~全体講評、夜 懇親会 (2日目) 9:00寺島学長講話、10:40グループ学習、12:00過ぎ解散		
		25-27	8/25(金)-27(日) 現地調査		京都	
15	9月	23	FW報告 秋学期の日程確認		FW報告(講義内)	
16		30	今後の論文計画	各執筆原稿の発表(状況報告)	FW2回目に向けて	
17	10月	7	分担、各自発表			
18		14	(現地調査)(日程仮)		(現地調査)(仮)	
19		21	過去執筆データについて 作成に当たっての注意		FW報告(講義内)	
20		28	分担、各自発表			
21	11月	4	執筆文章推敲 スライド(PPT)作成			
		11	学園祭(講義なし)			多摩大学学祭
22		18	PPT・論文推敲全体確認			
23		25	PPT・論文 AL祭・最終発表に向けて			
24	12月	2	PPT・論文 AL祭・最終発表に向けて			
25		9	発表・アクティブラーニング(AL)祭			
26		16	最終発表の最終確認	最終発表、論文目次調整、論文推敲		
27		23	最終発表・25日論文提出日	論文(紙媒体)⇒教員は冬休み中に論文確認		12/23 年内最終授業 12/ -1/5 冬休み
28	1月	6	最終調整、論文完成	教員からのフィードバック 最終修正部分確認		
		13	センター試験(講義なし)	論文最終確認作業		
29		20				
30		27	最終論文提出(完成版) 最終講義	提出者、提出方法		

授業回数 計30回(前期:14回 後期:16回)

京都フィールドワーク日程 (アジアダイナミズム班)

●日程:2017年8月25日(金)～27日(日)2泊3日

●参加者予定数: 7名(学部・院生5名、教員2名)

アジア班: 学部生・院生(玉木・一杉・田村・指宿・光永) 教員(金先生、水盛先生)

宿泊ホテル:アークホテル京都 (住所:京都市中京区壬生賀陽御所町1 電話:075-812-1111)

	時間	場所	備考
8/25 (金)	9:00	東京発	のぞみ 213 号
	11:17	京都着	
		昼 食	京都駅構内
	12:09	京都発	JR 京都線
	12:14	桂川着	タクシーにて国際文化研究センターへ(20 分) 12:40 着予定
	13:00	国際日本文化 研究センター	榎本渉氏 14:30 研究センター出発予定
	14:56	阪急桂発	15:03 大宮着
	15:10		ホテルチェックイン(荷物預け)
	15:30	ホテル発	タクシーにて龍谷大学へ(5 分) 15:40 着予定
	16:00	龍谷大学 大宮キャンパス	村岡倫氏
	17:30		大学出発 タクシーにてホテルへ(5 分) 17:40 着予定
	17:40		ホテル 待機(30 分程度)
	18:10	ホテル発	タクシーにて夕食会場へ(10 分)
	18:30	夕食 ホテル着	アークホテル京都泊
8/26 (土)		起床、各自朝食	
	8:05	ホテル発	アークホテル出発 東福寺へタクシーの場合(20 分)
	8:15	大宮発	8:39 東福寺駅着
	9:00	東福寺	爾英晃(そのひであき)執事
	11:00		東福寺出発
		昼食	① 東福寺近隣で昼食後、ミュージアムへ タクシー(10 分) ② 東福寺より京都へ電車→昼食→徒歩 12 分でミュージアム
	12:30	龍谷ミュージアム	見学
	14:30		ミュージアム出発 京都駅付近へ タクシー(5 分)又は徒歩
	15:00	貸会議室	関西大学 東西学術研究所 研究員 藤原崇人 氏
	16:30		出発 ホテルへ タクシー(10 分) 電車 15 分(360 円)
			ホテル発 大宮→烏丸(1 駅)
	18:30	夕食	アークホテル京都泊

8/27 (日)	10:00	起床、各自朝食 天龍寺	天龍寺内視察
		昼食	
	14:05	京都発	のぞみ 230 号
	16:23	東京着	解散

アジアダイナミズム班・2017年フィールドワーク報告要旨

日程：2017年8月25日～27日

訪問地域：京都市

訪問先	：国際日本文化研究センター	榎本 渉 准教授
	龍谷大学 文学部	村岡 倫 教授
	関西大学東西学術研究所	藤原 崇人 研究員
	東福寺	爾 英晃 執事
	龍谷ミュージアム	
	天龍寺	

フィールドワーク参加者：学部生	玉木真悟	一杉波音
大学院生	指宿ひとみ	光永和弘 田村英和
修了生	和泉昌宏	
指導教員	金美徳	水盛涼一

1. 国際日本文化研究センター 榎本 渉 准教授（左から3人目）



12世紀後半の大宰府を通じた僧侶の海外渡航の規制緩和とともに、入宋僧が急増し中国僧が渡来するようになった。海商・僧侶双方にメリットがあった。

1243年径山火災の情報が入ると、1244年円爾が復興用の木材を送付、諸国名が船を手配するなど、復興ビジネスが行われた。

夢窓疎石は当時のアントレプレナーであったといえる。足利直義に天龍寺創建費用の不足を宋との貿易により補うことを進言した。

元時代の国教チベット仏教をとってみても北方と南方では影響度が違うという事象をみても、中国において仏教・文化共に南北における違いが多い。

商人の往来があったからこそ、僧の往来もあったといえる。したがって、貿易・商業と宗教には極めて密接な関係があることが分かる。

2. 龍谷大学 文学部

村岡 倫 教授（中央の人物）



昨日までの敵を仲間にするために、戦いの後、婚姻関係を通じて「イル」となり、「モンゴル」の一員となっていった。こうしてモンゴル高原に数多く分立していた遊牧集団は統合されていったのである。

遊牧民の財産は家畜であり、世話をする人の数と比例して家畜は増えてゆく。そのため、戦わずして勝つことで配下の人を増やす＝財産を増やす、人名尊重策をとったのである。

情報戦により、如何に楽に勝つかを実践していた。それ故に、いかに殺さないように「イル」になるか、するか、さぐりあいであった。

遊牧民は国の概念が異なる。つまり国土ではなく人の集まりが国であるという考え方である。モンゴルとは場所としての国名ではなく、チーム名のようなものといえる。

モンゴル帝国のおかげで東西交易が可能になったのではなく、東西交易を可能にするために商人たちがモンゴル帝国を導いたのではないか、という考え方もある。

モンゴル帝国が広域を治めたおかげで、今もアジア諸国はヨーロッパ諸国に比べて一国が大きいことに名残がある。

安全なユーラシア交易を望む商人たちも「モンゴル」に期待したのである。そうして、商人達も「イル」となっていったのである。

農民・定住民に対しては、それぞれの信仰の保証とそれらの宗教に対する保護を保証することで、気持ちよく仕事をしてもらい「イル」にしていだったのである。

モンゴルは、人とネットワークであり、無理矢理の拡大ではない。人の集まりが国という考えが根底にある。その考え方が統治の鍵のひとつであるといえる。

攻略された国は、モンゴル帝国の統治下において、自分たちの地位をあげるべく、モンゴル帝国の次の攻略へ力を発揮するという仕組みになっていた。その仕組みは、第2回目の日本遠征（元寇）において、南宋が自らの地位をあげるべく日本遠征に意欲的に参画したことにもみられる。

3. 関西大学東西学術研究所 藤原崇人 研究員（左から3人目）



契丹は皇帝権力が不安定だったため、道宗・仏教を利用したが、基本はシャマニズムの文化である。

仏教教団は単なる信仰集団ではなく、金融・宿泊・貸倉庫など総合商社の様な存在であった。

遊牧民のリーダーは戦利品を部下に与える役割を担った。分配によってリーダーの地位を維持していた。これは正に、モンゴル帝国の統治システムと同様といえる。

4. 東福寺
爾 英晃
執事（後列右
側の人物）



宗派は後々できたものであり、当初は宗派には関係なく、他の寺でも修行していた。

僧侶が水車技術を中国から持ち帰ったという実績から、僧侶が果たす役割が現代とは相当違っていることが分かる。

饅頭や羊羹などの和菓子とその製法、習慣などを伝えたり、風呂敷の名の由来となる風呂のたしなみがあったり、画の研鑽を積んだり僧侶は当時の最高の教養人・文化人であると同時に先端人であったことが分かる。

日本と中国の往来・交流において僧侶と商人は切り離せない関係である。

東福寺においても、1319年の火災後、承天寺を介して貿易船を派遣したが、併せて僧侶も元に派遣していた。そして慶元での取引後の帰路、韓国にて沈没したと思われるのが「新安沈船」である。

その沈没船から大量の銅銭などが発見されたことから、東福寺復興事業のために派遣された船である可能性が高いとされている。

モンゴル帝国のユーラシア興隆史

2017年度インターゼミ アジアダイナミズム班

学部生 : 玉木真悟, 一杉波音, 馬玉鑫

大学院生 : 指宿ひとみ, 光永和弘

卒業生・修了生: 山口夏実, 塚原啓弘, 越田辰宏, 成田晋也,
和泉昌宏, 王星星

1

全体の問題意識から導きだすもの 『研究目的』

1. 13世紀、人類史上最大の版図をつくり上げ、ユーラシアの安定と平和をもたらした、モンゴル帝国の「ゆるやかな統治」の鍵はどこにあるか。
⇒ チンギス・カーン、クビライ・カーンの
「リーダーシップ」「組織構想力」に学ぶもの
2. モンゴル帝国が実現したユーラシア興隆は、中国(明朝・清朝)、中央アジア(ティムール・ジュンガル)、インド(ムガル)、ロシアにまで、影響を及ぼしているが、現代の経済・政治体制にはどのように影響しているのか。

2

参考論文一覧表

論文

- 1 寺島実郎 (〈脳力レッスン〉その6ポルトガルが先行した大航海時代と天正遣欧使節) 2012年
- 2 寺島実郎 (〈脳力レッスン〉その7日本の大航海時代—朱印船貿易から鎖国へ) 2012年
- 3 寺島実郎 (〈脳力レッスン〉その8日本の大航海時代—鎖国と中国からの自立でもあった) 2012年
- 4 寺島実郎 (〈脳力レッスン〉その16石見銀山と銀の地政学) 2013年
- 5 寺島実郎 (〈脳力レッスン〉その21「朝鮮通信使」にみる江戸期の日朝 関係) 2014年
- 6 寺島実郎 (〈脳力レッスン〉その22「国交なき交易」としての江戸期の日中関係) 2014年
- 7 寺島実郎 (〈脳力レッスン〉その28江戸期の琉球国と東アジア、そして今の沖縄) 2015年
- 8 寺島実郎 (〈脳力レッスン〉その43鄭和の大航海と東アジアの近世) 2017年
- 9 寺島実郎 (〈脳力レッスン〉その44インド史の深層) 2017年
- 10 寺島実郎 (〈脳力レッスン〉その45東南アジアの基層と西欧の進出
—バタヴィア経由のオランダを見つめた江戸期日本—) 2017年
- 11 寺島実郎 (〈脳力レッスン〉その46モンゴルという衝撃 —十字軍と蒙古襲来— 2018年
- 12 学研 (歴史群像シリーズ特別編集チンギス・ハーン『大モンゴル“蒼き狼”の覇業』) 2007年
- 13 岡田英弘 (歴史群像シリーズ特別編集チンギス・ハーン『モンゴル帝国の興亡』) 2001年

3

- 7 杉山正明他『NHKスペシャル文明の道⑤モンゴル帝国』 NHK出版 2004年
- 8 堺屋太一『堺屋太一が解くチンギス・ハーンの世界』 講談社 2006年
- 9 岡田英弘『世界史の誕生～モンゴルの発展と伝統』 ちくま書房 1999年
- 10 岡田英弘『モンゴル帝国から大清帝国へ』 藤原書店 2010年
- 11 本田実信『モンゴル時代史研究』 東京大学出版会 1991年
- 12 村上正二『モンゴル帝国史研究』 風間書房 1993年
- 13 早稲田大学モンゴル研究所編 吉田順一監修『モンゴル史研究：現状と展望』 明石書店 2011年
- 14 川本正知『モンゴル帝国の軍隊と戦争』 山川出版社 2013年
- 15 森平雅彦『モンゴル帝国の覇権と朝鮮半島』 山川出版社 2011年
- 16 海音寺潮五郎『蒙古の襲来』 河出書房新社 2008年
- 17 麻生川静男『本当に悲惨な朝鮮史』 角川新書 2017年
- 18 黒田俊雄『日本の歴史蒙古襲来』 中公文庫 1974年
- 19 服部英雄『蒙古襲来』 山川出版社 2014年
- 20 白石典之『モンゴル帝国誕生 チンギス・カンの都を掘る』 講談社 2017年
- 21 愛宕松男・寺田隆信『モンゴルと大明帝国』 講談社学術文庫 1998年
- 22 杉山正明『モンゴル帝国と長いその後』 講談社学術文庫 2016年
- 23 壇上寛『永楽帝 華夷秩序の完成』 講談社学術文庫 2012年
- 24 杉山正明『クビライの挑戦』 講談社学術文庫 2010年

5

- | | |
|--|---------------|
| 25 西嶋定生・李成市 『古代東アジア世界と日本』 | 岩波書店 2000年 |
| 26 羽田正 『新しい世界史へー地球市民のための構想』 | 岩波新書 2011年 |
| 27 李成市 「東アジア世界論と日本史」『岩波講座 日本の歴史第22巻』 | 岩波書店 2016年 |
| 28 李成市 「なぜ今『東アジア史』なのか」『いまアジアをどう語るか』 | 弦書房 2011年 |
| 29 壇上寛 『天下と天朝の中国史』 | 岩波新書 2016年 |
| 30 岡本隆 『中国の理論』 | 中公新書 2016年 |
| 31 趙汀陽 『天下体制-世界制度哲学導論』 | 江蘇教育出版社 2005年 |
| 32 歴史学研究会編 『世界史史料4東アジア・内陸アジア・東南アジアⅡ 10～18世紀』 | 岩波書店 2010年 |
| 33 橋爪大三郎 『世界は宗教で動いている』 | 光文社新書 2013年 |
| 34 渡辺治 『東アジアの王権と思想』 | 東京大学出版会 1997年 |
| 35 山本七平 『山本七平の日本資本主義の精神』 | ビジネス社 2015年 |
| 36 久世浩司 『レジリエンスの鍛え方』 | 実業之日本社 2014年 |
| 37 田口雅弘・金美德 『キャンパス・アジア共通教科書 東アジアの経済協力と共通利益』 | ふくろう出版 2016年 |

6

フィールドワーク

1. 訪問地:京都市
2. 日 程 :2017年8月25日(金)～27日(日)2泊3日
3. 調査先:・国際日本文化研究センター 榎本渉氏
 ・龍谷大学 村岡倫氏
 ・関西大学東西学術研究所 藤原崇人氏
 ・東福寺 爾 英晃 執事
 ・龍谷ミュージアム
 ・天龍寺



フィールドワーク要旨

【インタビュー】

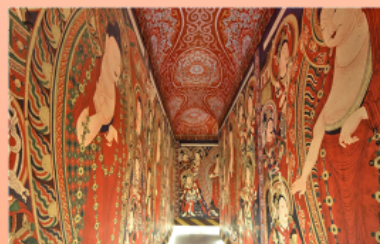
1. 国際日本文化研究センター 榎本渉氏 文献:「東アジア海域と日中交流」他
・12世紀後半、大宰府を通じて日本・宋両国の海商、ならびに僧の往来が活発化。
貿易・商業と宗教の関係は密接であった。
・中国は南北で宗教や文化が異なり、元時代におけるチベット仏教の影響も同様。
2. 龍谷大学 村岡倫氏 文献:「元代江南投下領とモンゴリアの遊牧集団」他
・モンゴルの戦わずして勝つ戦略は、民の拡大＝財産(家畜)の増大を意味する。
・遊牧民にとって国とは国土ではなく人の集合。モンゴルとはチーム名のようなもの。
・統治の鍵は、宗教保護と信仰保証。
・被攻略国が地位を向上するため、次の攻略戦へ積極参加するという循環。
3. 関西大学東西学術研究所 藤原崇人氏 文献:「契丹仏教史の研究」他
・契丹は皇帝権力の不安定をカバーするため、道宗・仏教を利用。
・仏教は単なる宗教集団ではなく、総合商社のような機能を有していた。
・遊牧民のリーダーは戦利品の分配により、己の地位を維持。

8

フィールドワーク要旨

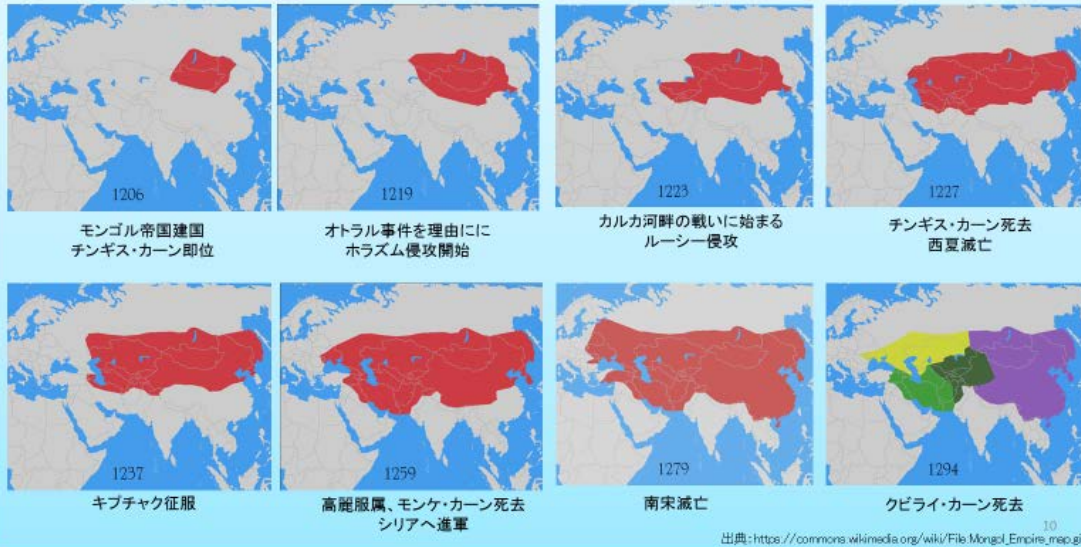
【視察】

1. 東福寺(解説:東福寺・塔頭「天徳院」住職、本寺・法務部長 爾 英晃氏)
・当時、僧侶は最高の教養人・文化人かつ先端人であり、大陸からあらゆる文化や習慣、技術などを持ち帰った。
・日本と中国の往来・交流において、僧侶と商人を抜きにはできない。
・1319年、東福寺は火災にあい、その復興事業として貿易船を中国に派遣した。
2. 龍谷ミュージアム
・現在の新疆ウイグル自治区トルファンに位置する「ベゼクリク石窟寺院・大回廊」第15号窟の原寸大復元には多様な民族が描かれ、当時の東西交流が見て取れる。
3. 天龍寺
・1342年、副将軍・足利直義は天龍寺造営のための貿易船を派遣。商売の善し悪しに関わらず5,000貫文を天龍寺に納めさせる約束。

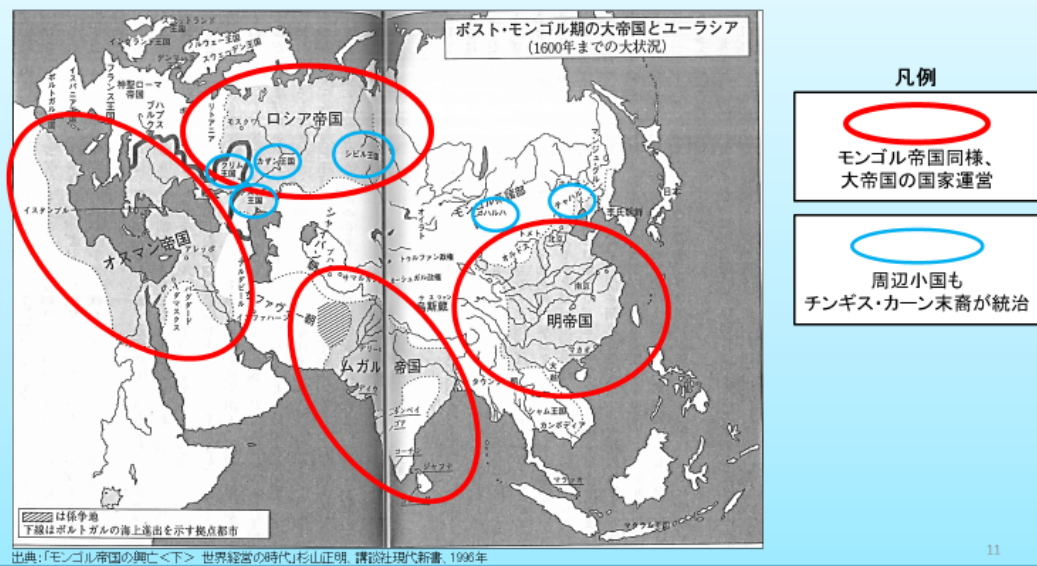


9

チンギス以前～クビライ治世(12～13世紀)で最大領域に至るモンゴル勢力

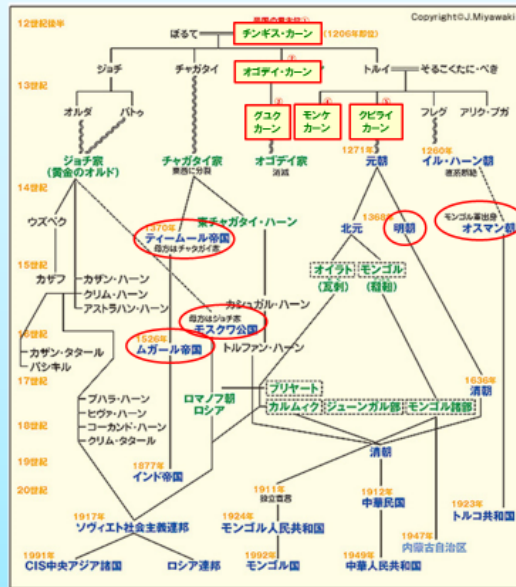


ポスト・モンゴル期の大帝国



モンゴル帝国の継承国家

※カーン: 皇帝(帝国全体の最高位)
※ハーン: 各王家の当主



出典: http://www.jrc.jrc.ac.jp/school/2010/miyawaki/1_4.html

論文目次

はじめに

1. 13世紀前半 初代チンギス・カーンの時代～モンゴル帝国の樹立と拡張～
 - (1) モンゴル帝国の成立 (2) 戦略と戦術 (3) 残したものの (4) 現代との繋がり
2. 13世紀後半 5代クビライ・カーンの時代～モンゴル帝国の変容と安定～
 - (1) モンゴル帝国と朝鮮「婚姻関係・政治体制」による統治
 - ① モンゴル帝国と高麗国の抗戦から講和
 - ② 高麗国の属国化と姻戚関係による統治
 - ③ モンゴル帝国・トルガクの派遣とケシク参入の仕組みによる統治
 - ④ 一国であり一省の高麗国
 - (2) モンゴル帝国と日本の関係性
 - ① モンゴル帝国と日本の接点 ② 元寇におけるモンゴル・高麗国の視点
 - ③ モンゴル帝国の貿易と日本 ④ 日本とベトナムへの元寇の関連性

論文目次

3. モンゴル帝国の国家運営

- (1) 元と4カン国の成立
- (2) 拡大を支えた組織運営構造
 - ① モンゴル帝国を結び付ける「チンギス統原理」
 - ② モンゴル帝国民の行動を司る「ヤサ」
 - ③ 共同体としての意思決定機関「クリルタイ」
 - ④ 安全保障策としての「族外婚制度」
 - ⑤ 効率的組織運営「千戸制」
 - ⑥ 縦横の連帯を育む「ケシク」
- (3) 多様な民族のモンゴル帝国への貢献
 - ① ウイグルもルーツは遊牧民 ② 遊牧国家をまわす手腕
 - ③ 多言語と外地情報に通じ、交渉力にも優れたグローバル人材
- (4) モンゴル帝国の拡大を促進したオゴデイの政治
- (5) クビライ・カンのチベット仏教受容政策：問題解決力と情報力

14

論文目次

4. 中華統治の正統性と共通善

- ～漢民族ではなく中華民族であることの意味と意義～
- (1) 「西洋」に比した「東洋」の行動様式に関する問題意識
- (2) 東西世界の論理・価値観とグローバル課題
- (3) 歴代中国王朝の正統性要件の意味と東アジア世界構成員の処し方
- (4) 夷狄モンゴル帝国の統治原理～契丹社会文化の影響
- (5) 日本の歴史と東アジア世界の地域概念
- (6) まとめとして

5. おわりに ～モンゴル帝国が現代にもたらすもの～

- (1) 地球規模の天災と大元ウルスの解体
- (2) ポストモンゴル期の帝国
- (3) 経済重視による「ゆるやかな統治」
- (4) 「イル(仲間)になる」思想と「文化不干渉」に学ぶ

15

論文目次

- 補足:「琉球」が指す範囲の変遷
- 年表
- 参考文献
- 年間スケジュール
- フィールドワークスケジュール
- フィールドワーク報告要旨

16

1. 13世紀前半 初代チンギス・カーンの時代～モンゴル帝国の樹立と拡張～

チンギス・カーン率いるモンゴル帝国の戦略と戦術

3つの**戦略**
5つの**戦術**

鉄資源の安定確保
鉄の採掘場の複数確保
リスク回避

騎馬軍団の機動力向上
装備の重量を減らし
軽装騎兵
コストダウン

シフト・モバイル
古くから伝わる
遊牧民の知恵

高原内生産の活性化
モンゴル高原内に
幹線道路の整備
ネットワーク

チンギス・カーンは、多種多様な戦略・戦術を駆使し、
「イルになる」と言う言葉の通り、対等な仲間を増やしていき、
モンゴル高原とモンゴル民の平和と安定した繁栄を目指した。

17

1. 13世紀前半 初代チンギス・カーンの時代～モンゴル帝国の樹立と拡張～

現代との繋がり

「ノマド化」

国境が意味を無くしモンゴル帝国の支配下内を安全に自由に行き来することのできる環境。



「域内貿易に似た制度」

当時のモンゴル帝国では関税が無く、販売時に商品価格の30分1の税をかけるだけの緩い税制。

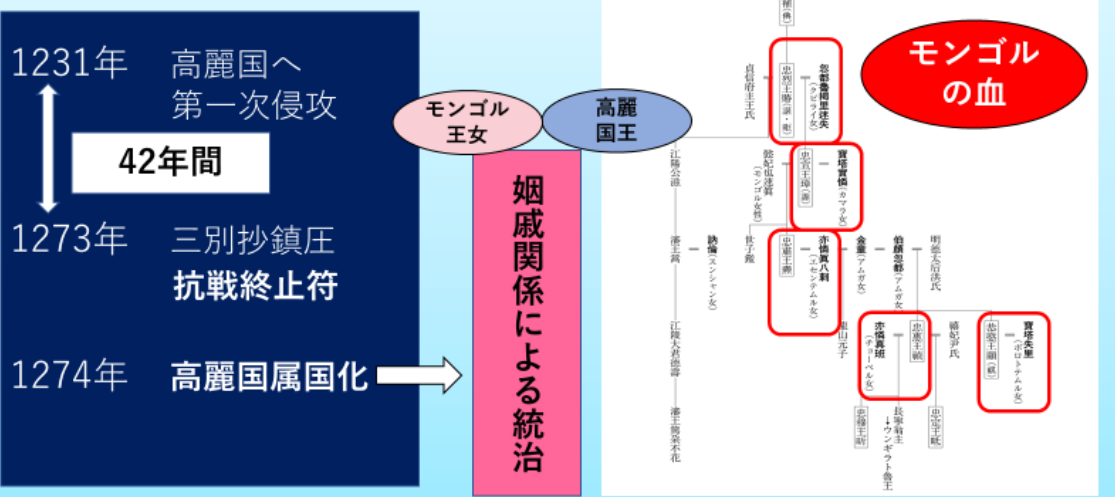


ノマド化、域内貿易の2つは現代のEUと非常によく似ている

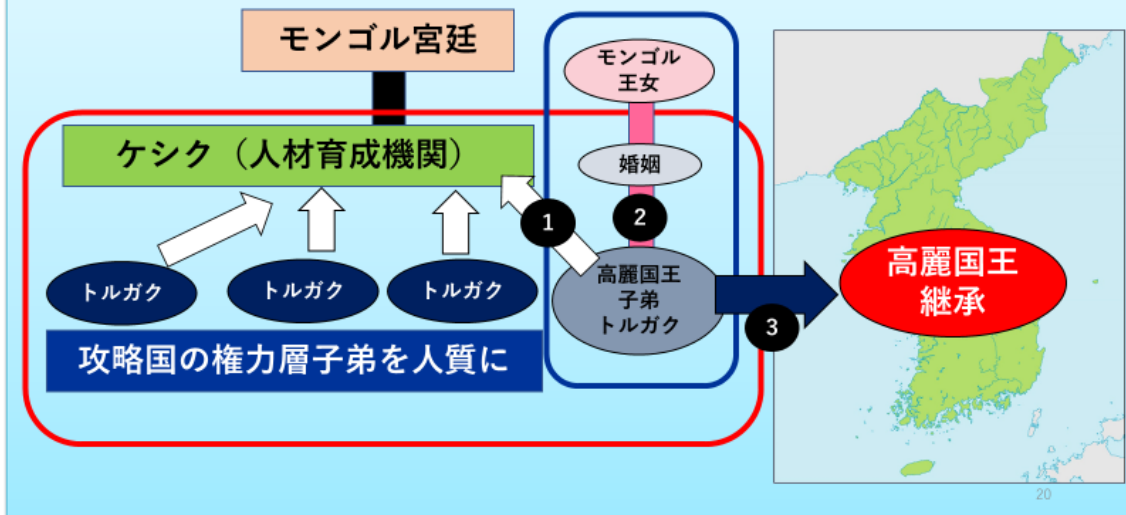
18

2. 13世紀後半 5代クビライ・カーンの時代 ～モンゴル帝国の変容と安定～

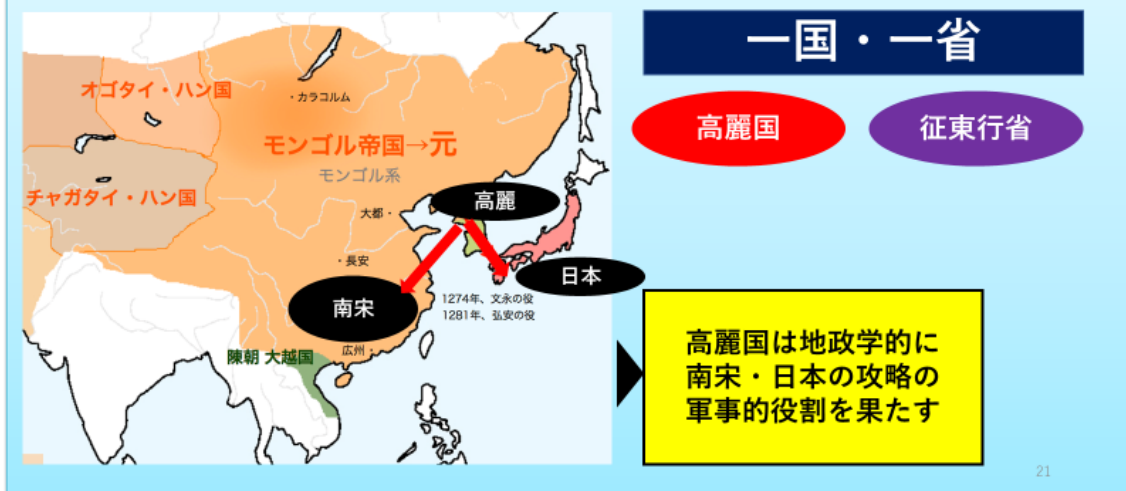
モンゴル帝国と朝鮮「姻戚関係」



2. 13世紀後半 5代クビライ・カーンの時代 ～モンゴル帝国の変容と安定～
モンゴル帝国と朝鮮「トルガク・ケシクの仕組み」

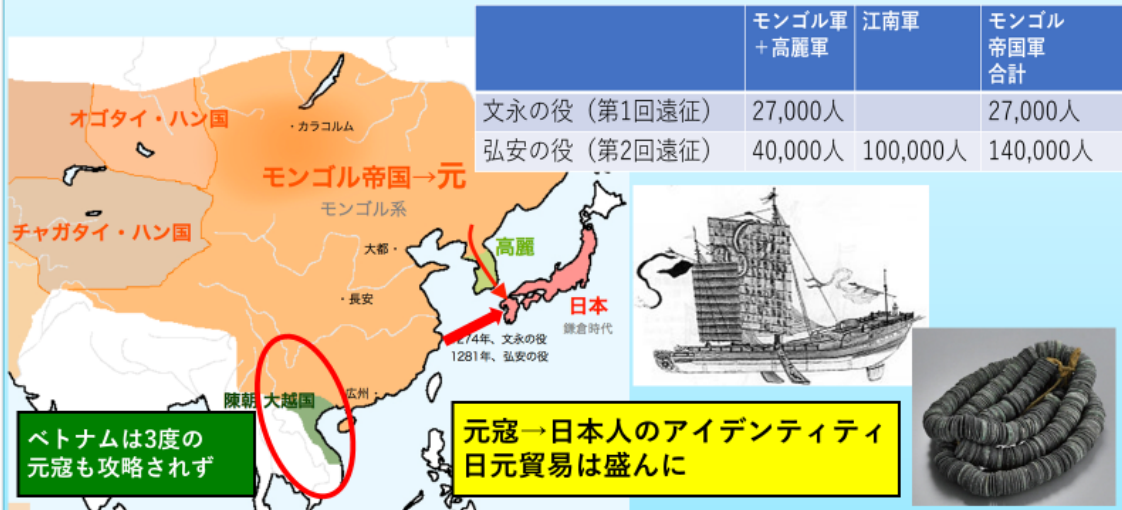


2. 13世紀後半 5代クビライ・カーンの時代 ～モンゴル帝国の変容と安定～
モンゴル帝国と朝鮮「一国・一省」



2. 13世紀後半 5代クビライ・カーンの時代 ～モンゴル帝国の変容と安定～

モンゴル帝国と日本「蒙古襲来・（「元寇」文永の役・弘安の役）」・「貿易」



3. モンゴル帝国の国家運営



23

3. モンゴル帝国の国家運営

第3節 多様な民族のモンゴル帝国への貢献

□ 秀でた民族や個人の才能を活用するタレントマネジメント

- ・武人としてのモンゴル
- ・財務力のイラン系ムスリム
- ・情報を司るウイグル人リーダーと多様な人種
- ・現地に精通する在地有力者

□ 互恵関係でモンゴルを下支えしたウイグル人資産

- ・遊牧民をルーツとする高い共通理解
- ・食糧の安定的調達を確保する、オアシス民という自給自足力
- ・唐の政治を動かした高度な政治技術
- ・東西交易拠点で獲得した語学文化、各国事情、通商・交渉力

第4節 モンゴル帝国の拡大を促進したオゴデイの政治

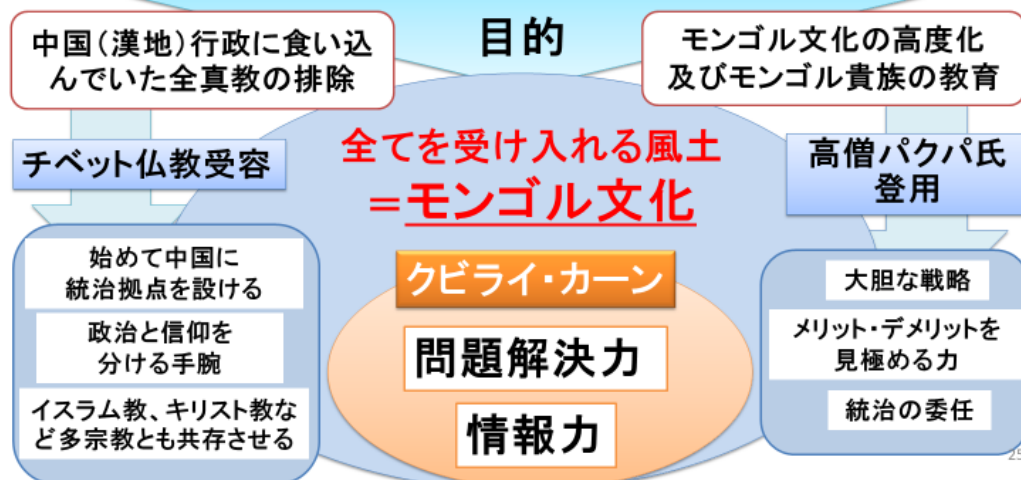
□ 帝国ネットワークの拡大を支えた、情報・人・モノの流通の迅速化

- ・法令「ヤサ」の成文化
- ・徴税制度の導入
- ・情報通信網である駅伝制「ジャムチ」の整備
- ・外征手法の変容～若年戦士徴兵による軍事機動力向上と遠征地先への定住化～

24

あらゆる文化を受け入れるモンゴル文化

クビライ・カーンのチベット仏教受容政策



4. 中華帝国統治の正統性と共通善～漢民族でなく中華民族であることの意味～

	東洋世界			西洋世界
～中世	東洋文明圏	東アジア世界(冊封体制)	インド	西アジア
近世	中華帝国の天下観 多民族国家を束ねる力学＝「漢民族でなく中華民族」 有機的にゆるやか(ファジー)に連結			西洋文明圏 共通善 (アリストテレス)
	漢字文化圏			16C～大航海時代 (布教と植民地拡大)
	政治圏(冊封体制) ・儒教(漢字媒介) ・漢訳仏教 ・律令 冊封(皇帝と首長の関係)＝ 天朝体制 ・朝貢(君臣関係) ・盟約(父子/兄弟の擬制的家族関係) ・互市(国際貿易)			天朝体制＝天下統治システム 統治者の要件＝ 権力者「皇帝」 ＋ 有徳者「天子」 民族の違い 漢民族 漢民族以外(モンゴル族) 地域の違い 中心(華) 外縁(夷) 文化の違い ※夷による中国 支配の正統化 礼・義の有無 有徳で礼儀を知る人であれば漢民族 でなくても天子となれる。
近代	帝国主義と植民地化(西洋のアジア進出、西洋の価値観)			
現代	中華帝国の復興＝国家の上位にある天下を前提とした 天下システム(民族・宗教を超越した公共心)＝ 天朝論理			グローバル資本主義(米国中心)＝世界の一元化
全員参加型秩序	東洋の「共生」＋西洋の「民主・正義」＝全員参加型の「共通善」			

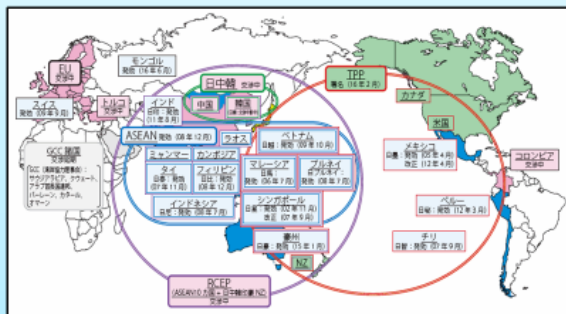
出展：進出展室

26

おわりに モンゴル帝国が現代にもたらすもの



出展：内閣府HP



出展：経産省HP

1. 「経済連携」による「平和と安定」

27

おわりに イル（仲間）になる思想と文化不干涉



出展：世界の歴史マップ

日本企業が学ぶ点

多様性の受容

現地化

2. リーダーの「思想」と「視野」

28

文献研究 1.

13世紀前半 初代チンギス・カーンの時代 ～モンゴル帝国の樹立と拡張～

(1)「種族や信仰、風俗による差別のない、世の中の創造」

チンギス・カーンの征服戦争で重要なのは自らの信仰や習慣、つまり固有の文化を征服地に広めようとしなかった。

史上初の世界という概念の発見であり、最古のグローバリズム。

その理念はそれまでの征服者とは全くの逆であった。



(2)「安上がりの統治と経済政策」

無抵抗に帰順した相手には広範な自治権を与え、
低率の納税と治安の安定以外は多くを求めなかった。

(3)「大義ある絶対的存在」

虐殺は古来からの戦争のルールであり、モンゴル軍の戦争のやり方は、それ迄の戦争と大きく異なった。

自分達が世界を支配すべき天命を受けた種族であると確信していた。

アラビア伝



中国伝



チンギス・カーン像 29

文献研究 1.

13世紀前半 初代チンギス・カーンの時代 ～モンゴル帝国の樹立と拡張～

(3) 絶対服従

虐殺は古来からの戦争のルールであり、モンゴル軍の戦争のやり方がそれまでの戦争と大きく異なったのは、自分たちが天から世界を支配すべき命令を受けた種族であると確信していたのである。1206年シャーマンであるコゴチェ・テブ・テンゲリは神がかりになって次の天命を宣言した。「永遠なる天の命令であるぞ。天上には、唯一の永遠なる天の神があり、地上には、唯一の君主たるチンギス・カーンがある。これは汝らに伝える言葉である。我が命令を地上のあらゆる地方のあらゆる人々に、馬の足が至り、舟が至り、使者が至り、手紙が至る限り、聞き知らせよ。我が命令を聞き知りながら、従おうとしない者は、眼があっても見えなくなり、手があっても持てなくなり、足があっても、歩けなくなるであろう。これは永遠なる天の命令である。」

チンギス・カーンも全モンゴル人もこの天命を堅く信じ、天命に導かれ世界征服に乗り出したのである。チンギス・カーンの子孫たちも、西ヨーロッパやエジプトの君主に送って降伏を促す手紙の中で、この天命の文句を引用している。この天命を信じるモンゴル人にとって、無条件で降伏しない者は、天に逆らう極悪人であり、極悪人を殺すことは、天に対する神聖な義務を果たすことだったのである。

30

文献研究1. 13世紀前半チンギス・カーンの時代～モンゴル帝国の樹立と拡張～

生年と没年

チンギス・カーンの生年についてはいくつかの説がある。

『蒙鞬備録』では1154年、『集史』では1155年、『元史』では1162年、『聖武親征録』では1167年のように史料によって異なる。だが没年は1227年で4つの史料で一緒ではあるが死因と死んだ場所についても不明な状態である。史料によっての生年の違いは東西で異なる暦を使用していたからである。東西で共通した暦を使用したのは、元の時代からである。元の時代に使用されていた暦は授時暦というものであった。

戦略と戦術

チンギス・カーンが数多くの戦いに勝利を収めることができたのは、「騎馬軍団の機動力向上」、「鉄資源の安定確保」、「高原内生産の活性化」の3つの戦略、遊牧民リテラシーに基づく「シフト」「コストダウン」「モバイル」「リスク回避」「ネットワーク」の戦術を上手に駆使したからで、5つの戦術に共通して遊牧民の知恵がある。この5つの知恵など遊牧生活の生きる知恵をまとめた『ト・ワン』の教えというあり、この知恵は数千年前から遊牧生活のエッセンスとして遊牧社会のリーダーが修めるべき事柄である。

31

文献研究 1.

1 3 世紀前半 初代チンギス・カーンの時代 ～モンゴル帝国の樹立と拡張～

(4) 遊牧民の文化と社会はどのようなものであったか

伝説

モンゴルの始祖伝説によると、一族の始祖は狼と鹿であるという。

モンゴルの歴史書である「元朝秘史」は「上天(たかまのはら)より命(みこと)ありて生まれたる蒼き狼ありき。その妻なるなま白き牝鹿ありき」という1文で始まる。その2人のシンボルが夫婦となり、ブルカン岳の放牧地で子をなして、それがテンジンへとつながる。

遊牧民の知恵と掟

1つの部族に力が集中しないように、力関係を保つ傾向がある。

戦況が有利なら前進し、不利ならば後退して、遁走することも恥じない。

家畜には馬、牛、羊が多い。水や草のよいところを求めて移り歩き、都市も固定家屋も田畑も持たない。しかし、それぞれの領分の土地はある。

強い男はみな騎兵となり、平和時には家畜の世話をし、鳥や獣を射ることを生業とする。緊急時には全員が軍人となって戦争に出かける。壮年で力強い者を尊敬し、弱い者をいやしむ。父が死ぬと息子は義母と結婚する。兄弟が死ぬと、その寡婦と結婚する。

紀元前以来生活形態は2000年以上も変わっていない。

なぜ、農業をせず、放牧をしてきたかという点、年間の雨量が極端に少なく、農業に向かないのと、表土層が薄くてもし鋤き返すと、表土を吹き飛ばし、砂漠化する恐れがあるためである。自然環境に適した持続的な暮らし方といえる。また、放畜も、一ヶ所の草を食べつくさぬよう、家屋をたたんで、次のところに移住するというのが最も合理的である。

大きく分けて2つの遊牧形態があったと考えられている。

1つは個々の世帯(アイル)が孤立して遊牧するアイル形態、もう1つが有力な首領のもとに多数のアイルが大群をなして、遊牧するクリエン形態である。

貧乏な普通の農民より、遊牧民の方が生活に余裕があり、十分に栄養を取っている。

また、遊牧民は気位が高く、土地に縛りつけられて自由のない、農民の暮らしを軽蔑する。

32

文献研究 1.

1 3 世紀前半 初代チンギス・カーンの時代 ～モンゴル帝国の樹立と拡張～

(5) チンギス・カーンの思想とビジョンは

①テムジン名前の由来

モンゴル族にある新生児誕生というときに、直近で部族や家族が体験したことになんて命名するという習慣があり、父エスゲイと妻ホエルンの子は、タタールの敵将の名になんて、テムジン(最高の鉄で作った人)と命名される。

しかし、父エスゲイはタタールにより暗殺されてしまう。部族間のわだかまりをようやく乗り越えて登場したチンギス・カーンは

「地の上に境界なく、人の間に差別なし」というテーゼを掲げる。

その実現のために世界征服をしたのではないかと考えられる。

②人種や信仰、風俗による差別のない、世の中の創造

チンギス・カーンとその傘下のモンゴル人が豊かに暮らすだけでなく、中国の一部か西夏か、ウイグル王国のどれかを占領すれば十分だった。契丹族の遊も女真族の金もそれで満足した。チンギス・カーンの征服戦争で重要なのは自らの信仰や習慣、つまり固有の文化を征服地に広めようとしたことだ。

アレクサンダー大王もローマ帝国も、イスラム国家や近代キリスト教徒もみな、自国の信仰、文化、制度を征服地に広げようとした。

ユーラシア大陸を征服することで、境界をなくし、人の間に人種や信仰、風俗による差別のない、世の中を作ろうとした。史上初の世界という概念の発見であり、最古のグローバリズムでもある。その理念はそれまでの征服者とはまったくの逆であったという点で特筆すべきことである。

33

文献研究 1.

13世紀前半 初代チンギス・カーンの時代 ～モンゴル帝国の樹立と拡張～

(6) 生年と没年

チンギス・カーンの生年についてはいくつかの説がある。
『蒙韃備録』では1154年、『集史』では1155年、『元史』では1162年、『聖武親征録』では1167年のように史料によって異なる。だが没年は1227年で4つの史料で一緒ではあるが死因と死んだ場所についても不明な状態である。史料によっての生年の違いは東西で異なる暦を使用していたからである。東西で共通した暦を使用したのは、元の時代からである。元の時代に使用されていた暦は授時暦というものであった。

(7) 戦略と戦術

チンギス・カーンが数多くの戦いに勝利を収めることができたのは、「騎馬軍団の機動力向上」、「鉄資源の安定確保」、「高原内生産の活性化」の3つの戦略、遊牧民リテラシーに基づく「シフト」「コストダウン」「モバイル」「リスク回避」「ネットワーク」の戦術を上手に駆使したからで、5つの戦術に共通して遊牧民の知恵がある。この5つの知恵など遊牧生活の生きる知恵をまとめた『ト・ワンの教え』というあり、この知恵は数千年前から遊牧生活のエッセンスとして遊牧社会のリーダーが修めるべき事柄である。

34

文献研究 2.

13世紀後半 5代クビライ・カーンの時代 ～モンゴル帝国の変容と安定～

(1) 「モンゴル帝国 × 高麗国」

高麗国内の武人政権と文人(王廷)間の内政問題と相まって抗戦は長期化。

クビライ・カーン即位後は講和路線へ一気に転換→高麗国属国化。



(2) 「モンゴル帝国 × 日本」

クビライ・カーンの国家構想・経済統治の為に南宋(中国)攻略は大命題。

南宋攻略の一環と、日本の属国化(経済交流)を目的とした2回の日本遠征(元寇)。



文献研究 2.

1 3 世紀後半 5 代クビライ・カーンの時代 ～モンゴル帝国の変容と安定～

(3) 日本と「ベトナム」への元寇

南宋攻略を目的として、大越国(ベトナム)への遠征は、1258年・1285年・1288年の3回に渡った。

ベトナムは「3度の元寇」「中越戦争」「ベトナム戦争」と、13世紀から20世紀に至るまで「大国」との戦火に抗ってきた歴史がある。

モンゴル帝国に攻略されることがなかった日本とベトナム。
元寇により国家・国民のアイデンティティが形成された。

3度目の日本遠征が実施されなかった背景に
ベトナム遠征があった。



36

文献研究 3.

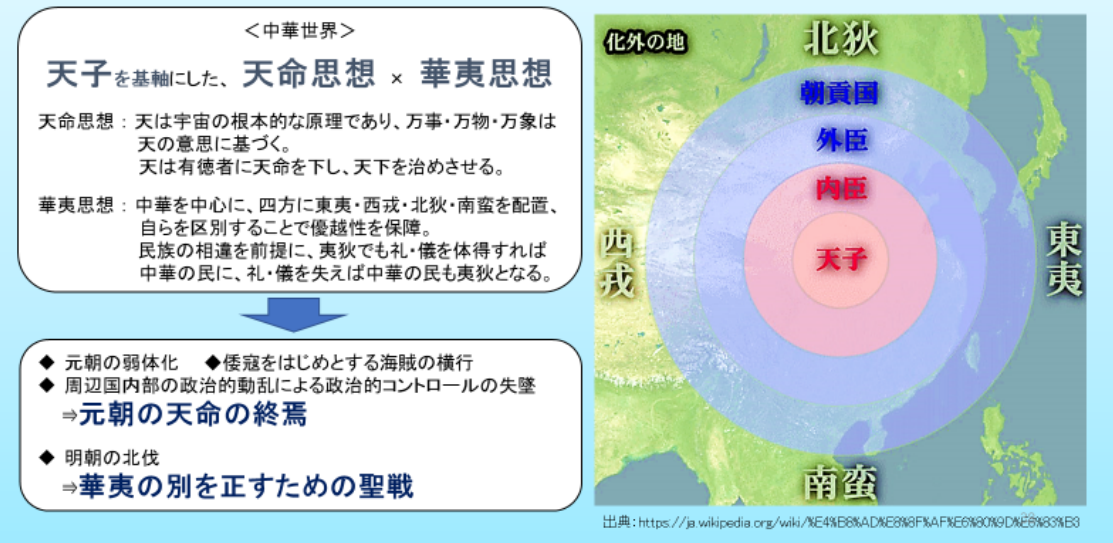
モンゴル帝国における宗教観

- チンギス・カーンの下には「テブ・テングリ(天なる神)」と呼ばれるシャーマンがいたという記録が残っている。
- 元朝初代皇帝クビライ・カーンは1260年に皇帝に即位すると同時に、かねてより尊敬していたチベットの僧バクパを国師に任命。
- 国師バクパ(1235～1280年)は、チベット仏教のサキャ派の創始者の一族であったため、モンゴル宮廷においてサキャ派が決定的な力を持つようになった。
- これはモンゴル史に初めて仏教が正式に登場する契機になった。
- しかし、チベット仏教とは一般民衆のためのものではなく、あくまで宮廷内のモンゴル貴族たちのものであった。

37

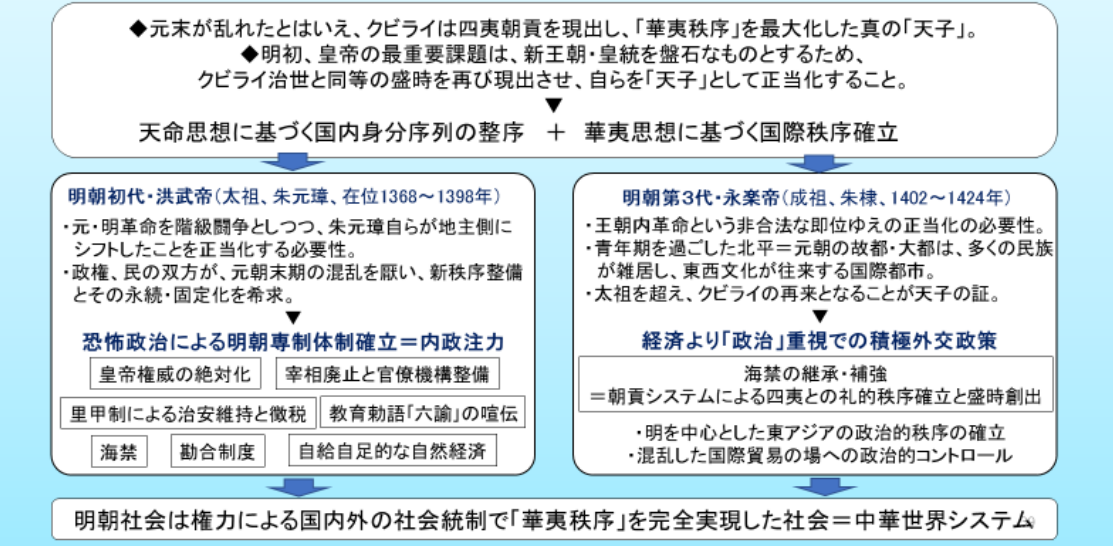
文献研究 4.

明朝(1368～1644年)～モンゴル帝国からの連なり



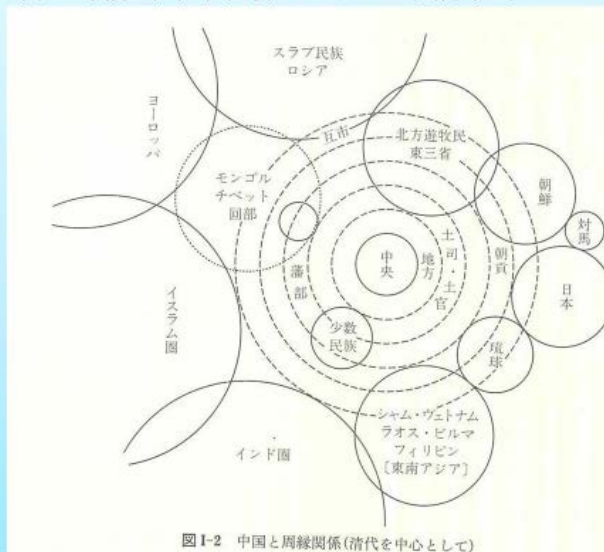
文献研究 4.

明朝(1368～1644年)～モンゴル帝国からの連なり



文献研究 4.

清朝(1616～1912年)へも続く、中華世界システムの国際秩序



出典: <http://www.kanetani.com/blog/wp-content/uploads/2013/08/20130827A2-%E3%83%B0%E2%9F%92.jpg>

40

文献研究 5. モンゴル帝国と中国の貿易

(1)「南海貿易の活性化」

元朝(1279年～1368年)に於いては、南海貿易を急速に活性化し、インド西海岸にまで及ぶ10か国との朝貢貿易が行われ、貿易商の利潤は莫大、国家財政にも寄与。

(2)「16世紀大航海時代の銀流通への扉は、モンゴル帝国・クビライ・カーンの時代から」

13世紀ユーラシアの通商手段は「銀」。元朝期には、銀が共通通貨となり銀経済へ。クビライ・カーンは貿易による経済発展と銀を与える(賜与)ことで、モンゴル帝国全土に影響力を行使。

(3) 明朝(1368年～1644年)「皇帝・ダイミン・カーン」はモンゴル帝国システムである「経済発展」と金品を与える「賜与(シヨ)」を継承

明朝皇帝は、「ダイミン・カーン」と称し、周辺国に軍隊制度の「衛」所を与え自帝国の一員であると思わせ賜与を与えた。ティムール朝やオスマン朝も遣明使節を送り込んでいた。

41

文献研究 5.

モンゴル帝国と中国の貿易

(4)「明朝・3代 永楽帝の視野」

永楽帝は、明の3代皇帝。初代・洪武帝の第4子。在位は1402～1424年。
シベリア・満州・モンゴリア・チベット・ベトナム・アフリカ東海岸までを見据え、
漢民族国家ではなく、かつての、モンゴル帝国の規模の継承を視野に入れていた。
永楽帝はクビライ・カーンを模倣した、クビライ信者ともいえる。



(5)「鄭和の大航海」

永楽帝は鄭和を西洋に派遣。1405年～1433年に7回の大航海。
鄭和は明朝の宦官。代々イスラム教徒の家系。
第一回目は、8,000トンの大船62隻・27,000人の大船団。
明の造船技術により、艦隊の船の大きさは大型船で、100年後の大航海時代の外洋船の5倍以上の規模。
コロンブス最大船「サンタ・マリア号」は185トン。ポルトガル ヴァスコダ・ガマ 4隻・170人・120トン。
比較にならない大船団。
目的は、交易と朝貢の範囲の拡大。ティムール朝（モンゴル帝国の流れを汲む）の脅威の調査目的も。
鄭和の大航海により、東南アジアを中心とする国際貿易は急速に活性化した。

42

文献研究 5.

モンゴル帝国と中国の貿易

(6)「華人・華僑のルーツ」

現在の華人・華僑の人口は、世界6,000万人・東南アジア3,500万人居る。
モンゴル帝国・元の時代に漢民族が南に押しやられ、明の時代・鄭和の大航海以降に交易・朝貢を
経て東南アジアに中国人が広がっていったルーツがある。

(7)「明朝と日本」

鄭和の大航海の前年、1404年に永楽帝が日本に勘合を与え、「日明勘合貿易（朝貢）」がはじまる。
明より大量の銅銭「永楽通宝」が導入される。
16世紀半ば、織田信長の旗印は「永楽通宝」であり、継続して流通。

モンゴル帝国と17世紀・現代とのつながり

(1)「13世紀モンゴル帝国と16・17世紀の世界交易システム」

17世紀、石見銀山（最盛期の産出量38t/日本200t）など銀を通じた交易が盛んに。
既に13世紀にはモンゴル帝国による「銀」をめぐる、ユーラシア交易システムが活性化。

43

文献研究 6.

モンゴル帝国と中国の交通.

13世紀前半～元朝末期(～1368年)

陸と海の巨大帝国

ユーラシア大陸はモンゴルにより、東は日本列島から西はブリテン島まで 広く連鎖の環のなかにつながれた。まず、海と陸への起点である、巨大な都市内港機能を持つ大都が起点となって、人と物が壮大なスケールで動くように設計された。モンゴルはもとより、陸上を舞台とするイラン系ムスリム商業勢力と結びついていて、大都から、帝国全土に向けて、放射状に公道を整備し、大都と上都との間には4本の幹線が敷設され、その上都には、かつてカラ・コラムに集まっていたジャムジ・ルートが新たに仕立てられ、内陸交通網の起点となった。さらに華北の運河システムも通州に集まるように、再開削され、中国本土の南北をつなぐ大運河も復活させた。大都は上都とカラ・コラムをサブターミナルとして水運システムの上では、通恵河を通じて通州に至り、通州からは白河によって海港の直沽に至る。そこから、泉州、広州などの諸都市、さらには東シナ海、南シナ海、インド洋に至る海上ルートとも結びついた。すでに8、9世紀より中国本土の港湾諸都市には、アラブ・イランの商船がしきりに来航していたが、政府みずから率先して海洋を組織し、海外貿易に打って出た。モンゴルを中心に安定した国際環境の下で、東西の通商、往来、交流は異常なほどの活況に向かい、ユーラシア大交易圏ともいえる世界規模のまとまりが姿をあらわした。

東では泉州・広州など、西ではベルシャ湾に臨むホルムズ、その間では、スマトラ島のパレンバンやボルネオ島のブルネイ、インド南端に近いマラバールやマアパールの海岸諸港、そして北では黒海沿岸のスタク、アゾフ海に面するタナなどの港町が繁栄する。

文献研究 6.

モンゴル帝国時代の交通網と一帯一路

出典:ブリタニカ国際大百科事典



モンゴル帝国・朝鮮・日本・中国・世界 年表1.

	モンゴル(帝国)	朝鮮(高麗、李朝)	日本	中国(北宋～清)	世界
1126年		金に服属			
1127年				金が北宋を滅ぼす	
1185年			璦ノ川の戦い		
1192年			鎌倉幕府成立		
1206年	チンギス・カンがモンゴル帝国を樹立				デリー＝スルタン朝成立
1209年	西夏に侵攻(1227年滅亡)				フランチェスコ修道会創設
1211年	金に侵攻(1234年滅亡)				
1214年				開封に遷都	
1215年					ゴール朝、ホラズム帝国に滅ぼされる
1218年	高麗と共に黒契丹を制圧	モンゴル帝国と共に黒契丹を制圧			
1219年	ホラズム帝国に侵攻		都実朝が暗殺される		
1221年			六波羅探題設置		
1227年	チンギス・カン死亡		道元、曹洞宗を開く		
1229年	オゴデイ即位				
1231年	高麗に侵攻	モンゴル帝国の侵攻を受ける			
1232年		都を開京から江華島に移す	御成政式目制定		
1234年				オゴデイに滅ぼされる	
1240年	キエフ・ルーシ諸侯国を征服				マリ王国建国
1241年					ワールシュタットの戦い
1242年	オゴデイ死亡				
1251年	モンケ即位				
1253年			日蓮、日蓮宗を開く		
1256年					ドイツ、大聖堂時代
1259年	モンケ死亡	モンゴル帝国(元)に属国化		クビライが鄂州を包囲	

モンゴル帝国・朝鮮・日本・中国・世界 年表2.

	モンゴル(帝国)	朝鮮(高麗、李朝)	日本	中国(北宋～清)	世界
1260年	クビライ、アリクブケ共に即位				
1270年		三別抄の乱(～73年)			
1271年	国号を元とする			クビライが国号を元とし北京に遷都	
1273年				元が襄陽を陥落させる	
1274年	第1回日本侵攻(文永の役)	日本侵攻に協力	文永の役		
1276年				元が臨安を陥落させる	クビライが中国全土統一
1279年				南宋滅亡	
1281年	第2回日本侵攻(弘安の役)	日本侵攻に協力	弘安の役		
1294年	クビライ死亡				
1350年			観応の乱		ペストの大流行
1351年				紅巾の乱(白蓮教徒の乱)	
1368年	北元成立				
1370年					ティムール朝成立
1392年		高麗滅亡	南北朝の統一		
1404年			明と勘合貿易始まる	日本と勘合貿易始まる	
1410年	明の侵攻を受ける(～1414年)				
1446年		訓民正音(ハングル)制定			
1453年					ビザンツ帝国滅亡
1533年					インカ帝国滅亡
1549年			フランシスコ・ザビエル来航		
1550年				庚戌の乱	
1592年		壬申・丁酉の倭乱(～1598年)	文禄・慶長の乱(～1598年)		
1602年					東インド会社設立
1603年			江戸幕府成立		
1616年				清建國	
1634年	滿により北元が滅亡				
1637年		清に服属	島原の乱		
1640年					イギリス革命開始
1683年				中国統一	

謝辞

最後に、本論文を作成するにあたり、インターゼミ主宰の寺島実郎学長より毎回のゼミにおいて高い視座と広い視野からの多くの助言を頂きました。

アジアダイナミズム班の指導教員である金美德教授、水盛涼一准教授にはテーマ設定から文献研究、フィールドワーク、論文執筆に至るまでの研究の大きな指針と共に、歴史から紐解く現代的意義、アジア・ユーラシアを貫く横軸と時間という縦軸からなる繋がり、現代の私たちがもつべき視座について、大胆且つきめ細かい指導を頂きました。

また、久恒啓一副学長はじめインターゼミの多くの先生方、卒業生の皆さまから助言頂きました。

京都のフィールドワークにおいては、国際日本文化研究センター・榎本渉准教授、龍谷大学文学部・村岡倫教授、関西大学東西学術研究所・藤原崇人研究員にはそれぞれの研究からの深い知見、発見、見解を惜しみなく教示頂き、東福寺・爾英晃執事からは文献研究だけでは得られない歴史的背景を教示頂きました。

また、グループワーク・フィールドワークにご参加頂きました卒業生の塚原啓弘氏、成田晋也氏、和泉昌宏氏、王星星氏、田村英和氏に感謝申し上げます。

この場を借りて、本論文を執筆するにあたりご協力頂いた全ての皆さまに感謝の意を表します。誠にありがとうございました。

2017 年 1 月 27 日

多摩大学インターゼミ アジアダイナミズム班一同